石見銀山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

石見銀山遺跡発掘調査概要23

—昆布山谷地区・宗岡家住宅・町並み保存地区—

2015年3月

島根県大田市教育委員会

石見銀山

Iwami-Ginzan Silver Mine Site

石見銀山遺跡発掘調査概要23

●

―昆布山谷地区・宗岡家住宅・町並み保存地区―

2015年3月

島根県大田市教育委員会

序

世界遺産・石見銀山遺跡は16世紀から20世紀にかけて採掘から製錬までが行われた鉱山跡を中心とする、山城跡や街道、港湾や港町などからなる複合遺跡です。

考古学的な遺跡としての石見銀山遺跡に関する発掘調査は、昭和58年度に始まり、昭和63年から発掘調査が継続、その後県市の一体的な調査が進み、平成14年にはその成果として、石見銀山遺跡の柵内を主な範囲とする史跡の追加指定が成りました。

今年度は、銀山地区内の昆布山谷と重要伝統的建造物群保存地区内の宗岡家住宅敷地の発掘調査を実施しました。併せて史跡・伝建地区内において小規模な掘削を伴う現状変更行為の際に立会調査と遺構・遺物の記録作成を随時実施したところです。

昆布山谷地区は、銀山の開発初期から利用されている地域であり、銀山の開発と居住の様相を明らかとすることを目的として調査を進めているもので、詳細な分布調査を基に調査地点を選んで発掘調査を実施しています。

本年度の調査では、谷の中ほどで岩盤加工遺構が良好に保存されていることが明らかとなり、石垣で平坦面を構築している現在の地形は、18世紀の後半以降に形成されたことも明らかとなっています。具体的な遺構としては18世紀末～19世紀初頭の建物遺構が２か所、明治期の藤田組に関連する建物遺構が１か所検出されています。

宗岡家住宅の調査は住宅の保存整備事業に先立ち実施したもので、本年度は敷地の東部分を対象とし、納屋や庭施設の跡など、現存しない施設の遺構や、宗岡家以前の遺構が検出され、敷地内における地形の形成過程が一部明らかとなるなどの成果が得られたところです。

立会・試掘調査は、５か所で実施し、江戸時代初期の遺物を伴う遺構や、中世須恵器片や古瀬戸瓶・瓷器系の甕などの遺物とともに柱穴や土坑などの遺構が検出され、初出の資料となりました。

宗岡家住宅と昆布山谷地区においては、発掘調査の現地説明会を開催し、調査成果の説明と普及をはかったところです。

発掘調査にあたっては土地所有者、調査指導者、地元関係者、作業員の皆さんのご理解と多大な協力を頂き誠にありがとうございました。

平成２７年３月

島根県大田市教育委員会

教育長　**大　國　晴　雄**

例　言

１．本書は、島根県大田市大森町に所在する史跡石見銀山遺跡の発掘調査概要である。

２．調査は国庫補助事業として大田市教育委員会が事業主体となって実施した。

３．本書の内容は、平成 26 年度の昆布山谷地区 , 宗岡家住宅及び、町並み保存地区地区についての調査概要をまとめたものである。

４．調査体制は下記のとおりである。

〔石見銀山遺跡調査整備活用委員会〕

勝部　昭（元島根県教育委員会教育次長）　黒田乃生（筑波大学大学院准教授）
高安克己（島根大学名誉教授）　田邉征夫（(公財) 大阪府文化財センター理事長）
田中哲雄（元東北芸術工科大学芸術学部教授）　中塩　弘（ＤＯＷＡホールディングス㈱取締役）
仲野義文（石見銀山資料館館長）　中村俊郎（中村ブレイス㈱代表取締役社長）
村田信夫（大田市伝統的建造物群保存地区保存審議会委員）
和上豊子（石見銀山ガイドの会前会長）

〔石見銀山遺跡調査専門委員会〕

井上雅仁（島根県立三瓶自然館学芸課課長代理）　大橋泰夫（島根大学法文学部教授）
勝部　昭（元島根県教育委員会教育次長）　黒田乃生（筑波大学大学院准教授）
田邉征夫（(公財) 大阪府文化財センター理事長）　中西哲也（九州大学総合研究博物館准教授）
仲野義文（石見銀山資料館館長）　原田洋一郎（東京都立産業技術高等専門学校准教授）
村上　隆（京都美術工芸大学教授）

〔事務局〕　大田市教育委員会石見銀山課
〔調査員〕　山手貴生・新川　隆・尾村　勝　（大田市教育委員会石見銀山課）
〔遺物整理〕　高村玲子・井上伸子・浅野美貴
〔調査指導〕　文化庁記念物課・奈良文化財研究所
島根県教育庁文化財課・世界遺産室・埋蔵文化財調査センター

５．挿図の縮尺は、図中に示した。

６．挿図中の方位は世界測地系の軸方位である。またレベル高は海抜高を示す。

７．Fig. 1 ・Fig. 2 は国土交通省国土地理院発行の地形図を縮小編集し、一部加筆して使用した。

８．本文中に使用した略号は下記のとおりである。

ＳＢ－建物跡　ＳＤ－溝跡　ＳＫ－土坑　ＳＷ－石垣・石積み　ＳＸ－炉跡、特殊遺構　ＳＬ－焼土面

９．挿図中のマンセル表記及び土色は農林水産省技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』によった。

10. 調査中及び報告書作成段階で、下記の方々のご指導・ご教授を賜った。（50 音順、敬称略）

大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館名誉顧問）・大橋泰夫・中村唯史（島根県立三瓶自然館）

11. 宗岡家住宅における科学調査については、文化財調査コンサルタント㈱に委託して実施し、調査成果は第５章に掲載した。

12. 本書の執筆は第２章第１節を尾村が、第４章第１節、第２節第３項を新川が、第５章を渡邉正巳 (文化財調査コンサルタント㈱) が、それ以外を山手が行い、編集は筆者協議の上、山手・新川が行った。

13. 出土資料及び実測図・写真などは大田市教育委員会で保管している。

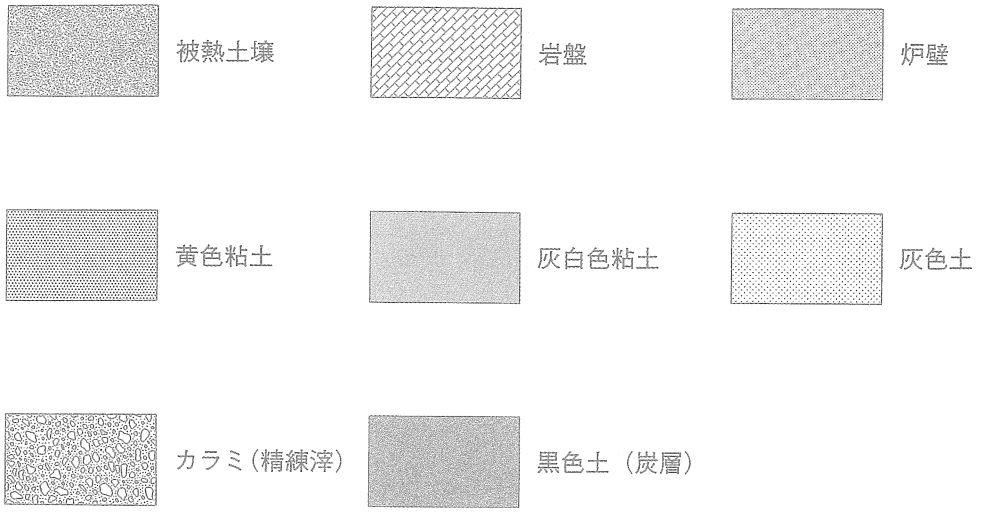
凡　例

1．図版の表現

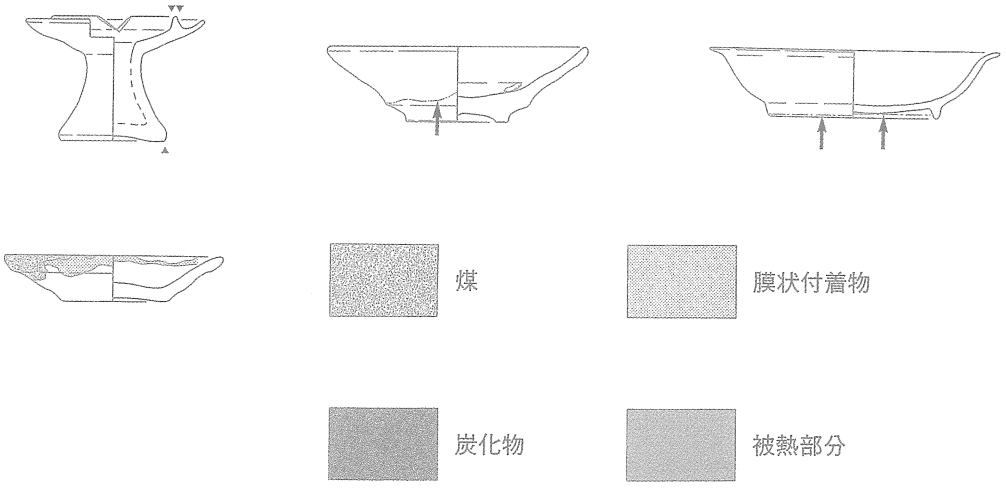
遺構・遺物図版中における表記は下記による。

これ以外のものについては個別に図中に示した。

〔遺 構〕



〔遺 物〕



図中の▼印あるいは一点鎖線（図中↑箇所）は施釉範囲の境界を示す。

2．本文中の語句

以下の語句については、カタカナ表記に統一し、その意味を定義しておく。

　　ズリ・・・・・選鉱過程にて除去される化学的変化に起因しない目的外鉱物をいう

本文目次

第１章　遺跡の概要

第１節　遺跡の位置と概要 …… 1
第１項　遺跡の位置と概要 …… 1
第２項　調査の経過 …… 2
第２節　平成 26(2014) 年度の調査 …… 2
第１項　調査の概要 …… 2
第２項　指導関係及び公開事業 …… 2

第２章　昆布山谷地区の調査

第１節　調査地の周辺環境 …… 5
第２節　調査の概要 …… 5
第１項　過去の調査の経緯と成果 …… 5
第２項　調査区の設定 …… 5
第３項　平成 26(2014) 年度の発掘調査の概要 …… 7
第３節　Ⅰ区 …… 7
第１項　調査の概要 …… 7
第２項　層序 …… 7
第３項　検出遺構 …… 10
第４項　出土遺物 …… 13
第４節　Ⅱ区 …… 16
第１項　調査の概要 …… 16
第２項　層序 …… 16
第３項　検出遺構 …… 19
第４項　出土遺物 …… 23
第５節　Ⅲ区 …… 24
第１項　調査の概要 …… 24
第２項　検出遺構 …… 24
第３項　出土遺物 …… 27
第６節　小結 …… 27

第３章　宗岡家住宅の調査

第１節　調査の概要 …… 37
第１項　調査地の周辺環境 …… 37
第２項　平成 26(2014) 年度の発掘調査の概要 …… 37

第２節　調査の成果……37
第１項　検出遺構……37
第２項　出土遺物……46
第３節　小結 ……47

第４章　本年度の試掘・立会調査

第１節　本年度の試掘・立会調査対象箇所とその対応……55
第１項　大森銀山伝統的建物群保存地区……55
第２項　温泉津伝統的建物群保存地区……55
第２節　大森座南地点浄化槽埋設に伴う試掘調査 ……58
第１項　調査の概要 ……58
第２項　層序 ……58
第３項　検出遺構 ……58
第４項　出土遺物 ……58
第３節　小結 ……61

第５章　石見銀山遺跡宗岡家住宅発掘調査検出便槽状遺構の自然科学分析

第１節　はじめに ……68
第２節　採取資料について……68
第３節　分析方法及び分析結果……69
第１項　寄生虫卵分析 ……69
第２項　ＣＮ分析及び全リン分析……69
第４節　遺構が「便槽」であったことの可能性……70
第１項　寄生虫卵分析結果から……70
第２項　リン分析、ＣＮ分析から……70
第５節　小結 ……70

第６章　総括

第１節　昆布山谷地区……71
第１項　Ⅰ区 ……71
第２項　Ⅱ区 ……71
第３項　Ⅲ区 ……72
第２節　宗岡家住宅……72
第３節　試掘・立会調査 ……73

挿図目次

Fig. 1　石見銀山遺跡位置図（S＝1／100,000）…… 1
Fig. 2　石見銀山遺跡調査地点位置図（S＝1／25,000）…… 4
Fig. 3　昆布山谷地区調査地点位置図（S＝1／1,500）…… 6
Fig. 4　昆布山谷地区第5地点周辺地形図（S＝1／160）…… 8
Fig. 5　昆布山谷地区第5地点検出遺構配置図（S＝1／120）…… 9
Fig. 6　昆布山谷地区第5地点Ⅰ区平面図・断面図（S＝1／100）……12
Fig. 7　昆布山谷地区第5地点Ⅰ区SX02平面図・立面図（S＝1／80）……14
Fig. 8　昆布山谷地区第5地点Ⅰ区SW02平面図・立面図（S＝1／80）……15
Fig. 9　昆布山谷地区第5地点Ⅱ区平面図・断面図（S＝1／100）……17
Fig.10　昆布山谷地区第5地点Ⅱ区SB02・03平面図・礎石断面図（S＝1／80）……18
Fig.11　昆布山谷地区第5地点Ⅱ区SK01、SX07・10・11平面図・礎石断面図（S＝1／30）……20
Fig.12　昆布山谷地区第5地点Ⅱ区SW04・05平面図・立面図（S＝1／40）……22
Fig.13　昆布山谷地区第5地点Ⅲ区SB04平面図・断面図（S＝1／80）……25
Fig.14　昆布山谷地区第5地点Ⅲ区SK02、SX14・15・16平面図・断面図（S＝1／30）……26
Fig.15　昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図Ⅰ（S＝1／3）……28
Fig.16　昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図Ⅱ（S＝1／3）……29
Fig.17　昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図Ⅲ（S＝1／3）……30
Fig.18　昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図Ⅳ（S＝1／3、1／4）……31
Fig.19　昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図Ⅴ（S＝1／6、1／8）……32
Fig.20　昆布山谷地区第5地点出土遺物実測図Ⅵ（S＝1／1、1／2）……33
Fig.21　大森銀山伝建地区内調査・試掘・立会地点（S＝1／10,000）……38
Fig.22　宗岡家住宅調査区配置図（S＝1／1,000）……39
Fig.23　宗岡家住宅検出遺構配置図（S＝1／120）……40
Fig.24　宗岡家住宅SB01平面図・断面図・立面図（S＝1／100）……41
Fig.25　宗岡家住宅SB02、SX03平面図・断面図（S＝1／60）……42
Fig.26　宗岡家住宅SW01、SX04・05平面図・断面図（S＝1／80）……43
Fig.27　宗岡家住宅下層確認トレンチ平面図・断面図（S＝1／60）……44
Fig.28　宗岡家住宅出土遺物実測図Ⅰ（S＝1／3）……48
Fig.29　宗岡家住宅出土遺物実測図Ⅱ（S＝1／2、1／3）……49
Fig.30　宗岡家住宅出土遺物実測図Ⅲ（S＝1／3）……50
Fig.31　宗岡家住宅出土遺物実測図Ⅳ（S＝1／2、1／3）……51
Fig.32　宗岡家住宅出土遺物実測図Ⅴ（S＝1／3）……52
Fig.33　温泉津伝建地区内試掘・立会地点（S＝1／4,000）……56
Fig.34　1T堆積状況（北西から）……57
Fig.35　2T水路検出状況（北東から）……57
Fig.36　大森座南地点調査地位置図（S＝1／1,000）……59

Fig.37　大森座南地点トレンチ平面図・断面図（Ｓ＝１／40)……60
Fig.38　大森座南地点出土遺物実測図Ⅰ（Ｓ＝１／３)……62
Fig.39　大森座南地点出土遺物実測図Ⅱ（Ｓ＝１／３、１／４)……63
Fig.40　大森座南地点出土遺物実測図Ⅲ（Ｓ＝１／１、１／２)……64
Fig.41　大森座南地点出土遺物実測図Ⅳ（Ｓ＝１／４、１／６)……65
Fig.42　調査区配置及び試料採取地点……68
Fig.43　ＳＸ03断面図及び試料採取位置……69
Fig.44　検出された回虫卵化石……70

表目次

Tab. 1　石見銀山遺跡調査一覧……3
Tab. 2　昆布山谷地区調査地点一覧……7
Tab. 3　昆布山谷地区第５地点出土遺物観察表Ⅰ……34
Tab. 4　昆布山谷地区第５地点出土遺物観察表Ⅱ……35
Tab. 5　昆布山谷地区第５地点出土遺物観察表Ⅲ……36
Tab. 6　宗岡家住宅出土遺物観察表Ⅰ……52
Tab. 7　宗岡家住宅出土遺物観察表Ⅱ……53
Tab. 8　宗岡家住宅出土遺物観察表Ⅲ……54
Tab. 9　大森座南地点出土遺物観察表Ⅰ……66
Tab.10　大森座南地点出土遺物観察表Ⅱ……67
Tab.11　検出寄生虫卵化石組成表……69
Tab.12　寄生虫の種類と生態的な特徴……69
Tab.13　ＰＣＮ測定結果一覧……69

図版目次

ＰＬ．１　昆布山谷地区第５地点　Ⅰ･Ⅱ区調査区設定状況(東より)
同　調査区設定状況(南西より)
ＰＬ．２　昆布山谷地区第５地点　ＳＸ02全景(南東より)
同　Ⅰｃ区北壁土層断面(東より)
同　Ⅰｃ区東壁土層断面(南西より)
同　ＳＤ02-①完掘状況(北東より)
同　ＳＤ02-②検出状況(南東より)
ＰＬ．３　昆布山谷地区第５地点　Ⅰ区完掘状況(南東より)
同　ＳＢ01検出状況(南より)
同　ＳＷ02北側(北西より)
同　Ⅰｄ区北壁土層断面(南東より)
同　ＳＸ05検出状況(南東より)
ＰＬ．４　昆布山谷地区第５地点　Ⅱ区完掘状況(南東より)
同　Ⅱａ区東壁土層断面(南より)
同　Ⅱｃ区東壁土層断面(南より)
同　Ⅱｃ区北壁土層断面(南東より)
同　Ⅱｄ区北壁土層断面(南東より)
ＰＬ．５　昆布山谷地区第５地点　ＳＸ09、ＳＸ10、ＳＸ11検出状況(北より)
同　ＳＸ09、ＳＸ10、ＳＸ11完掘状況(北東より)
ＰＬ．６　昆布山谷地区第５地点　ＳＸ10(南西より)
同　ＳＸ10溝状部(西より)
同　ＳＸ11完掘状況(南より)
同　ＳＸ11完掘状況(東より)
同　ＳＸ09西半部断面(南より)
同　ＳＸ09東半部断面(東より)
同　ＳＸ07検出状況(北より)
同　ＳＸ07半截状況(南東より)
ＰＬ．７　昆布山谷地区第５地点　ＳＢ02南部床面(南東より)
同　ＳＢ02南部床面(南西より)
同　ＳＤ03・04検出状況(南東より)
同　Ⅱｃ区南半部土層観察用畔断面(南西より)
同　ＳＸ08検出状況(南西より)
同　ＳＸ08半截状況(北東より)
同　ＳＫ01半截状況(南東より)
同　ＳＸ12検出状況(北西より)
ＰＬ．８　昆布山谷地区第５地点　Ⅲ区完掘状況(南東より)
同　ＳＢ04南北断面(南東より)
同　ＳＸ16半截状況(南東より)
同　ＳＸ15半截状況(南東より)
同　ＳＫ02半截状況(南東より)
ＰＬ．９　昆布山谷地区第５地点　ＳＸ14完掘状況(北西より)
同　ＳＸ14東部断面(東より)
同　石見系大甕(87)出土状況(南東より)
同　調査風景(北東より)
同　Ⅲ区北拡張区整地面検出状況(北西より)
同　瓦出土状況(北より)
同　西壁土層断面①(東より)
同　西壁土層断面②(東より)
ＰＬ.10　宗岡家住宅　外観(北東より)
同　Ⅰ・Ⅱ区調査区設定状況(北東より)
同　Ⅲ区調査区設定状況(南西より)
同　Ⅲ区西側調査区設定状況(西より)
同　Ⅳ区調査区設定状況(北東より)
ＰＬ.11　宗岡家住宅　ＳＢ01完掘状況(南東より)
同　ＳＢ01東半完掘状況(南より)
同　ＳＢ01東半完掘状況(南東より)
同　ＳＢ01西半検出状況(南西より)
同　ＳＢ01便所跡半裁状況(西より)
ＰＬ.12　宗岡家住宅　ＳＢ01東西土層断面(南西より)
同　ＳＢ01南北土層断面①(東より)
同　ＳＢ01南北土層断面②(東より)
同　ＳＢ01部屋内土間断割り部(南東より)
同　ＳＢ01塩物部屋床下(南東より)
ＰＬ.13　宗岡家住宅　Ⅲ区完掘状況(北より)
同　Ⅲ区完掘状況(東より)
同　下層確認トレンチ東壁(西より)
同　下層確認トレンチ西壁(東より)
同　下層確認トレンチ南壁(北より)
同　下層確認トレンチ北壁(南より)
ＰＬ.14　宗岡家住宅　ＳＸ03検出状況(北西より)
同　ＳＸ03土層断面(北より)
ＰＬ.15　宗岡家住宅　ＳＸ03北半検出状況(北より)
同　ＳＸ03土壌サンプル採取状況（北西より）
同　Ⅲ区離れ西側完掘状況(北より)
同　Ⅳ区完掘状況(南西より)
ＰＬ.16　宗岡家住宅　Ⅳ区完掘状況(北東より)
同　Ⅳ区完掘状況(北西より)
ＰＬ.17　大森座南地点　調査前状況(東より)
同　北壁断面(南より)
同　柱検出状況(東より)
同　ＳＤ01検出状況(東より)
同　ＳＸ01検出状況(南西より)
同　ＳＫ01、ＳＰ01検出状況(南より)
同　ＳＫ01、ＳＰ01半裁状況(東より)
同　第20層上面(北西より)
ＰＬ.18　昆布山谷地区第５地点出土遺物Ⅰ
昆布山谷地区第５地点出土遺物Ⅱ
ＰＬ.19　昆布山谷地区第５地点出土遺物Ⅲ
昆布山谷地区第５地点出土遺物Ⅳ
ＰＬ.20　昆布山谷地区第５地点出土遺物Ⅴ
宗岡家住宅出土遺物Ⅰ
ＰＬ.21　宗岡家住宅出土遺物Ⅱ
宗岡家住宅出土遺物Ⅲ
ＰＬ.22　大森座南地点出土遺物Ⅰ
大森座南地点出土遺物Ⅱ
ＰＬ.23　大森座南地点出土遺物Ⅲ
大森座南地点出土遺物Ⅳ

第１章　遺跡の概要

第１節　遺跡の概要

第１項　遺跡の位置と概要 (Fig. 1)

石見銀山遺跡は島根県の中央部の大田市に位置する。大田市は旧国名では石見国に属し、東端の一部は出雲国に接している。遺跡の周辺は、仙ノ山や要害山などの海抜 400 ～ 500 mの山々が連なり、平地は極めて少ない。

遺跡は 16 世紀から 20 世紀にかけて採掘から精錬までが行われた鉱山跡を中心として、周囲の山城跡や銀鉱山から港までを結ぶ２本の街道、銀鉱石・銀の積み出しや銀山で必要な諸物資を搬入した港湾などからなる複合遺跡である。銀の生産から搬出に至る鉱山開発の社会機構及び社会基盤施設の総体を示すこれらの良好な遺跡群は、鉱山町や港湾などの建造物群とともに、当時の土地利用の在り方と機能の一部が現在の土地利用の在り方にも伝達されつつ、自然と共生した顕著な普遍的価値を持つ文化的景観の事例として、平成 19(2007) 年にユネスコ世界遺産に登録された。

Fig. 1　石見銀山遺跡位置図（S＝1／100,000)

第２項　調査の経過 (Tab. 1)

石見銀山遺跡の発掘調査は、昭和 58(1983) 年度から昭和 60(1985) 年度にかけて島根県教育委員会と大田市教育委員会 (以下「市教委」) が策定した「石見銀山遺跡総合整備計画」と同時に開始された。昭和 63(1988) 年からは市教委を主体として毎年継続して発掘調査を実施している。

平成 8 (1996) 年度からは、石見銀山遺跡総合調査が開始し、平成 14(2002) 年にはその成果として、石見銀山遺跡の広域的な保存を目的した史跡範囲の追加指定が行なわれた。その後、調査の進展と共にさらに保護措置の拡大が図られ、平成 20(2008) 年には、史跡指定総面積は 389ha となった。これまでの調査地点と調査の経過については Tab. 1 のとおりである。

第２節　平成 26(2014) 年度の調査

第１項　調査の概要

石見銀山遺跡の調査研究は平成 26(2014) 年度の調査で 30 年目となった。平成 26(2014) 年度は、銀山地区内の昆布山谷地区と伝建地区内の宗岡家住宅の発掘調査を実施した。また、史跡・伝建地区内において小規模な掘削を伴う現状変更行為が発生した際には立会調査を随時実施し、遺構・遺物の記録を行なった。

昆布山谷地区は、石見銀山の開発初期から利用が始まったとされる地域で、石見銀山の開発と居住の様相を明らかとすることを目的として、平成 22(2010) 年から発掘調査を開始した。発掘調査は本年度で 4 年目となる。本年度の発掘調査は、平成 24・25(2012・2013) 年度に断続的に実施した分布調査の成果を基に調査地点 (昆布山谷地区第 5 地点) を設定して実施した。本年度の発掘調査の結果、谷の中ほどで岩盤加工遺構が良好に保存されていることが明らかとなった。本年度検出された岩盤加工遺構は、江戸時代初期から利用されていたことが出土遺物から判明した。また、石垣で平坦面を構築している現在の地形は、18 世紀後半以降に形成されたことも明らかとなった。遺構としては、江戸時代末期まで利用されていた建物遺構が２軒と、明治期の藤田組に関連する可能性がある建物遺構が 1 軒検出された。また、建物遺構に伴って溝や炉跡などの遺構も検出された。

宗岡家住宅の発掘調査は活用を目的とした保存整備事業に先立ち、建物の修理や復原に必要な情報を得ることを目的として実施した。本年度は敷地内の東部を対象とした。発掘調査では納屋や庭施設の跡や、宗岡家以前の土地の利用状況を示す遺構が検出され、当初の目的であった保存整備に必要な情報が得られるとともに、土地の利用履歴の一部が明らかとなった。また、下層確認によって、敷地内における地形の形成過程の一部が明らかとなるなどの成果が得られた。平成 27 年度には現在の主屋が建っている敷地内中央部の調査を予定している。

立会・試掘調査は、本年度は 5 か所で実施した。内訳は、立会調査が大森町で 3 件と温泉津町で 1 件、試掘調査が大森町で 1 件である。特に顕著な成果が得られたのは大森座の浄化槽設置工事に伴う試掘調査で、江戸時代初期の遺物を伴う遺構面が 2 面検出され、当該期における活発な利用の様相が明らかとなった。また、下層からは 13 世紀代に比定できる中世須恵器片や古瀬戸瓶・瓷器系の甕などの遺物と、柱穴や土坑などの遺構が検出された。石見銀山遺跡において鎌倉時代の遺物の出土は初であり、これからの研究において重要な成果である。

第２項　指導関係及び公開事業

本年度の調査に関連して、大橋泰夫教授 (島根大学) からは 5 月 29 日に宗岡家住宅の、10 月 9 日に昆布山谷地区の発掘調査地現地において、調査方針などの調査全般に関わる指導を頂いた。中村唯史氏 (島根県立三瓶自然館) からは 7 月 30 日に宗岡家住宅の下層における堆積状況と建物の基礎に使用されている石材の種類について指導を頂いた。また、大橋康二氏 (佐賀県立九州陶磁文化館) からは 10 月 29 日に昆布山谷地区の出土陶磁器についてご教示を頂いた。

公開事業としては、宗岡家住宅と昆布山谷地区において、 5 月 31 日に宗岡家住宅の、11 月 8 日に昆布山谷地区の発掘調査現地説明会を開催し、多くの見学者の来場があった。

Tab. 1　石見銀山遺跡調査一覧

年　度	西　暦	調　査	調　査　地　点	備　考
昭和 58 年	1983	発掘調査	①代官所跡、④蔵泉寺口番所跡	石見銀山遺跡総合整備計画の策定
60 年	1985	分布調査	大田市、温泉津町、仁摩町、邑智町、赤来町、大和村、羽須美村に所在する石見銀山関連遺跡	
63 年	1988	発掘調査	⑨龍源寺間歩	
平成元年	1989	発掘調査	蔵泉寺口番所跡、②向陣屋跡、⑧上市場	
2 年	1990	発掘調査	蔵泉寺口番所跡、⑥大龍寺谷、③旧河島家	
3 年	1991	発掘調査	⑤下河原吹屋跡	
4 年	1992	発掘調査	⑦山吹城跡下屋敷	
5 年	1993	発掘調査	⑫石銀千畳敷	
6 年	1994	発掘調査	石銀千畳敷	
7 年	1995	発掘調査	石銀千畳敷	
8 年	1996	発掘調査	⑬石銀藤田	総合調査開始
9 年	1997	発掘調査	⑰宮ノ前、⑪出土谷、石銀藤田	
10 年	1998	発掘調査	⑩栃畑谷、石銀藤田、⑭於紅ヶ谷、⑮竹田	
11 年	1999	発掘調査	宮ノ前、石銀藤田、出土谷、竹田、	
12 年	2000	発掘調査	宮ノ前、石銀藤田、出土谷、竹田	
		分布調査	柑子谷地区	
13 年	2001	発掘調査	宮ノ前、於紅ヶ谷、出土谷、竹田、⑯本谷、町並み保存地区 (阿部家、熊谷家)	
14 年	2002	分布調査	宮ノ前、於紅ヶ谷、出土谷、竹田、本谷、町並み保存地区 (阿部家、熊谷家)	
15 年	2003	発掘調査	宮ノ前、⑱下河原下組、出土谷、本谷	
16 年	2004	分布調査	宮ノ前、本谷、港湾集落、町並み保存地区	
17 年	2005	発掘調査	本谷、町並み保存地区 (岡家)	
18 年	2006	発掘調査	本谷、町並み保存地区 (宗岡家)	
19 年	2007	発掘調査	⑲安原谷、下河原、町並み保存地区 (渡辺家)	世界遺産登録
20 年	2008	発掘調査	安原谷、町並み保存地区 (柳原家、渡辺家)、⑳清水谷製錬所跡	
21 年	2009	発掘調査	安原谷、本谷、町並み保存地区 (杉谷家、渡辺家)、清水谷製錬所跡	
22 年	2010	発掘調査	安原谷、本谷、昆布山谷	
23 年	2011	発掘調査	㉑昆布山谷、石銀、町並み保存地区 (旧大住家)	
24 年	2012	発掘調査	昆布山谷	
25 年	2013	発掘調査	昆布山谷	
26 年	2014	発掘調査	昆布山谷、宗岡家	

※ ○数字は 4 頁の地図上の番号

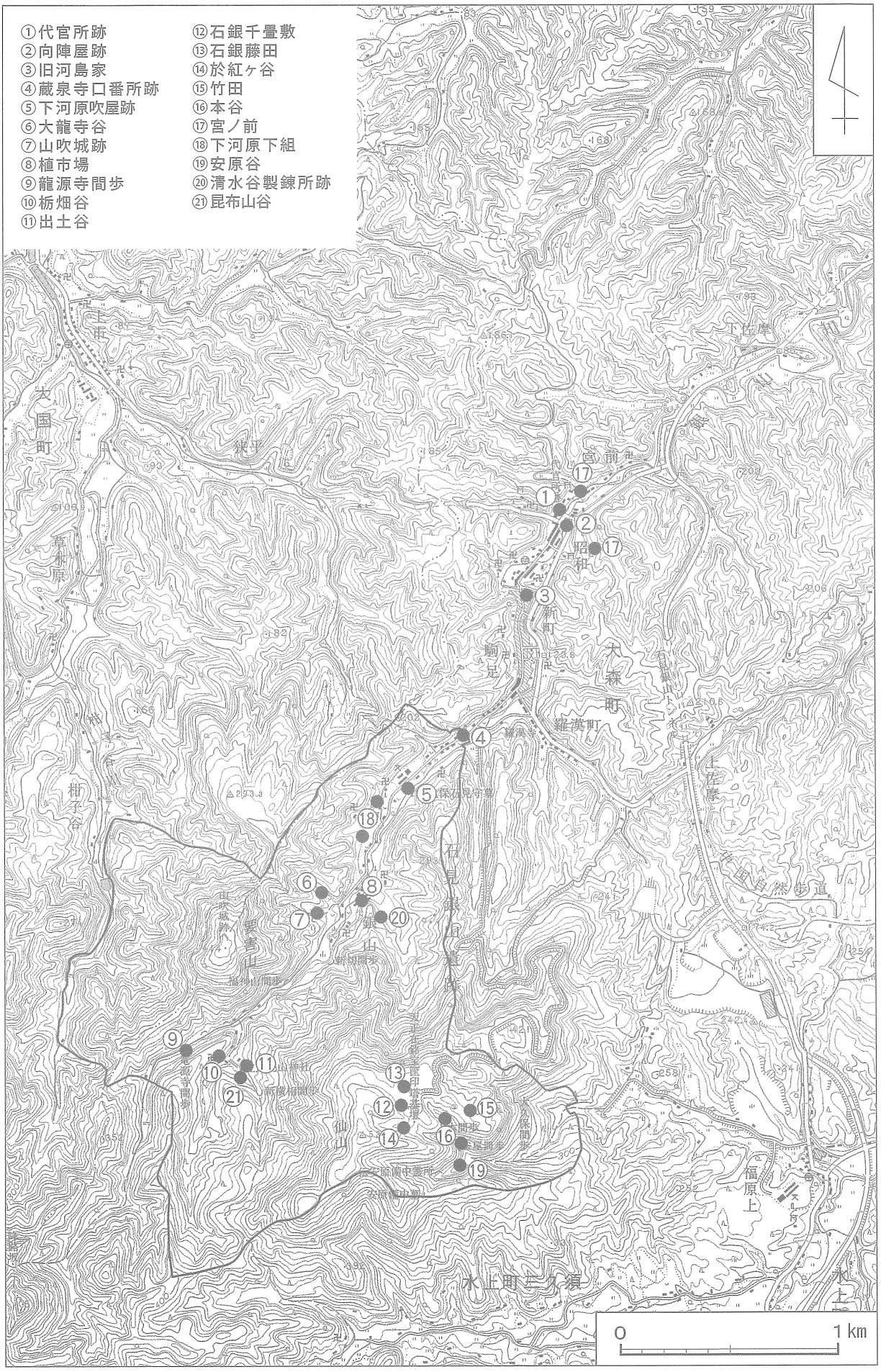


Fig. 2　石見銀山遺跡調査地点位置図（S＝1／25,000）

第２章　昆布山谷地区の調査

第１節　調査地の周辺環境

昆布山谷は、銀山の核である仙ノ山の北西に位置している。谷の方角は、ほぼ北から南にかけて走っており、全長約 600 mである。谷の入口に当たる北側は、東西に走る栃畑谷と接し、東には尾根を挟んで昆布山谷と平行して南北に出土谷が走る。谷の東西には尾根が連なり、佐毘売山神社や長楽寺跡・虎岸寺跡などの寺社跡もある。周辺の尾根上には墓地が点在し、墓石の紀年銘は天正年間 (1573 ～ 1593 年) まで遡るものもある。

谷底の幅は約 30 ～ 40 mで、両脇は岩盤がむき出しになっている。岩盤には「新横相間歩」や「村上坑」を始めとする大小さまざまな坑口があり、70 近くを数える。また、柱穴や岩盤を彫り込んだ祠などもある。

谷の入口から南に 400 m程度までは、中央に道と溝がある。道と溝は平行に走っており、石組で作られている。また、その範囲には谷の両側に段状の石垣が組まれている。これは敷地割の石垣とみられ、昆布山谷の集落跡と考えられる。ここより南は溝がなくなり、急勾配の道を登って西側の尾根上の字名「本馬場」に達する。本馬場には、70 m四方の拓けた平坦面がある。ここで谷は終わりだが、道はそのまま急勾配で続き、萩峠口の番所跡推定地に到着する。ここを峠として水上町の三久須方面に下る。

昆布山谷は、過去の文献史料にも数多く登場している。例えば、『銀山旧記』には「天文八年 (中略) 昆布山にて銀を吹」や、『高野山浄心院過去帳』の「一、昆布山 (中略) 天文二十一年」などの室町時代後期の記載がある。また、『安田家文書』には江戸時代中期の長楽寺周辺の様子が伺える絵図も残っている。近代の様子が分かる資料としては、明治 20 年から大正 12 年の休山まで石見銀山の開発を行なった藤田組（現、DOWA ホールディングス）が、鉱山経営に関わる書類の控えや記録を綴った『要書録』がある。要所録には、開発した土地の番地や建物の規模、年代などが詳細に記録されている。以上のように、昆布山谷は石見銀山の開発初期から隆盛、衰退を経て近代の再開発までに密接に関わっており、鉱業活動や鉱山生活を知る上で重要な谷といえる。

第２節　調査の概要

第１項　過去の調査の経緯と成果

昆布山谷地区の近辺ではこれまでに佐毘売山神社を挟んで東側の出土谷地区や、隣接する栃畑谷地区で発掘調査を実施しており、16 世紀後半にさかのぼる遺構・遺物や、18 世紀後半の銅製錬にも関わる遺構が検出されている。昆布山谷地区の発掘調査は、平成 22(2010) 年度から開始され、平成 26(2014) 年度で５年目である。これまでに４地点の調査が実施され、18 世紀後半から近代にかけての資料が出土した。

第２項　調査区の設定 (Fig. 3 ・ 4 、Tab. 2)

昆布山谷地区においてはこれまでの４年間で４か所の発掘調査を実施した。しかし、年度によって調査地点名が統一されておらず、混乱をきたしていた。そのため、まずは調査地点の名称を統一し、調査地点の整理を図りたい。調査地点は以下のように統一する。佐毘売山神社下地点を第１地点、長楽寺下地点を第２地点、Ｈ 24 － 1 トレンチを設定した場所を第３地点、昆布山谷２区を設定した場所を第４地点、そして本年度調査を実施した場所を第５地点とする。各地点においては、試掘段階ではトレンチ名を１から順に設定し、本格的に調査を実施する際には調査区をＩ区から順に設定する。ただし、第２地点についてはトレンチ名が第１地点からの続きですでについているため、トレンチ名の再設定はせず、これまでのトレンチ名をそのまま使用する。各調査地点の位置は Fig. 3 に記載した。

以上を踏まえて本年度の調査地点と調査区について整理する。本年度調査を実施した地点は、昆布山谷地区第５地点 (大田市大森町ニ 270 － 1 番地) である。第５地点においては、分布調査の段階で地表面に遺構の一部が露出していることが確認されていたため、遺構範囲の確認が不要であった。そのため、これまでの調査のようにトレンチ調査は行わず、調査対象範囲内に調査区を設定して発掘調査を実施した。

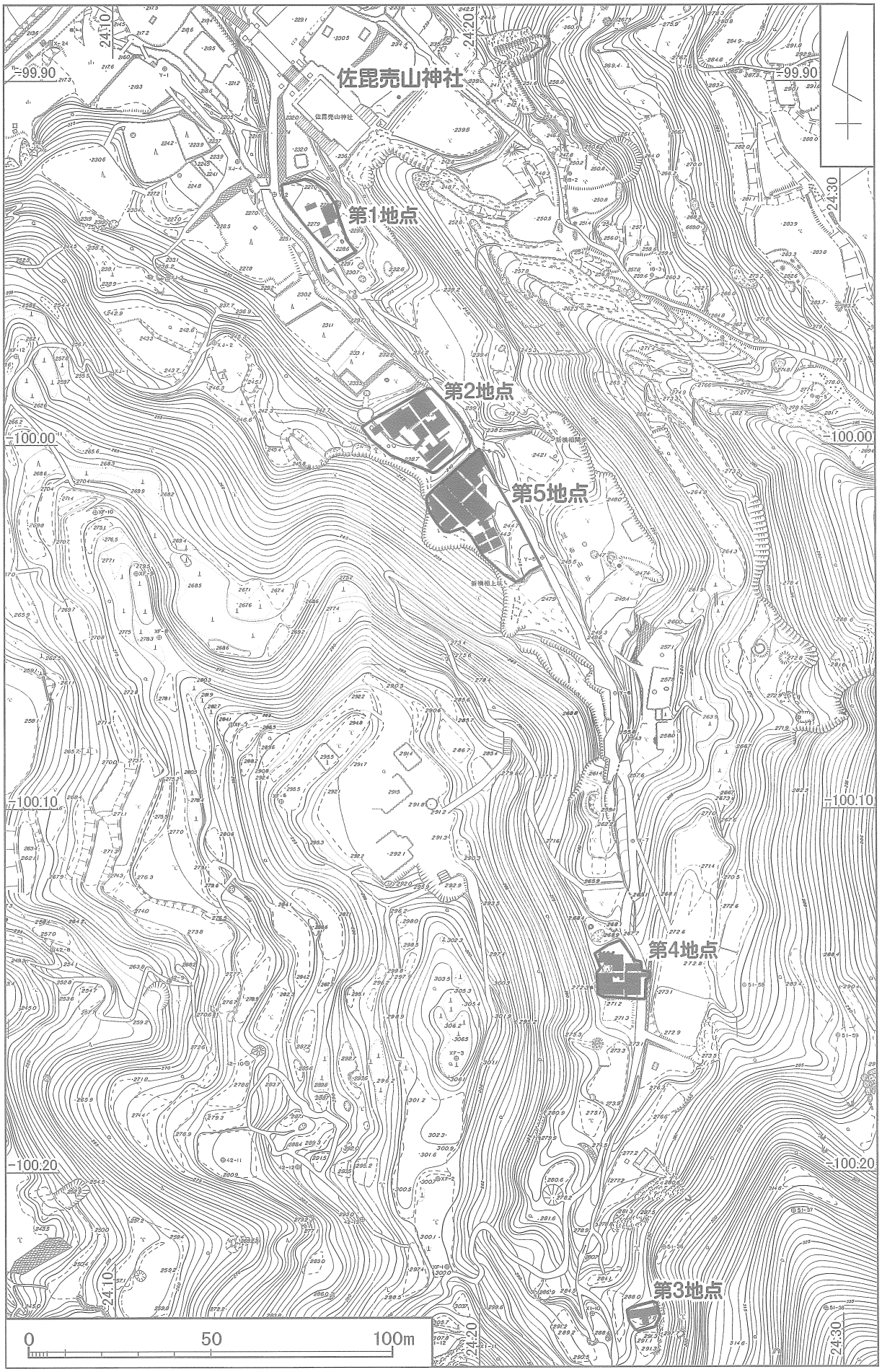


Fig. 3　昆布山谷地区調査地点位置図（S＝1／1,500）

第３項　平成 26(2014) 年度の発掘調査の概要 (Fig. ３～５)

昆布山谷地区第５地点は昆布山谷の中ほどである。調査地点の南側には新横相上坑が、山道を挟んで東側には新横相間歩と呼ばれる坑口が所在する。

昆布山谷地区第５地点は、平成 24(2012) 年から平成 25(2013) 年にかけて断続的に実施した分布調査の際に、近代の遺物がほとんど確認できなかった地点である。加えて、現地表面上に岩盤加工遺構や石垣・礎石等の遺構が確認されていたことから、開発初期の様相までを明らかとできる可能性が考慮されていたため、発掘調査対象地とした。

調査に当たっては調査対象範囲内にⅠ～Ⅲの調査区を設定し、各調査区をａ～ｄの小区に分けて出土遺物の取上げなどを行なった。

調査期間は平成 26(2014) 年７月 14 日から 11 月 21 日で、調査範囲は当該地域内の約 252㎡である。

第３節　Ⅰ区

第１項　調査の概要

Ⅰ区は石垣 (ＳＷ 02) によって構築された平坦面で、広さは東西 5.5m(約 18 尺)、南北 15.5 ｍ (約 51 尺) である。調査区西側には階段状遺構や溝状遺構・水溜め・柱穴などが彫り込まれた岩盤加工遺構 (ＳＸ 02) がある。調査区内の一部には流土が厚く堆積しており、その中からは瓦や 17 世紀初頭の遺物などが出土した。これらは、調査区西側の斜面から流されてきた遺物とみられる。

発掘調査はまず地表面に厚く堆積した流土を除去し、遺構面の検出を行なった。遺構面上を精査し、遺構の有無及び範囲の確認をした後に、遺構に影響を与えないよう配慮して、Ⅰｃ区とⅠｄ区北壁沿いで下層確認を行なった。下層では岩盤加工遺構が現地表面よりも下まで続いており、江戸時代の初期から利用されていたことが、出土遺物より明らかとなった。また、土層断面で７面の整地面が確認できたことから、江戸時代をとおして何度か造成をしていたことが明らかとなり、現在の地形が形成されたのは 18 世紀後半以降と推定できた。

第２項　層序 (Fig. 6)

Ⅰ区の堆積状態について報告する。各整地面の様相については次のとおりである。

Tab. 2　昆布山谷地区調査地点一覧

調査年度		旧地点名		新地点名		
		旧地点名	トレンチ名	新地点名	トレンチ名	調査区名
2010	H22	佐毘売山神社下地点	1T	第１地点	1T	
			2T		2T	
		長楽寺下地点	3T	第２地点	3T	
			4T		4T	
			5T		5T	
			6T		6T	
			7T		7T	
2011	H23	佐毘売山神社下地点	8T	第１地点	8T	
		長楽寺下地点	A区	第２地点		Ⅰ区
			B区			Ⅱ区
			C区			Ⅲ区
			D区			Ⅳ区
			E区			Ⅴ区
			F区			Ⅵ区
2012	H24		H24-1 トレンチ	第３地点		
			昆布山谷２区	第４地点		
2013	H25		昆布山谷２区	第４地点		
2014	H26			第５地点		Ⅰ区
						Ⅱ区
						Ⅲ区

Fig. 4　昆布山谷地区第５地点周辺地形図（S＝1／160)

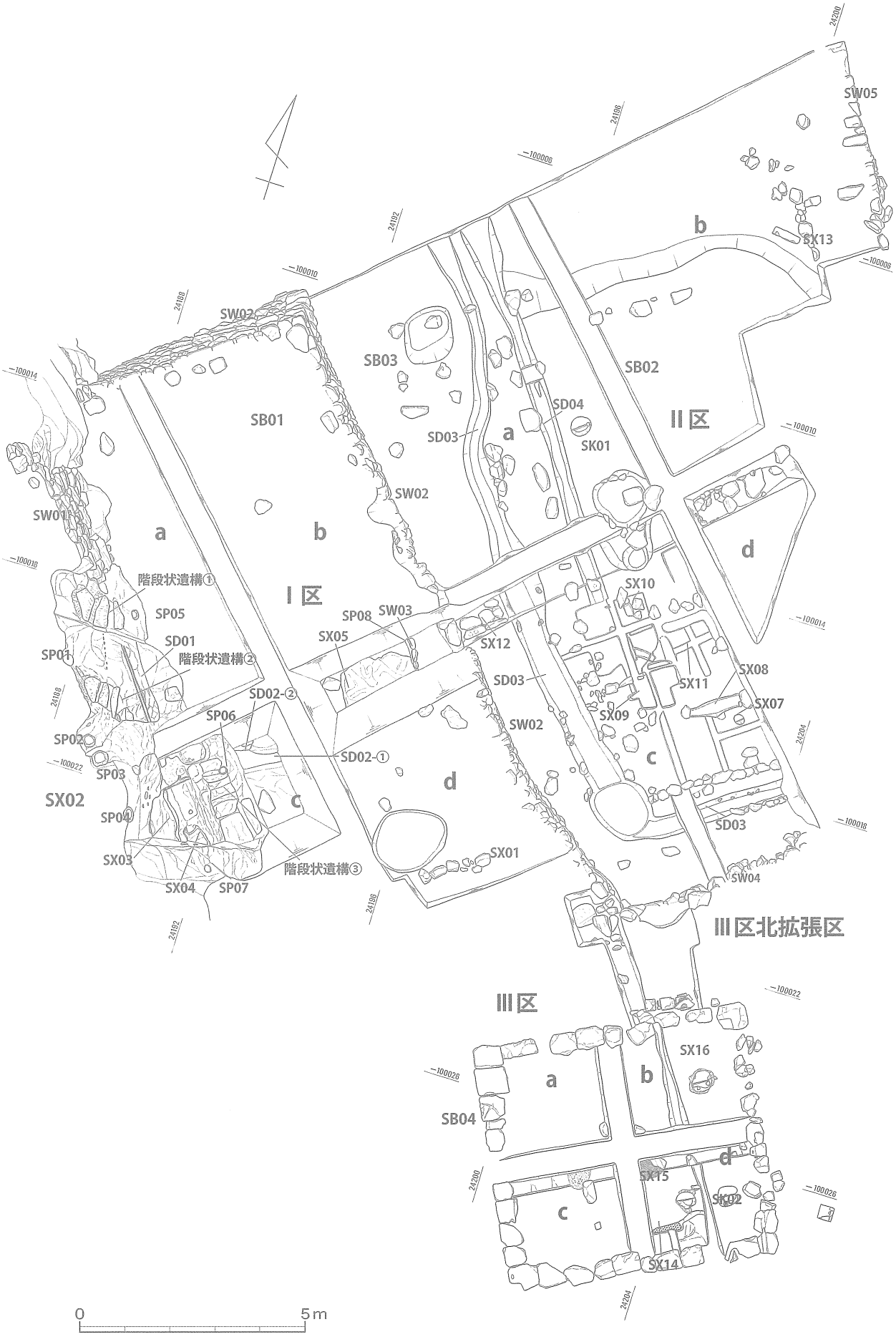


Fig. 5　昆布山谷地区第５地点検出遺構配置図（S＝1／120）

【第１面】

第４層上面である。明黄褐色粘質土で、上面には建物遺構（ＳＢ01）がある。標高は243.5ｍである。造成土は採掘時に排出されたズリを含む灰色土である。

上面から在地系陶器の蓋(15)や銅製品(97・98)などが出土しているが、時期を明確に示すものはなかった。ただし、明治期の遺物はほとんど含まれていないため、利用時期は幕末までとみられる。

【第２面】

第９層上面である。標高は242.6ｍで、第１面から0.9～1.1ｍ下で検出された。造成土は厚さ４～20cmで、ズリを利用したとみられる礫層である。第２面の上面から遺物は出土しなかったが、第１～第２面間の造成土内から18世紀後半の遺物（26）が出土していることから、現在の地形は18世紀後半以降に形成されたものと考えられる。

【第３面】

第13層上面である。標高は242.4～242.6ｍである。造成土はにぶい黄色～黄褐色土で、一部に小礫を多く含んでいる。第３～８面では遺物が出土しなかったため、それぞれが造成された年代は不明である。

【第４面】

第15層上面である。標高は242.3～242.4ｍで、第３面から５～10㎝下で検出された。造成土はしまりの強い黄褐色土である。

【第５面】

第17層上面である。標高は242.1ｍで、第４面から５～10㎝下で検出された。遺構面は黒褐色でしまりが強く、造成土は灰オリーブ色粘質土と一部に炭化物が混じる黒色土であった。上面から柱穴（ＳＰ08）が掘り込まれていることが断面で確認された。

【第６面】

第23層上面である。標高は241.6～241.9ｍで、東側に向かって下がっている。

【第７面】

第20層上面である。標高は241.5～241.8ｍで、第６面と同じく東側に向かって下がっている。

第７面よりも下位から検出された溝状遺構（ＳＤ02－①）の埋土から17世紀前半の肥前磁器(27)が出土している。

第３項　検出遺構(Fig. 5～8)

【ＳＢ01】(Fig. 5・6)

ＳＢ01はＩ区の第１面上で検出された礎石建物跡で、石垣（ＳＷ02）で嵩上げされた平坦面に建てられている。軸は南東方向で、西側の岩盤と平行になっている。調査区の南半部は竹根の影響で遺構面が攪乱されており、遺構が明確に確認できなかった。確認できた範囲での規模は東西4.8ｍ×南北3.2ｍで、東西が三間、南北が二間である。東西の柱間については、中央が約105㎝（約３尺５寸）で、中央以外は約184㎝（約６尺）である。これまでに石見銀山遺跡で検出された建物遺構は６尺５寸を基準とするものが多かったが、ＳＢ01はその基準では建てられていない。礎石は隅丸方形または不定形の扁平な割石で、大きさは北東隅のものが約65×45㎝とやや大きいが、それ以外は約35×30㎝程度である。礎石上面の標高は243.4～243.5ｍで、高さはそろっている。内部に遺構を伴わないため、建物の性格は不明である。第１面上面における出土遺物から、幕末まで利用されていたものと考えられる。

【ＳＰ08】(Fig. 5・6)

ＳＰ08はＩｄ区北壁で確認された遺構で、幅20㎝、深さ60㎝の柱穴である。埋土内には柱材とみられる木質が残っていた。第５面から掘り込まれている。

【ＳＷ01】(Fig. 5～7)

ＳＷ01は岩盤遺構（ＳＸ02）の北部に構築された石垣で、南北方向の幅約3.6ｍにわたって構築されている。高さは約2.9ｍで、最高点の標高は246.5ｍであった。岩盤にそって構築されており、岩盤を一部削って石材をはめ込みながら積み重ねている。表面での観察から、割石を積み上げただけで裏込めはない。基底部は岩盤から積み上げており、Ｉ区の第１面よりも下がらないことから、Ｉ区が全て造成されたのちに構築された石垣と判断でき、18世紀後半以降に造られたものと考えられる。なお、基底部標高は243.6ｍである。

築石は周囲の岩盤と同質で、凝灰岩質の割石を使用している。最大のもので幅約80㎝だが、多くは約20～50㎝である。築石の表面には鑿痕が残るものもあり、大きさや形をある程度調整した様子が窺える。上

部が後述する階段状遺構①と接していることから、上の平坦面に登るための通路を確保する目的で構築された石垣の可能性がある。

【ＳＷ02】(Fig. 5・6・8)

ＳＷ02はＩ区の北面(北側)とＩ・Ⅱ区の境(東側)に構築された石垣で、北側は幅約5.5 m、東側は幅約15.5 mである。東側は劣化が激しく、中央部の約4.5 mの範囲と、北から2.5 mよりも南側の天端が崩れていた。高さは約2.5 mで、天端の標高は243.4 mである。基底部はＩ区の第5面及びⅡ区の第2面で、標高は241.1 m～241.8 mである。ただし、北東隅では240.8 mまで下がっており、場所によって基底部の標高がやや異なっている。

築石はＳＷ01と同様に凝灰岩質の割石である。いずれの面でも幅40～70㎝の大きな石と、幅20～30㎝の小さな礫を使用しているが、東側下部の約30㎝の範囲は幅20㎝程度の小さい石を使用している。また、築石の表面には鑿痕が残るものが含まれている。

石積みは基本的に乱積みだが、北東隅は算木積みである。石垣の角度は北側が約75°、東側が約80°で、いずれの面もやや内側に反っている。石垣の裏側には、最下段の築石から西に最大で約90㎝の範囲に粘質土を詰めており、グリ石や砂利などはない。

【ＳＷ03】(Fig. 5・6)

深掘部の東端部分で検出された遺構で、約25×15㎝の割石を南北に並べ、２段積み上げた遺構である。第7遺構面から立ち上がっており、標高は基底部が241.4 m、上端部が241.7 mである。ＳＷ02とは逆に西側に面を持っており、第7面の時期にはⅡ区側を盛り上げて生活面としていた可能性がある。

【ＳＸ01】(Fig. 5・6)

ＳＸ01はＩｄ区南端部の第1面上で検出された石列で、幅30～40㎝の角礫を東西に並べている。礫5点で幅約1.6 mだが、西側は流土が厚く堆積しており、調査が困難であったため、遺構の全体は確認していない。ＳＷ02北壁と平行しており、ＳＷ02北壁からＳＸ01の間を敷地としていた可能性がある。

【ＳＸ02】(Fig. 5～7)

ＳＸ02はＩ区西側の岩盤に彫り込まれた岩盤加工遺構で、南北方向の幅約12.5 mの範囲が加工されている。彫り込まれた施設には柱穴(ＳＰ01～07)や階段状遺構・水溜め(ＳＸ03)・溝(ＳＤ01・02)などがある。最下部の溝(ＳＤ02)埋土内で17世紀前半の肥前磁器(27)が出土したことから、江戸時代の初め頃から加工されていたことが明らかとなった。加工痕より、加工には鑿が使用されていたものとみられる。高さはＩ区の第1面から2.7 m、最下部からは4.8 mである。最高点の標高は、検出された範囲では246.2 m、最下面は241.4 mである。表面には多くの凹みが彫り込まれており、梁を架けるための機能などが想定される。岩盤には凹みのほかに柱穴も複数彫り込まれていることから、岩盤に沿うようにして建物か庇があった可能性がある。

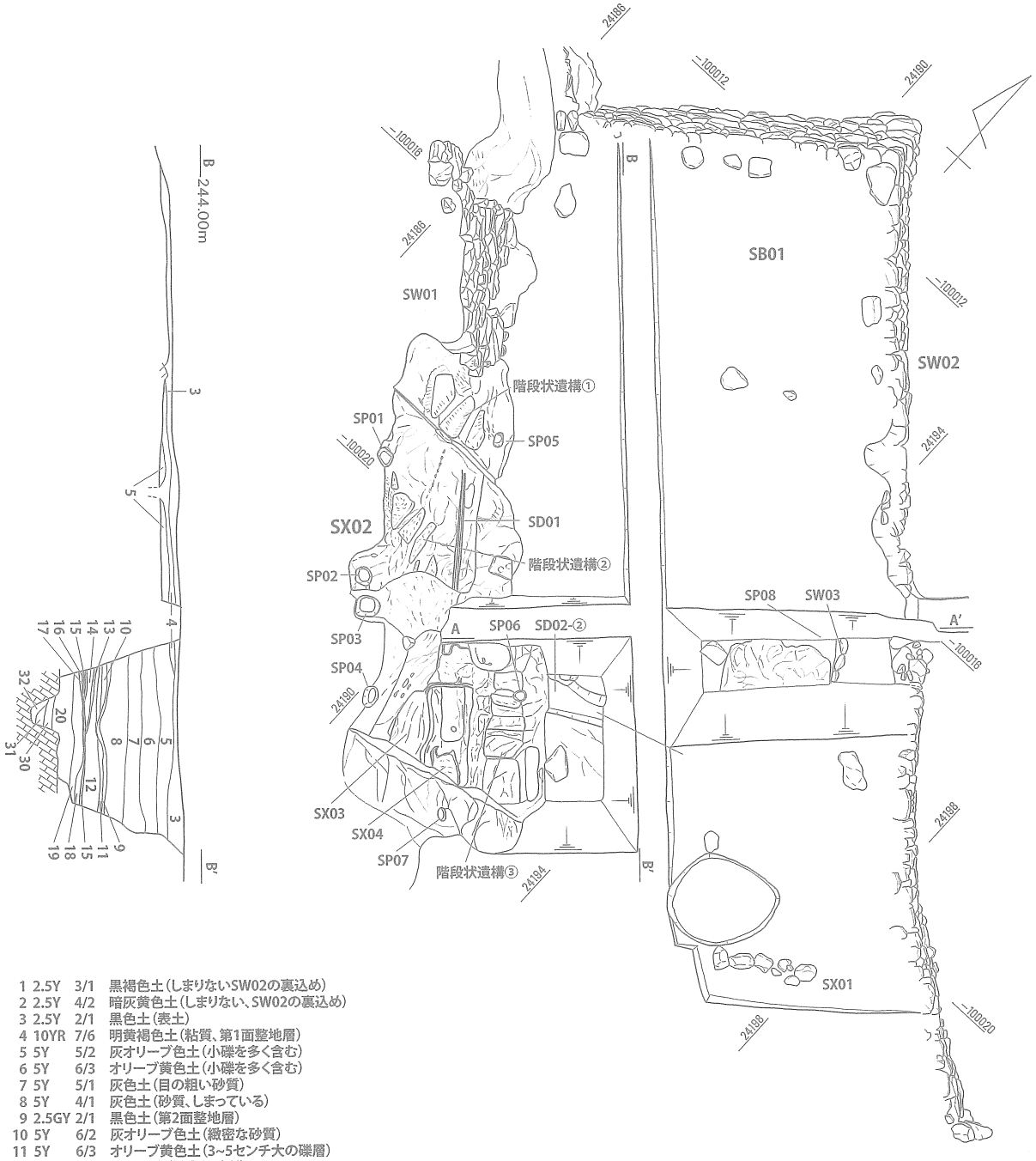
①階段状遺構

階段状遺構は岩盤の中央部に2か所、南端部に1か所の計3か所が彫り込まれており、北から順に階段状遺構①・②・③とする。階段状遺構①・②・③のいずれにも鑿による加工痕が見られる。

階段状遺構①はＳＸ02の北側に位置しており、岩盤に対して西側に約50°斜めになっている。段数は3段あり、1段目が標高243.9 m、3段目が標高244.5 mで、1段当たりの高さは約30㎝である。また、幅は約40㎝で、奥行は約20㎝である。1段目は第1面から55㎝離れており、一足で登るのはやや困難である。1段目の下には柱穴が設けてあることから、岩盤沿いに何らかの施設があり、そこから階段に上るようになっていた可能性もある。先にも指摘したように、ＳＷ01と関連する可能性があり、第1面が形成されたのちにできた遺構とみられる。

階段状遺構②はＳＸ02の中央部に位置しており、岩盤に対して西側に約40°斜めになっている。段数は5段あり、1段目が標高244.4 m、5段目が標高245.6 mで、1段当たりの高さは20～30㎝である。1段目は第1面から約1 m離れており、階段状遺構①と同様に一足で登るのは困難である。1段ごとの幅は40～60㎝で、奥行は20～30㎝であるが、1段目は非常に小さく、幅30㎝、奥行き20㎝で、平面形は三角形である。

階段状遺構③はＳＸ02の南側に位置しており、ＳＸ02と平行に彫り込まれている。段数は7段あり、



1 2.5Y 3/1 黒褐色土(しまりないSW02の裏込め)
2 2.5Y 4/2 暗灰黄色土(しまりない、SW02の裏込め)
3 2.5Y 2/1 黒色土(表土)
4 10YR 7/6 明黄褐色土(粘質、第1面整地層)
5 5Y 5/2 灰オリーブ色土(小礫を多く含む)
6 5Y 6/3 オリーブ黄色土(小礫を多く含む)
7 5Y 5/1 灰色土(目の粗い砂質)
8 5Y 4/1 灰色土(砂質、しまっている)
9 2.5GY 2/1 黒色土(第2面整地層)
10 5Y 6/2 灰オリーブ色土(緻密な砂質)
11 5Y 6/3 オリーブ黄色土(3~5センチ大の礫層)
12 2.5Y 5/1 黄灰色土(緻密な砂質)
13 10YR 4/3 にぶい黄褐色土(よくしまる、第3面整地層)
14 2.5Y 6/4 にぶい黄色土(小礫を含む)
15 5Y 2/1 黒色土(硬化、第4面整地層)
16 10YR 5/6 黄褐色土(よくしまる)
17 10YR 3/1 黒褐色土(硬化、第5面整地層)
18 10YR 2/1 黒色土(炭化物を含む)
19 5Y 6/2 灰オリーブ色土
20 5Y 4/2 灰オリーブ色土(SW03に伴う層、第7面整地層)
21 2.5Y 6/4 にぶい黄色土(粘質)
22 5Y 7/3 浅黄色土(小礫層)
23 10YR 4/2 灰黄褐色土(硬化、第6面整地層)
24 10YR 6/6 明黄褐色土(粘質)
25 10YR 3/1 黒褐色土(硬化)
26 2.5Y 7/6 明黄褐色土(粘質)
27 2.5Y 4/1 黄灰色土
28 2.5Y 3/1 黒褐色土(1~2センチ大の礫層)
29 5Y 7/3 浅黄色土(目の粗い砂質土)
30 7.5Y 5/6 明褐色土(粘質、SD02-①の埋土)
31 2.5Y 5/2 暗灰黄色土(粘質、SD02-①の埋土)
32 5Y 6/2 灰オリーブ色土(粘質、SD02-①埋土)
33 10YR 2/1 黒色土(マンガン層、SD02-②埋土)
34 5Y 6/2 灰オリーブ色土(SP08埋土)
35 7.5Y 7/8 黄橙色土(非常に硬化、第6面整地層)
36 5Y 2/1 黒色土(炭化物層)

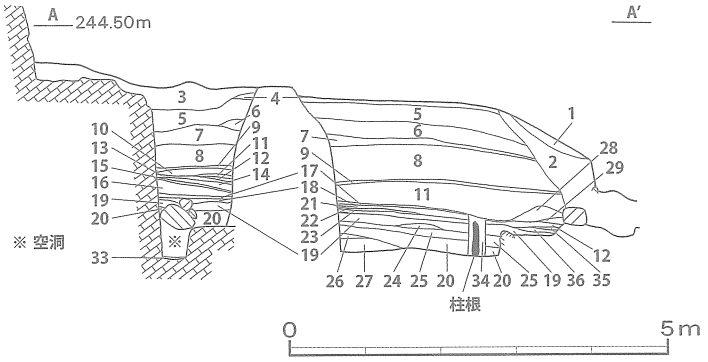


Fig. 6　昆布山谷地区第５地点Ｉ区平面図・断面図（Ｓ＝１／100）

１段目が標高 242.6 m、７段目が標高 243.8 mで、１段あたりの高さは 10 ～ 30㎝である。１段目はＳＸ 02 に直行しているが、２段目が踊り場状になっており、３段目からはＳＸ 02 に平行している。段の広さは１段目が幅約 80㎝、奥行き約 20㎝で、２段目が幅約 55㎝、奥行き約 70㎝、３段目が幅約 60㎝、奥行き約 30㎝で、４段目以降が幅約 80㎝、奥行き約 20㎝である。１段目の下方約 20㎝の第５面上から平面が 55 × 35㎝、厚さ 15㎝の割石１点が出土した。第５面から階段に上るための踏石として利用されていた可能性がある。

途中に土層観察用畦を挟んでいるため明確ではないが、階段状遺構②・③は本来一連の遺構であった可能性もある。

②ＳＤ 01

ＳＤ 01 は階段状遺構②の下に掘り込まれた幅約８㎝の細い溝である。軸は西に 35°の方向で、おおむねＳＸ 02 に平行である。ＳＸ 02 中央部分の約 1.8 m の範囲に彫り込まれている。標高は北側が 244.145 m、南側が 244.037 mで、南側が若干低い。溝としては非常に浅く、彫り込みの深さは１㎝程度である。

岩盤加工遺構で導水の機能を持つ溝は安原谷地区や本谷地区で検出されており、ＳＤ 01 も似たような機能をもつ可能性もある。

③ＳＤ 02

ＳＤ 02 はＩ区の現地表面から 1.65 m下の標高 241.8 m地点で検出された遺構である。岩盤に対して直行する東西に彫り込まれた溝（ＳＤ 02 －①）と、岩盤に沿って南北に彫り込まれた溝（ＳＤ 02 －②）がＬ字形につながる部分が検出された。ＳＤ 02 －①は上部の幅 55㎝、底部幅 25㎝、深さ 30㎝で、断面は逆台形である。検出範囲での様相から、東方向に延びているが、どこまで続いているのかを確認することはできなかった。埋土から 17 世紀前半の遺物 (27) が出土した。

ＳＤ 02 －②はＩｃ区北壁の断面で確認された遺構で、暗渠状になっていたため、方向が分かる状態であった。幅 36㎝、深さ 40㎝で、断面は長方形である。確認できる範囲では溝の上部に礫があり、暗渠状になっていたため、溝内に埋土はほとんどなかった。検出された範囲での様相から、ＳＤ 02 －②は岩盤沿いにＳＷ 02 北面付近まで伸びている可能性もあるが、現状のＳＷ 02 北面では確認できない。

④ＳＸ 03

ＳＸ 03 はＳＸ 02 南端部に位置する水溜め状の遺構で、標高は 243.9 mである。平面形は三角形で、最も長い辺が 1.1 m、奥行きが 60㎝、深さ 15㎝である。北端部に切り込みと東側に延びる溝がある。ＳＸ 03 西側の岩盤から流れてくる水を利用しているほか、ＳＤ 01 から水を引き込んでいた可能性がある。

⑤ＳＸ 04

ＳＸ 04 はＳＸ 03 の南東、標高 243.8 mに位置する。平面形は三角形で、幅 60㎝、奥行き 40㎝、深さ２㎝である。機能としては水溜めなども考えられるが、彫り込みが浅く、周囲に関連する施設もないため、用途は不明である。

⑥ＳＰ 01 ～ 07

ＳＸ 02 内の岩盤上端部の標高 245.6 ～ 245.8 mの範囲（ＳＰ 01 ～ 04）と、第１面付近の標高 243.5 ～ 243.6 mの範囲（ＳＰ 05 ～ 07）に彫り込まれていた。平面形はいずれも円形または隅丸方形で、ＳＰ 01 ～ 04 は径約 30㎝、ＳＰ 05･06･07 は径約 20㎝である。ＳＰ 01・02・04 は約 185㎝間隔で直線に並んでいるため、一連の遺構である可能性が高い。

【ＳＸ 05】(Fig. ５・６)

ＳＸ 05 はＩｄ区の下層確認トレンチの最下面で検出された岩盤加工遺構である。西端部が西側に向かって１段深く彫り込まれ、その縁が被熱して色調が赤色～暗赤色に変化している。被熱した深さを調べることはできなかったが、平面での被熱範囲や色調の変化具合から、一時的または短期的な利用は想定しにくい。製錬に関わる遺構の可能性が考えられるが、火を利用した採掘も検討される。

第４項　出土遺物 (Fig.15 ～ 20、Tab. ３～５)

遺物としては陶磁器類や瓦、かなめ石や石造物などの石製品、斧や切羽･銭貨などの金属製品が出土した。出土した陶磁器類には広域に流通していた肥前や瀬戸などのほか、在地系の陶器も含まれていた。また、点数は少ないが造成土内から古い時期の輸入磁器 (19・22) も出土している。

【陶磁器類】

①肥前磁器

碗（3・21・23・24・26・47）、皿(27)、鉢（4）、すり鉢(86)などが出土した。3は体部外面に壺か甕の文様が、口縁部内面に崩れた雷文がある。47も同様の個体だが、接合はしない。文様の書き方も異なっているため、同一個体ではないとみられる。23は底部に「富貴長寿」の文字が記入され、見込み部には二重の圏線の中に文様がある。24は京焼風で、底部が露胎しており、底部と体部の境が段状になっている。外面体部には松葉の文様がある。26は外青磁で、外面に青磁釉がかかっている。口縁部内面に四方襷文があり、見込み部には二重の圏線とコンニャク印判による五弁花文がある。18世紀代に比定できる遺物で、第1～第2面の間の造成土内から出土した。

27はＳＤ02－①の埋土から出土したもので、ＳＤ02の年代を示すものと考えられる。見込み部に植物の文様がある。復元値であるが底部径が4.4cmと小さく、畳付を釉剥ぎしていることや底部を押し上げていることなどの特徴から、17世紀前半のものとみられる。

4は体部外面には大小の丸文がある。口縁部内面が釉剥ぎされていることから、蓋がつくものとみられる。

②肥前陶器

碗（9）、蓋(10)、皿（8）、鉢(11)、灯明皿(14)などが出土した。

9は畳付けのみ釉剥ぎし、見込み部には蛇の目釉剥ぎが見られる。8は見込み部に胎土目があり、三日月

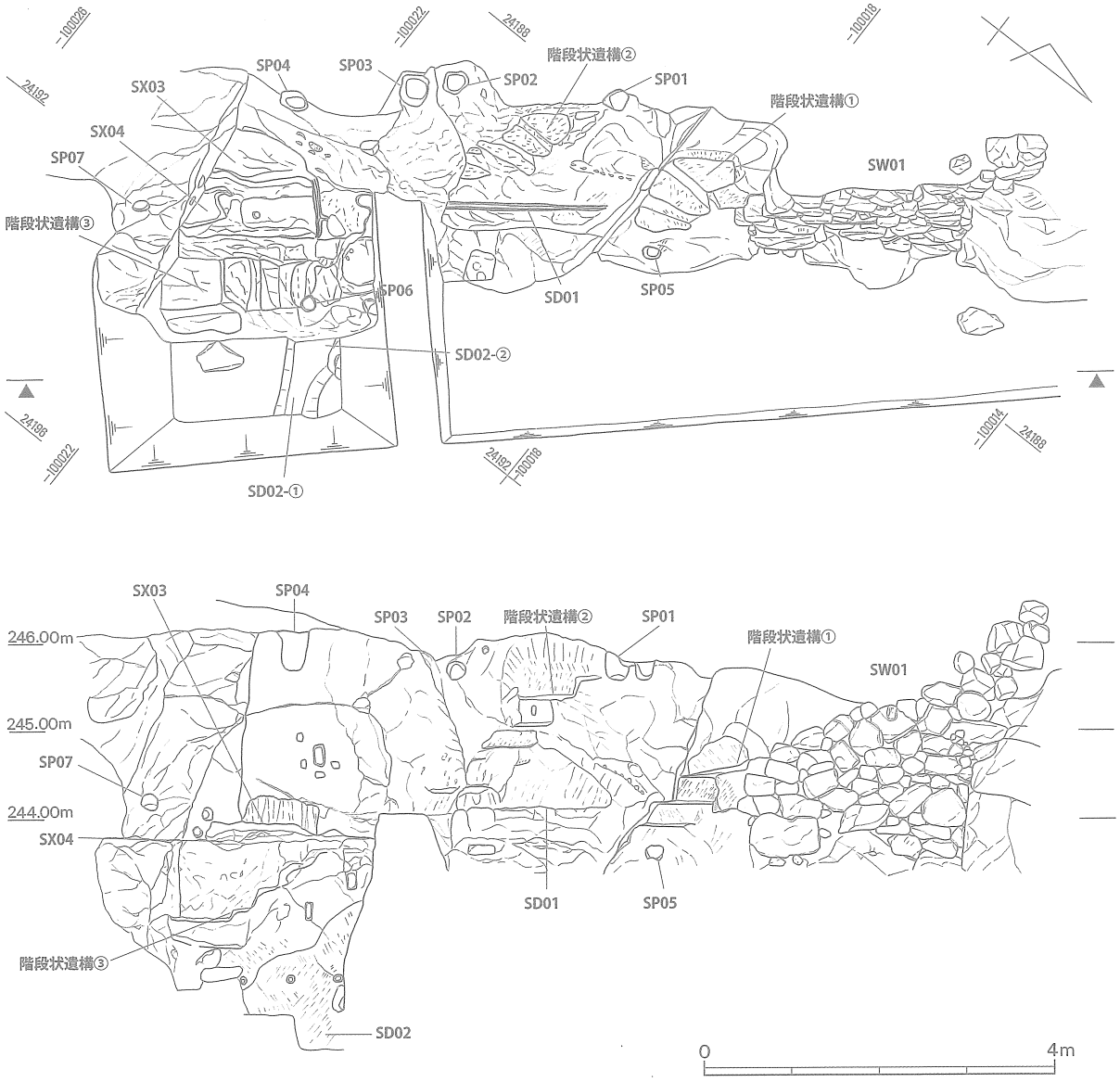


Fig. 7　昆布山谷地区第5地点Ｉ区ＳＸ02平面図・立面図（Ｓ＝1／80）

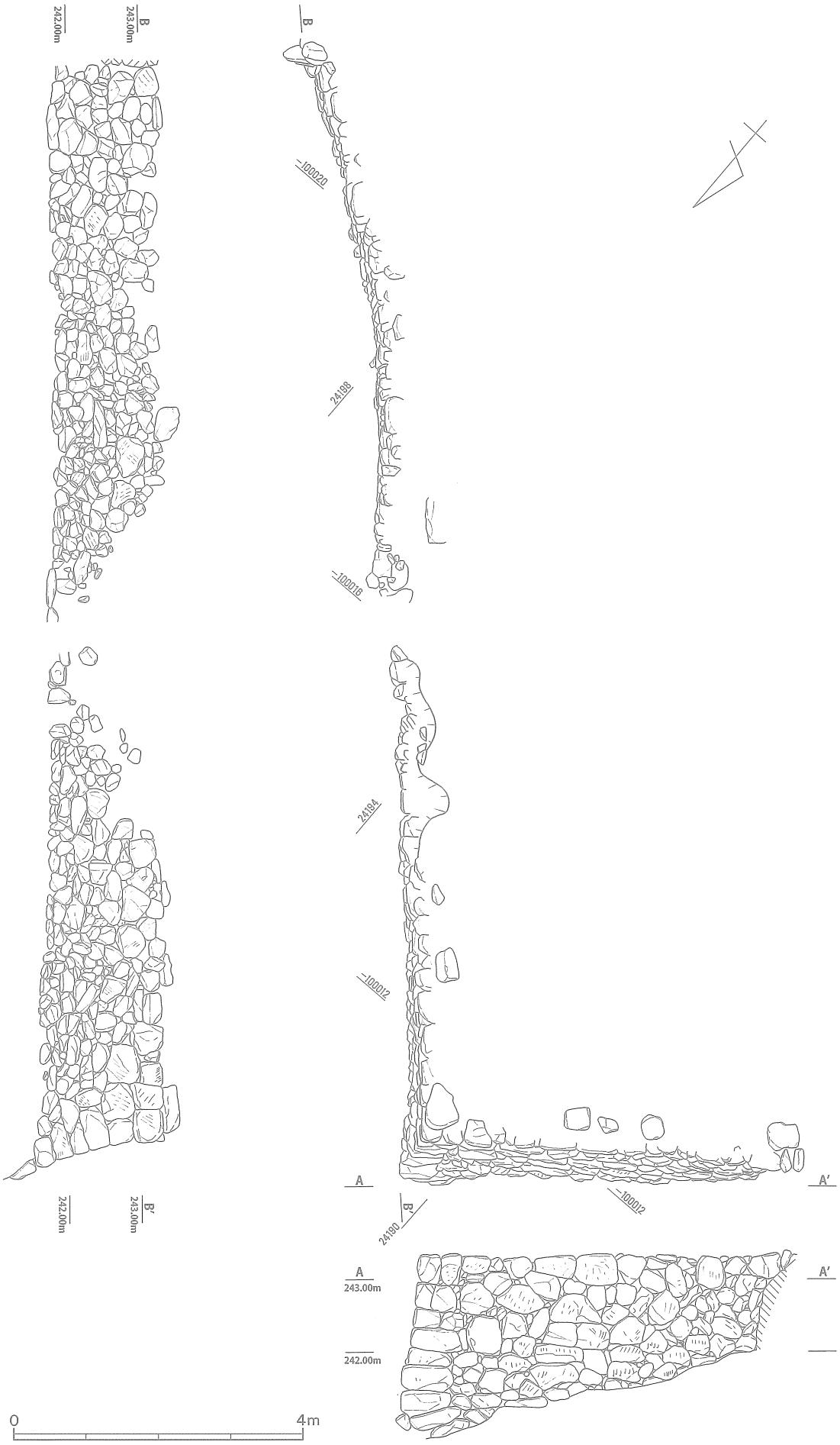


Fig. 8　昆布山谷地区第５地点Ｉ区ＳＷ 02 平面図・立面図（Ｓ＝１／80）

高台を持つ。8・9は17世紀前半の資料だが、8は表採によるもので、9は表土から出土したものであるため、Ⅰ区の各遺構の時期を反映するものではない。Ⅰ区ではこれら以外にも表土層や流土内から17世紀前半の資料がいくつか出土しており、調査区西側からの流れ込みがあったものとみられる。

③瀬戸、不明磁器

6は端反碗の蓋で、瀬戸の可能性がある。体部外面に折枝の牡丹がある。また、見込みにも文様がある。7は瀬戸・美濃の皿で、内面にトチンの跡がある。37は肥前磁器または瀬戸の碗で、見込み部に文様がある。7の瀬戸・美濃は16世紀末の遺物である。

④在地系陶器

15は鍋の蓋で、外面に飛鉋による文様がある。

⑤その他の磁器、陶器、土器

19・22は青花の皿で、19はⅠc区の第7層から、22はⅠd区の第5～8層から出土した。16世紀末～17世紀初頭に比定できる遺物だが、5～8層はいずれも第1面から第2面の間で、第1面が18世紀後半以降に造成されたと考えられることから、造成の年代を示してはいないとみられる。

12は甕もしくは壺で、胎土や釉薬の特徴から信楽とみられる。

1・25は土師質土器で、1は皿、25は焙烙である。

85は須佐のすり鉢で、Ⅰ・Ⅱ区境のSW02から出土した。

【瓦】

91・92は燻瓦、93は釉瓦である。91は軒平瓦で瓦当面には唐草の一部と蓮の文様がある。瓦当面の一部を面取りしており、丁寧な作りである。92は軒桟瓦で、瓦当面の文様は中央に蓮のある均正唐草文である。文様の横に「上」のスタンプがある。このスタンプは製品管理に関わる印や、製作された窯を示すものなどが考えられる。図化していないが、「上」以外に六角形のスタンプのある資料も出土している。93は来待釉のかかった軒桟瓦で、瓦当文様は中央に桐の葉を配した均正唐草文である。

【石製品】

94は凝灰岩(福光石)製の石造物で、形はほとんど立方体である。3面に窪みがあるが、いずれも二次的につけられたものとみられる。石見銀山遺跡内では竹田地区で94と同様に岩石の一部を窪ませた石製品が出土しており、鉱石の粉砕に使用された可能性が指摘されている。

95はかなめ石で、両面にそれぞれ10か所、5か所の凹部がある。

【金属製品】

96は鉄製の斧で、上端部に柄を入れるための四角い穴がある。97・98は銅製品で、97は一枚板を丸めて成形した水差などの注口である。98は非常に小さい切羽で、脇差や小刀につけられていたものとみられる。100・107は寛永通寶で、いずれも新寛永である。

第4節　Ⅱ区

第1項　調査の概要

Ⅱ区はⅠ区の東側に位置し、東側は水路と溝に面している。調査前から地表面上に礎石の一部が露出しており、建物遺構(SB02)が存在することが明らかであった。調査によって4枚の整地面とそれらに伴う遺構が確認された。

第2項　層序(Fig. 9)

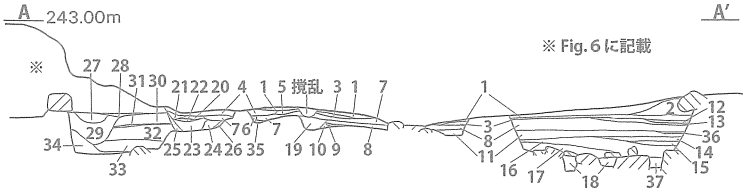
第Ⅱ区で確認された各整地面の様相は以下のとおりである。

【第1面】

第3層上面で、表土直下で検出された。標高は241.70～241.82 mである。第1面はⅡc区東壁の北部とⅡd区北壁では確認できるが、調査区の西半部で表土付近が一部攪乱されており、不明瞭になっている。また、調査区北半部と南半部においても不明瞭である。

【第2面】

第8層上面で、第1面から約5㎝下で検出された。標高は241.70～241.80 mである。SB02などのⅡ区で検出された遺構の多くは第2面に伴う。また、Ⅰ・Ⅱ区の境に位置するSW02も第2面から立ち上がっている。上面及び第1面の堆積層内から広東碗や端反碗などの磁器や、在地系の陶器類が多く出土している。広東碗は出土数が少なく、端反碗が主体となっていることから、19世紀前半～19世紀中頃まで利用されていたと考えられる。



1	2.5Y	4/1	黄灰色土(表土)
2	2.5Y	5/2	暗灰黄色土(ややしまりない)
3	2.5Y	6/4	にぶい黄色土(粘質、第1面整地層)
4	10YR	4/1	褐灰色土(やや粘質)
5	10YR	7/4	にぶい黄橙色土(粘質)
6	10YR	7/3	にぶい黄橙色土
7	10YR	5/4	にぶい黄褐色土(炭化物混じる)
8	10YR	4/2	灰黄褐色土(第2面整地層)
9	10YR	6/1	褐灰色土(よくしまる)
10	10YR	5/3	にぶい黄褐色土
11	10YR	4/3	にぶい黄褐色土(硬化、第3面整地層)
12	10YR	7/6	明黄褐色土(やや粘質、よくしまる)
13	10YR	4/2	灰黄褐色土
14	10YR	6/3	にぶい黄褐色土(よくしまる)
15	10YR	5/3	にぶい黄褐色土(しまりなし)
16	10YR	5/2	灰黄褐色土(2ミリ大の砂粒含む)
17	N	3/	暗灰色土(炭化物層)
18	2.5Y	8/3	淡黄色土(よくしまる、第4面整地層)
19	10YR	4/1	褐灰色土(SD04埋土)
20	2.5Y	5/1	黄灰色土(やや砂質、SD03埋土)
21	2.5Y	4/1	黄灰色土(SD03埋土)
22	2.5Y	6/2	灰黄色土(砂質、SD03埋土)
23	2.5Y	4/2	暗灰黄色土(砂質、SD03埋土)
24	2.5Y	5/1	黄灰色土(SD03埋土)
25	5Y	5/1	灰色土(粘質、SD03埋土)
26	5Y	6/1	灰色土(砂質、SD03埋土)
27	2.5Y	6/1	黄灰色土(砂質、溝埋土)
28	10YR	7/4	にぶい黄橙色土(粘質、第2面整地層)
29	N	2/	黒色土(かなり硬化している)
30	2.5Y	7/2	灰黄色土(砂質、固くしまる)
31	10YR	6/3	にぶい黄橙色土(粘質、第3面整地層)
32	5Y	6/2	灰オリーブ色土(やや砂質)
33	5Y	6/1	灰色土(やや砂質)
34	2.5Y	6/3	にぶい黄色土(礫を含み、粘質)
35	2.5Y	7/6	明黄褐色土(やや砂質)
36	7.5Y	5/4	にぶい褐色土(硬化、第3面整地層)
37	2.5Y	5/2	暗灰黄色土(やや砂質)
38	2.5Y	6/2	灰黄色土
39	2.5Y	5/2	暗灰黄色土(やや砂質)
40	2.5Y	7/3	浅黄色土(粘質、第2面整地層)
41	5Y	5/1	灰色土(やや砂質)
42	2.5Y	7/4	浅黄色土(粘質、SD03埋土)
43	2.5Y	6/3	にぶい黄色土(シルト質、SD03埋土)
44	2.5Y	5/1	黄灰色土(やや砂質、SD03埋土)
45	2.5Y	4/1	黄灰色土(砂質、SD03埋土)
46	5YR	6/4	にぶい赤褐色土(第3面整地層)
47	2.5Y	5/2	暗灰黄色土
48	2.5Y	3/1	黒褐色土
49	10YR	6/4	にぶい黄橙色土
50	2.5Y	4/1	黄灰色土
51	2.5Y	7/2	灰黄色土(粘質)
52	2.5Y	6/1	黄灰色土(1~2センチ大の礫含む)
53	2.5Y	6/2	灰黄色土(緻密な砂質)
54	2.5Y	7/2	灰黄色土(やや砂質)
55	5Y	7/3	浅黄色土(緻密な砂質)
56	5Y	6/1	灰色土(やや砂質)
57	5Y	6/2	灰オリーブ色土(粗い砂質)
58	2.5Y	7/2	灰黄色土(緻密な砂質)
59	2.5Y	7/4	浅黄色土(粘質)
60	5Y	7/1	灰白色土(粘質)
61	10YR	7/4	にぶい黄橙色土(粘質)
62	2.5Y	6/2	灰黄色土(砂質)
63	10YR	5/4	にぶい黄褐色土(シルト質)
64	5Y	6/1	灰色土(砂質)

0 5m

Fig. 9　昆布山谷地区第５地点Ⅱ区平面図・断面図（Ｓ＝１／100)

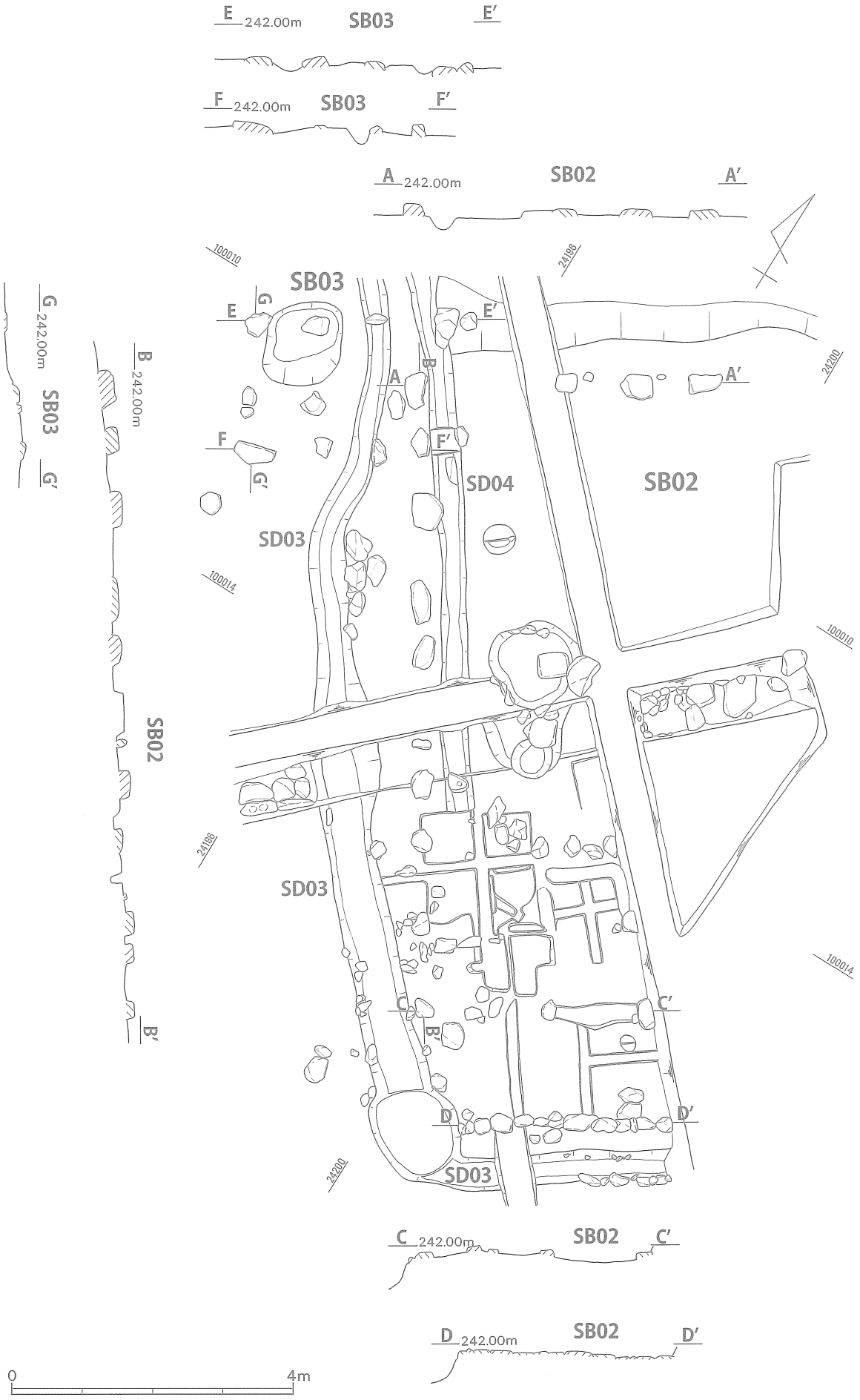


Fig.10　昆布山谷地区第５地点Ⅱ区ＳＢ 02・03 平面図・礎石断面図（Ｓ＝１／80）

【第３面】

第11層上面で、第２面から約10㎝下、標高は241.54ｍである。Ⅱｃ区北壁の一部とⅡｄ区北壁で確認した。第２面からの堆積層を掘り下げた部分で確認されたため、面的な広がりは明らかではない。出土遺物(35)より、18世紀後半から利用されているとみられる。第１～３面はそれぞれ下位の整地面の直上を整地しており、各整地面の間に堆積層を挟んでいない。第１面までは時期幅が少ないことや、大規模な土地の改変が確認できないことなどから、第３面から第１面までは連続して利用されていた可能性がある。

【第４面】

第18層上面で、Ⅱｄ区北壁及びⅡｃ区北端の下層確認トレンチで確認された。直上の第17層は炭層であった。第３面から約25㎝下で、標高は241.2～241.3ｍである。面的な広がりは確認できていないが、第３面との間に堆積層をいくつか挟んでおり、第３面まではある程度期間が空いていた可能性がある。堆積層から遺物はほとんど出土しなかった。

第３項　検出遺構(Fig. 5・9～12)

【ＳＢ02】(Fig. 5・9・10)

ＳＢ02はⅡ区の中央部、Ⅱａ～ｃ区にまたがって検出された礎石建物跡である。長辺は約10.5ｍ、短辺は確認できた範囲では４ｍだが、遺構面が東に向かって広がっており、６ｍ程度まで大きくなる可能性が強い。柱間は長辺が八間、短辺が四間以上で、礎石同士の間隔は約0.8ｍである。建物内にはＳＤ04やＳＸ07・09～11が、建物外にはＳＤ03など、多くの遺構を伴っている。床面を部分的に補修している様相が、堆積状態から確認された。ＳＢ02に伴って端反碗(29・30・32)が出土しており、19世紀前半から19世紀中頃まで利用されていたものとみられる。

【ＳＢ03】(Fig. 5・9・10)

ＳＢ03はⅡａ区の北西端部に位置する小規模な礎石建物跡である。長辺約３ｍ、短辺約２ｍで、柱間は長辺が三間、短辺が二間である。遺構西側の一部がＳＢ02と重複しているが、礎石の一部がＳＢ02の床面よりも下にあることから、ＳＢ02よりも古い建物と判断できる。内部に遺構を伴わなかったため、性格は不明である。

【ＳＤ03】(Fig. 5・9・10)

Ⅱａ・ｃ区で検出された溝状遺構である。ＳＢ02の周りを囲むように配されており、北端部は法面まで延びる。機能としては、ＳＢ02に雨水などが入らないようにするための排水溝などが想定される。幅は40～75㎝で、深さは約20㎝である。地面を掘りくぼめただけで敷石はされていないが、縁の一部で10～15㎝の円礫が検出され、少なくとも一部の縁には石が並べてあったものとみられる。ＳＢ02の周りを巡るほか、ＳＢ02内のＳＸ10にも取りつく溝が伸びており、関連する遺構とみられる。Ⅱｃ区の南部では一部が後世のかく乱によって壊されている。また、Ⅱｃ区北壁付近では溝の縁に杭の跡が50～80㎝間隔で残っており、板橋がかけられていた可能性がある。埋土内からは端反碗(38)が出土しており、19世紀初頭～19世紀中頃の遺構と判断できる。また、石見系陶器などの在地系陶器(39、40、41、44、45)も出土している。

【ＳＤ04】(Fig. 5・9・10)

ＳＤ04はⅡａ・ｃ区のＳＢ02内で検出された溝状遺構で、ＳＢ02西壁と平行している。幅は35～40㎝で、調査区北部の法面付近では約65㎝まで広がっている。深さは約15㎝でＳＤ03に比べてやや小さい。北端部は法面に、南端部は後述するＳＸ10につながっている。

【ＳＫ01】(Fig. 5・9・11)

Ⅱａ区の東壁沿いで検出された直径47㎝の円形の土坑である。深さは12㎝で、断面形は皿形である。埋土には炭化物が多く含まれており、黒色を呈しているが、土坑内及び周囲に被熱痕はなかった。炉跡ではないが、埋土内から遺物が出土しなかったこともあり、性格を明らかとすることはできなかった。

【ＳＸ07】(Fig. 5・9・11)

Ⅱｃ区の南東部で検出された円形の遺構である。直径は23㎝、深さは９㎝で、断面形は皿形である。底面には厚さ１㎝程度の炭化物層があり、その上に黄褐色粘質土をかぶせている。底部に炭化物を敷いていることから、製錬炉とみられる。遺構の周囲に粘土を敷いて埋める典型的な炉の構造である。粘質土は廃棄された時に炉を埋めるためのものとみられる。

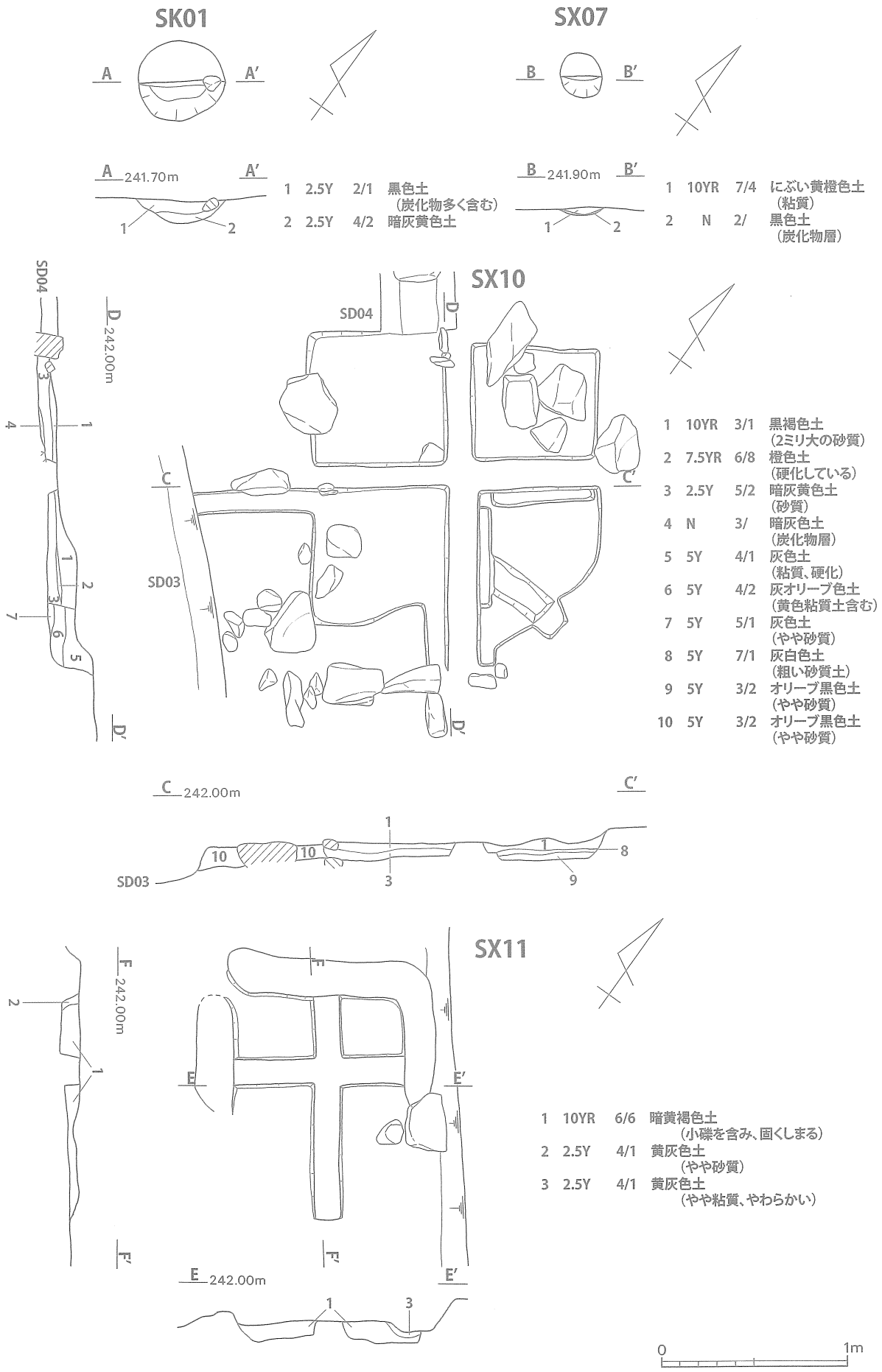


Fig.11　昆布山谷地区第５地点Ⅱ区ＳＫ 01・ＳＸ 07・10・11 平面図・断面図（Ｓ＝１／30）

【ＳＸ08】(Fig. 5・9)

Ⅱｃ区の東部、ＳＢ02の礎石の間で検出された溝状の遺構である。幅は約35㎝で、深さは約20㎝である。礎石の間をつなぐようになっており、壁の下部構造とも考えられる。

【ＳＸ09】(Fig. 5・9)

Ⅱｃ区の中央部で検出された。赤褐色の固い面を層状に叩き締めた遺構で、遺構面から10㎝程度高くなっている。平面形は約1.4ｍ×0.9ｍの長方形で、長辺の中央部に幅約10㎝、深さ約10㎝の溝があり、東西に分かれている。溝の側壁は垂直に立ち上がっており、板状のものが挟まっていた可能性がある。北側の長辺には礫が並んで埋め込まれていた。遺構内からは肥前陶器(48)や、ガラス製とみられる遺物(99)が出土しているが、肥前陶器は16世紀末から17世紀初頭に比定できる古い遺物のため、流入したものと判断される。これら以外にも磁器片が数点出土しているが、小片のため掲載しなかった。

【ＳＸ10】(Fig. 5・9・11)

Ⅱｃ区のＳＢ02内で検出された遺構で、平面形は一辺約155㎝の方形で深さは約10㎝である。地面を掘りくぼめて作られた遺構で、床面は硬化している。北部に法面まで延びるＳＤ04が取りついている。また、ＳＸ10の西側にはＳＤ03に延びる溝が、南東部分にはＳＸ09・10の方向に延びる溝が掘られており、それぞれが関連する遺構であった可能性があるが、現状では性格は不明である。類例の検出が待たれる。埋土内からは肥前磁器(50)が出土した。

【ＳＸ11】(Fig. 5・9・11)

Ⅱｃ区の東部で検出された。東部の一部が東壁内にかかっているため全体の検出はできていないが、検出範囲では外側が東西65㎝、南北44㎝、内側が東西92㎝、南北55㎝、深さは約10㎝である。遺構の南側はなだらかに立ち上がっており、遺構面と明瞭に区別できなかった。掘り込みの周囲は灰色の硬質土を南に開くコの字形に成形しており、遺構内には小礫を多く含む固い明黄褐色土がつまっていた。周辺に炭化物や焼土の散布はなかったが、遺構の周囲10㎝程度のコの字形の範囲が硬化しており、使用に伴って変化した可能性がある。遺構の用途は不明である。

【ＳＸ12】(Fig. 5・9)

Ⅱｃ区の北東端で、東西ベルトの南に設定したサブトレンチ内で検出された遺構である。第2遺構面からは約50㎝下位となり、標高は約241.3ｍである。一辺40～50㎝程度の上面が平らな石を敷き詰められており、石敷き遺構と考えられる。トレンチ内では4個が検出されており、かなめ石を転用したものも見られる。検出範囲が矮小なため、石敷きの全体規模は不明であるが、検出レベルから第4面に伴う遺構の可能性が高い。

【ＳＸ13】(Fig. 5・9)

Ⅱｂ区の北東隅で検出された遺構である。30～60㎝の礫を東西方向と南北方向に並べた遺構で、検出された範囲では東西方向は礫2個で幅約1.4ｍ、南北方向は礫5個で幅約1.7ｍである。建物の敷地を区画するための石列とみられ、ＳＷ05とＳＸ13の間は幅約1.8ｍの通路状になっている。東西方向の石列には中央部に隙間があるが、本来は石を置いていた可能性がある。

【ＳＷ04】(Fig. 5・9・12)

ＳＷ04はⅡ区南端部に構築された幅約4.4ｍの石垣で、上半は崩れている部分が多い。ＳＷ02の東側と直角に接しており、Ⅲ区北側の区画を広げる際に構築したものとみられる。高さは約1.2ｍで、最高点の標高は約242.3ｍ、基底部の標高は約241.6ｍである。

築石には凝灰岩質の割石を使用している。大きさは幅20～40㎝で、積み方は乱積みである。ＳＷ02の基底部よりも高い面から積み上げられており、ＳＷ02に後出する遺構である。

【ＳＷ05】(Fig. 5・9・12)

ＳＷ05はⅡｂ区北東端部の幅約5.2ｍにわたって構築された石垣である。高さは約1.3ｍで、最高点の標高は約243.0ｍ、基底部の標高は約241.7ｍである。調査区東側の道とⅡ区の平坦面を区画するための石垣の可能性がある。

築石にはＳＷ01・02と同様に凝灰岩質の割石を使用している。築石のほとんどは不定形だが、表面には鑿の痕が残るものもあり、大きさや形をある程度調整した様子が窺える。築石の多くは幅30～80㎝で、隙間に幅10～15㎝の小礫を詰めている。石積みの

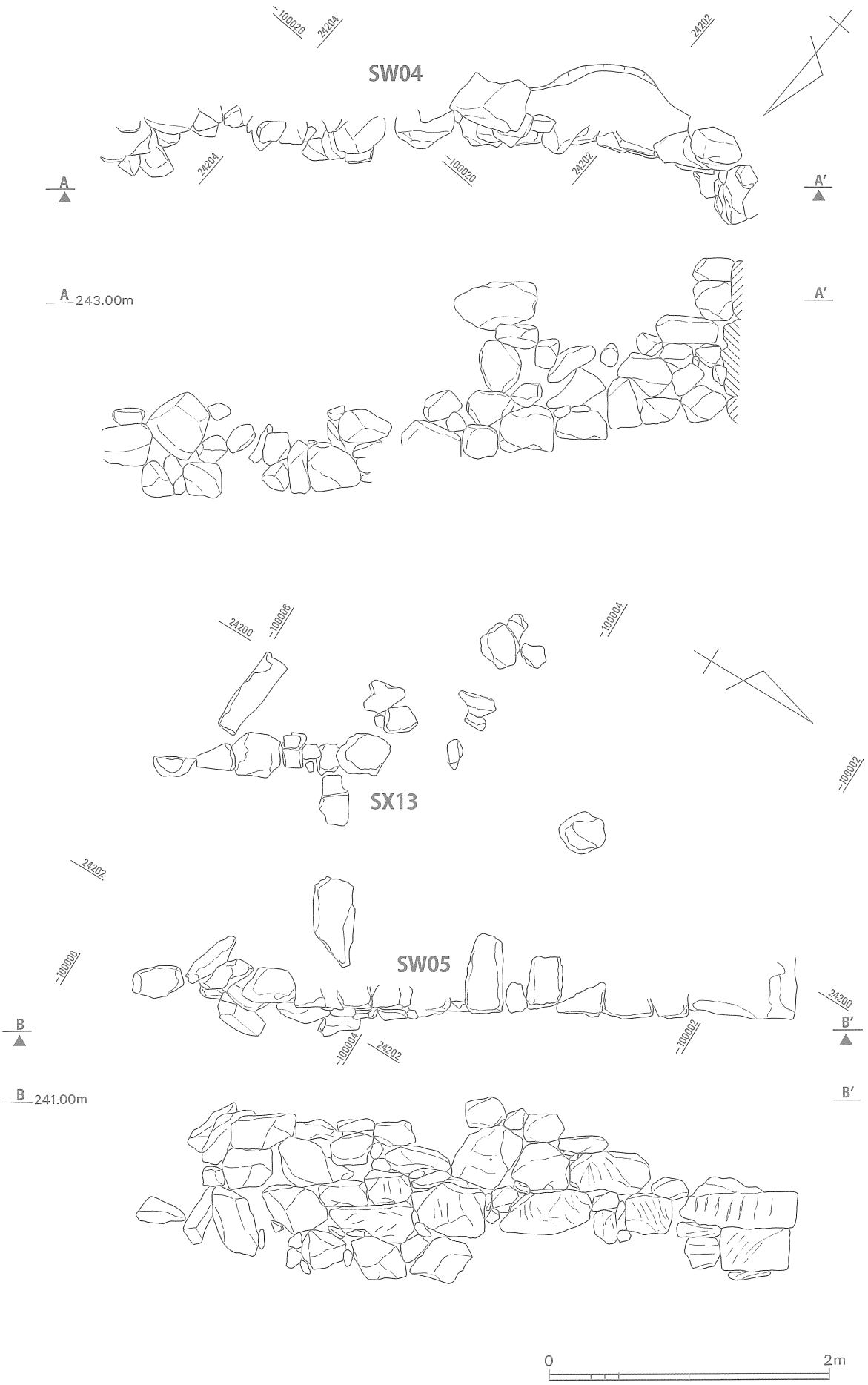


Fig.12　昆布山谷地区第５地点Ⅱ区 SW04・05 平面図・立面図（S＝1／40）

前面は割合整えられており、高さを調節しながら積んだ過程が窺える。北端部は四角形に成形した石を重ねて端部を整えており、算木積みとしていた可能性が高い。裏込めにはズリとみられる小礫と粘質土が詰まっていた。

第４項　出土遺物 (Fig.15･16･18 ～ 20、Tab. 3 ～ 5)

遺物としては陶磁器類と銭貨が出土した。陶磁器類には広域に流通していた肥前や瀬戸などのほか、石見系陶器などの在地系陶器がある。

【陶磁器類】

①肥前磁器

肥前磁器では、碗 (16・17・30・35・36・37・38・51・52・53・54・63・69・70・77・78)、蓋 (5・49・50・65・71・79)、皿 (28・55・60)、鉢 (31・64)、紅皿 (18) などが出土した。

35 は外青磁で、口縁部内面に荒い四方襷文がある。30・36・38・51・52・54・70 は端反碗である。30 には口縁部内面に雷文帯があり、体部外面には龍の文様と渦・雷文がある。一部に焼継による補修痕がある。51 は口径 9.2㎝で、普通のものに比べてやや小型である。体部外面と口縁部内面に櫛描きの波形の文様があり、見込み部には櫛描きの波形文様を六角形にあしらっている。52 は口縁部内面に渦の文様があり、その上下に二条ずつ圏線が巡っている。見込み部には一条の圏線と文様がある。54 は体部外面と口縁部内面に氷裂文がある。また、見込み部にも文様がある。70 は文様構成が 52 と類似している。外面には手描きによる丸文が８個ある。口縁部内面に渦の文様があり、その上下に二条ずつ圏線が引かれている。見込み部には一条の圏線と文様がある。69・77 は広東碗である。69 は口縁部の内外に二重の圏線があり、体部外面には唐子と牛の絵がある。77 には、体部外面に上下が反転した花の文様がある。また、見込み部にも文様がある。

５・49・71・79 は広東碗の蓋である。５には体部外面とつまみの内側に文様がある。つまみは径が 5.0 ㎝と大きい。見込み部には一条の圏線がある。71 は外面に唐草文がある。つまみが大きく、丸く立ち上がる。79 には体部外面に亀の文様が、口縁部内面に四方襷文がある。50 は段重の蓋で、口縁部に段がある。文様は体部外面に丸文と二重の圏線がある。65 は外面全体に花とつぼみの文様が３個ずつあり、内面には雷文と二条の圏線、見込み部には崩れた松竹梅の環状文がある。また、内面には焼成時についた段がみられる。松竹梅の環状文は 18 世紀後半からよく見られるが、この資料では文様が崩れている。そのため、時期的にやや下るものと考えられ、端反碗の時期に比定できる。

55 は輪花の皿で、見込み部に花と蝶の文様がある。60 は大皿で、畳付けが釉剥ぎされ、内面の全体に文様が描かれている。55・60 にはいずれにも焼継による補修痕がある。

31 は蛇の目凹形高台を持つ鉢で、体部外面には唐草文様、体部内面には花と蝙蝠、見込み部には蝙蝠の文様がそれぞれ描かれている。文様のタッチは荒い。64 は型打成形による鉢で、有田の可能性がある。一部に焼継による補修痕がある。

②肥前陶器

皿 (48)、鉢 (82) などが出土した。

48 は底部が露胎し、底部付近に段がある。内面には胎土目があり、製作年代は 16 世紀末～ 17 世紀初頭とみられる。

③瀬戸、不明磁器

碗 (29)、小坏 (2)、蓋 (32) が出土した。

29・32 は瀬戸である。29 は端反碗で、外面には竹の文様がある。口縁部内面と見込み部にも文様がある。２は器壁が非常に薄く、内面には赤と金の上絵付けによる文様がある。32 は端反碗の蓋で、外面体部は二本の直線と円形と三角形で構成される区画帯で五つに区画され、区画の中に花と渦の文様がある。口縁部内面には四方襷文が変化したような連続する三角形の文様がある。また、見込み部にも文様がある。２は瀬戸の可能性がある小碗で、内外に上絵付けによる文様がある。

④在地系陶器

蓋 (76)、皿 (40･73･74)、鉢 (41･61･68)、甕 (45)、小壺 (75)、鍋 (33・58)、土瓶 (62)、水注 (44)、灯明皿 (39・66・67) などが出土した。

40 は皿で、内面に四条の櫛描き文があるほか、体部外面に墨書で「○」を描いている。73 は外面が露

胎し、内面に３か所胎土目がある資料で、口縁部外面にススが付着していることから灯明皿として使用されていたものとみられる。74 は見込み部に鉄釉で「寿」を書いている。また、底面と割れ面にススが付着している。

41 は薄づくりの鉢で、口縁部の内側が肥厚している。68 は玉縁口縁をもつ鉢で、体部はやや肩が張っている。形態の特徴から片口がつく可能性がある。

33・58 は鍋で、いずれも外面には施釉されていない。58 には口縁部に２か所取手が外れた跡がある。また、外面下部はやや黒く、ススが付着していた可能性がある。

62 は土瓶で、取手と注口が外れている。体部外面に鉄釉で「藤□(硫黄)組大森鑛山所」と記載されており、藤田組に関連する遺物である。後述するがⅢ区の建物遺構（ＳＢ０４）は明治期の藤田組に関連する建物跡の可能性があり、そこから流入した可能性がある。

⑤その他の土器、陶器、土製品

碗 (72・80)、蓋 (43・56・57・83)、皿 (20・81)、すり鉢 (13・34・84・85)、湯呑 (42)、サナ (46) などが出土した。

72 は萩で、高台が小さく京焼風の遺物である。底部は露胎し、表面は釉に嵌入がみられる。

42・80 は布志名とみられる。

56 は急須の蓋で、丸いつまみを持ち、その周囲を二重の圏線が巡っている。裏面は無釉である。43・57 は鍋の蓋で、上面に飛鉋による施文がある。57 には背面に蛇の目釉剥ぎがある。

13・34・84・85 はすり鉢である。13・34・84 は玉縁口縁を持ち、擂目の上端部はナデ消している。胎土のきめは粗い。85 は須佐である。

【金属製品・その他】

銭 貨 (101・102・103・104・105・106・108・109・110)、ガラス質の遺物 (99) が出土した。

105・106・108・109 は寛永通寶で、いずれも新寛永である。110 は無文銭である。99 は緑色でガラス質の遺物である。断面は正方形で、非常に形が整っている。簪の一部の可能性がある。

第５節　Ⅲ区

第１項　調査の概要

第Ⅲ区は調査区全体の南部に位置する、礎石建物跡（ＳＢ 04）を主とする調査区である。発掘調査によってＳＢ 04 の内部から鍛冶炉とみられる遺構等が検出されたことから、鍛冶場として使用されていた可能性がある。ＳＢ０４は調査前には一部が見える程度であったが、調査によって全体が検出され、特に流土に覆われていた西半部は非常に良好な状態で残存していることが明らかとなった。

第２項　検出遺構 (Fig. 5・13)

【ＳＢ０４】(Fig. 5・13)

ＳＢ０４は割石の基礎を持つ礎石建物である。軸は南西方向で、規模は東西約 5.7 m、南北約 5.0 m である。礎石は岩盤やＳＢ０１・０２と同質の凝灰岩質の石材で、表面には鑿による加工痕が見られる。ＳＢ０１・０２とは異なり、礎石を隙間なく並べている。基礎の割石は西部では平坦なものを、東部では最大で厚さ約 80㎝の分厚いものを使用している。基礎の上面の大部分は平らに加工しており、土台建物の基礎であったとみられる。東面の一部には土台をのせるための段状の加工が設けられている。基礎の南東部には建物の外につながる溝が彫られている。南面は礎石が一部抜かれている可能性があるが、北面の２つは礎石を切り込んでいた。床の西側は岩盤及び基盤層の上に粘土を貼り、東側は整地土の上に粘土を貼っている。整地土内 (Fig.13、第７層) から明治期のものとみられる石見系陶器 (87) の破片が出土したことから、明治時代以降に建てられた建物と判断できる。個別の遺構については後述するが、内部には土坑ＳＫ 02・03、粘土貼りをしたＳＸ 14、鍛冶炉ＳＸ 15・16 などの遺構があることから、ＳＢ 04 は鍛冶場であった可能性が高い。また、第Ⅱ区で土瓶 (62) が流れ込みによるものであれば、ＳＢ 04 は藤田組に関連する建物の遺構の可能性が考えられる。

ＳＢ 04 の北側に設定したⅣ区北拡張区では、重ねた瓦が礎石に沿って並べられていた。出土した瓦はほとんどが平瓦だが、隅瓦 (90) なども含まれている。また、燻瓦や釉薬瓦など時期の異なるものが混在している。

【ＳＫ 02】(Fig. 5・13・14)

ＳＫ 02 はＳＢ 04 の東半部に位置する。平面形は一部がやや凹む円形で、直径は 40 ～ 45㎝である。遺構の南側に小穴があり、金床を固定していた杭の穴の可能性がある。深さは約 20㎝で、埋土の上半は炭化物を多く含む黒色土、下半はスラグや粉炭が二次的に固まった黒色の再結合滓状の堆積物である。

【ＳＸ 14】(Fig. 5・13・14)

ＳＸ 14 は、ＳＢ 04 の南端で検出された遺構である。平面形は、不整な長方形をしているが、東部はかく乱により不明瞭である。また、西端部は土層観察用畦の下となるため、全体規模は不明で、現状で検出した規模は約 120㎝× 70㎝、深さは約 15㎝である。畦の西側では遺構が確認されなかったことから遺構西端は畦内で終息していると考えられる。遺構は建物南側の礎石列に接して平行に掘られており、底面は皿形をしている。遺構内の北端では遺構端部に沿って幅約 10㎝の黄色粘土が直線的に検出された。この粘土の南面は、高さ約 10㎝程ほぼ垂直に立ち上がっている。土層図 (Fig.14) では確認できないが、底面直上で検出した灰黄色粘質土 (Fig.14、第３層) 上では一部硬化した面がほぼ水平に確認された。この面で黄色粘質土が途切れており、黄色粘質土はこの面から構築されたものと考えられる。こうした検出状況から、本遺構は一度掘り下げた後、灰黄色粘質土で整地し、何らかの構築物を設置した痕跡と解釈することが可能である。また、

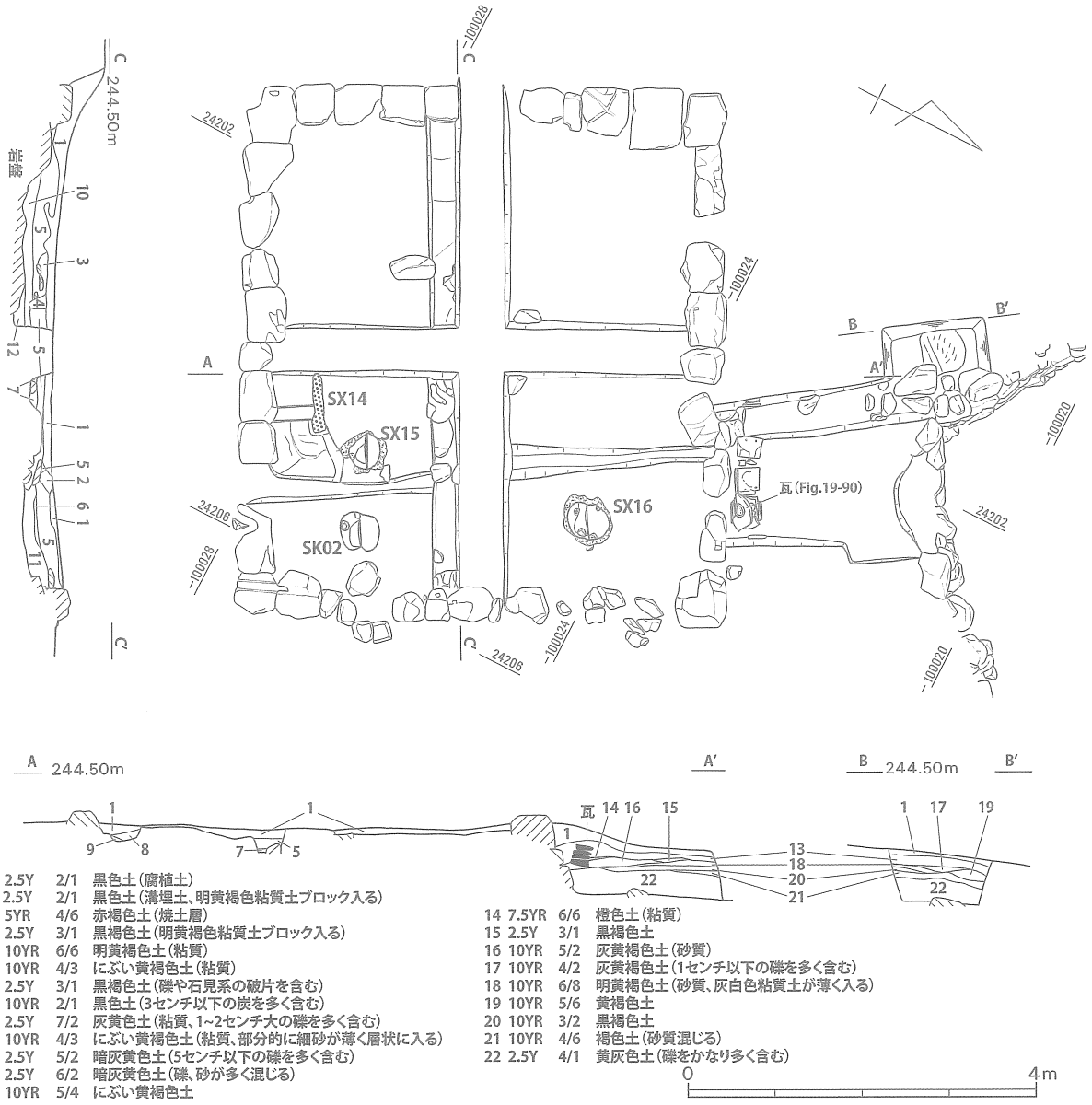


Fig.13　昆布山谷地区第５地点Ⅲ区ＳＢ 04 平面図・断面図 (Ｓ＝１／ 80)

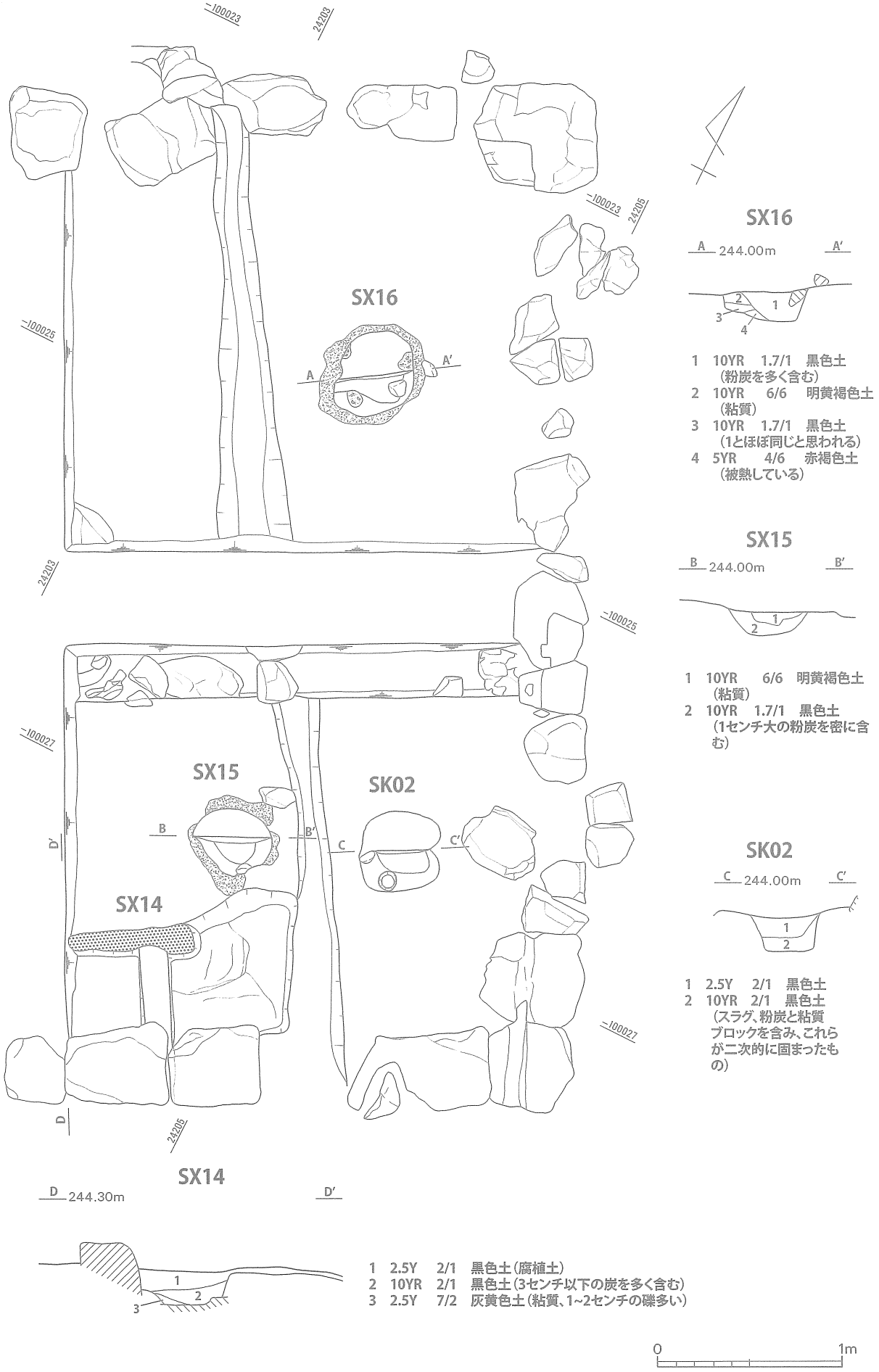


Fig.14　昆布山谷地区第５地点Ⅲ区ＳＫ 02、ＳＸ 14・15・16 平面図・断面図（Ｓ＝１／30）

土層確認用畦で黄色粘土及び硬化面が確認できなかった理由については、遺構の西端部に当たることから、構築物がこの位置にまで及んでいなかったと推定することができる。

遺構は建物南側に接していることから、想定される構築物は建物南壁にほぼ接して平行に設置されていたと考えられる。黄色粘土の南端から礎石までの距離は約45cmであるので。長さは不明ながら幅約45cm程度の構築物が推定される。

本遺構は、上記の検出状況に加え、遺構の北東側に存在する鍛冶炉（ＳＸ15）、鉄床跡（ＳＫ02）との位置関係などから、鞴座の可能性が高いと考えられる。

【ＳＸ15】(Fig. 5・13・14)

ＳＸ15はＳＢ04の南東部に位置する。平面形は直径約45cmの歪んだ円形で、深さは13cmである。埋土内には1cm大の粉炭を密に含む黒色土の層がある。遺構の周囲5～10cmの範囲が被熱しており、鍛冶炉の可能性がある。

【ＳＸ16】(Fig. 5・13・14)

ＳＸ16はＳＢ04の北東部に位置する。平面形は直径約38cmの不整円形で、深さは15cmである。遺構の周囲5～10cmの範囲が被熱しており、遺構埋土に粉炭を多く含む黒色土が含まれることから、鍛冶炉の可能性がある。遺構の西部に10cm弱の粘土塊があり、その下には炭化物が見られることから、本来は直径約45cmの大きさであったが、一部を改修して小さくしている可能性がある。

第3項　出土遺物 (Fig.15～20、Tab. 3～5)

ＳＢ04の整地土内から石見系陶器の甕(87)が出土した。87は復元口径が44.0cmと大きく、大甕として使用されていたものとみられる。光沢のある来待釉が全体にかかっていることや、口縁部が内外に肥厚し、上部に平坦面を作っていること、口縁部から体部にかけて段があるなどの特徴から明治時代以降の遺物とみられる。59はⅢ区上面で表採された土瓶の蓋である。89は土師質の焜炉で、Ⅲ区北拡張区第14層から出土した。外面全体にハケ目と縦方向にヘラ描きした切れ目のような文様がある。

90はⅢ区北拡張区で出土した隅瓦で、瓦当には反時計回りの巴文と16個の連珠文がある。瓦当裏面には粘土がはみ出た痕跡と木目が残っており、瓦当文様の型起しの際についたとものとみられる。平部の裏面にはヘラで「×」が描いてある。Ⅰ区の流土内から出土したものと接合した。

第6節　小結

昆布山谷地区においては谷の中ほどを第5地点として発掘調査を実施した。調査成果としては、①岩盤加工遺構（ＳＸ02）が良好な保存状態で検出されたこと、②Ⅰ～Ⅲ区の各調査区で建物跡が検出され、土地の利用状況が明らかとなったこと、③Ⅰ区平坦面における下層確認によって、少なくとも17世紀前半から土地の利用が始まったことや現在の地形が形成された時期が明らかとなったことなどが挙げられる。

ＳＸ02は第5地点の西側で検出された岩盤加工遺構で、岩盤に階段状遺構や水溜状遺構、柱穴などが彫り込まれている。階段状遺構は第5地点西側の狭い平坦面に続いており、調査区西側の平坦面上に何らかの施設があった可能性が想定される。第5地点の南西には長楽寺跡と墓所があるため、そこに続く道があったとも考えられる。

本年度調査を実施したⅠ～Ⅲ区ではそれぞれで建物遺構（ＳＢ01～04）が検出された。Ⅰ区で検出されたＳＢ01は、出土遺物より幕末頃まで利用されていたとみられる建物跡である。内部に遺構を伴わないため性格を明らかにすることはできなかったが、石垣で造成した平坦面の広い範囲に建てられており、昆布山谷の景観を考える上では重要な遺構といえる。Ⅱ区で検出されたＳＢ02は、建物内で製錬炉とみられるＳＸ07が検出されたことから、製錬にも関連する建物であったとみられる。内部の遺構は南半に集中しており、北半ではほとんど検出されなかったため、北半と南半で利用方法が異なっていた可能性が考えられる。Ⅲ区で検出された建物遺構（ＳＢ04）は、出土遺物から近代以降に建てられたとみられる建物跡である。建物内で金床を置いていた可能性のある遺構や鍛冶炉が検出されたことから、鍛冶場として利用されていた建物跡と考えられる。また、周辺で出土した土瓶(62)から、近代に石見銀山の開発を主導した藤田組に関連する可能性が考えられる。

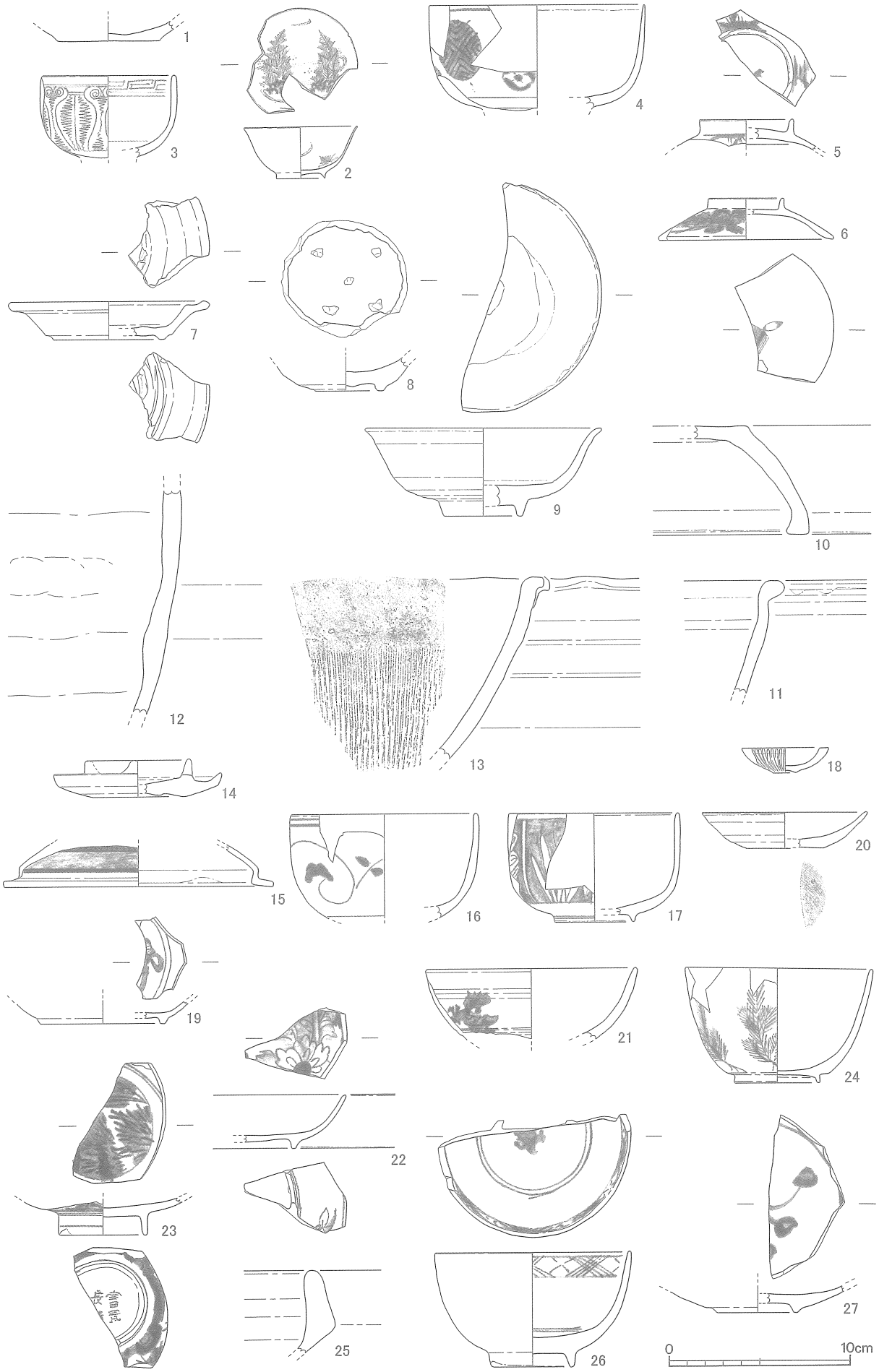


Fig.15　昆布山谷地区第５地点出土遺物実測図Ⅰ（Ｓ＝１／３）

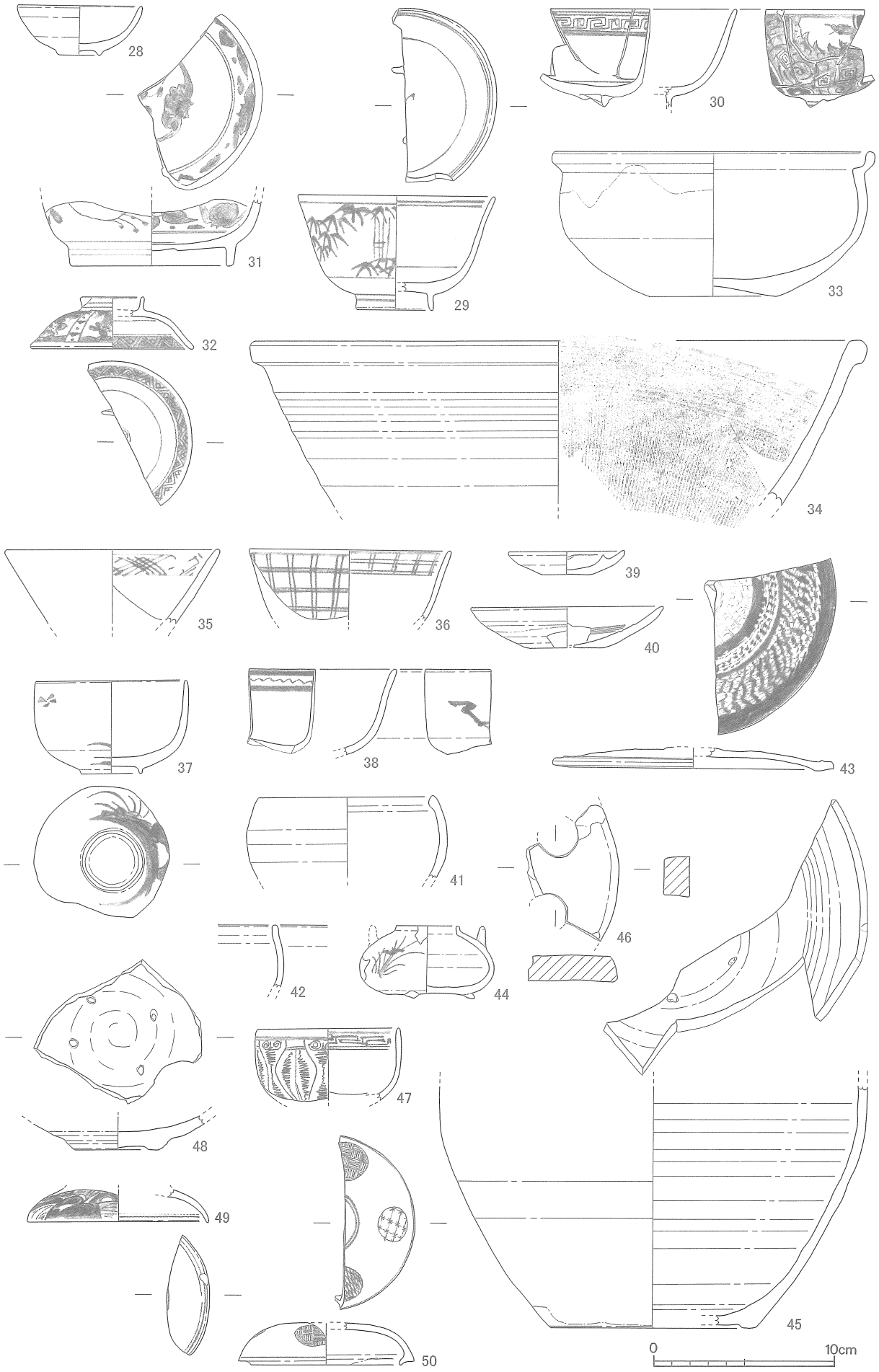


Fig.16　昆布山谷地区第５地点出土遺物実測図Ⅱ（Ｓ＝１／３）

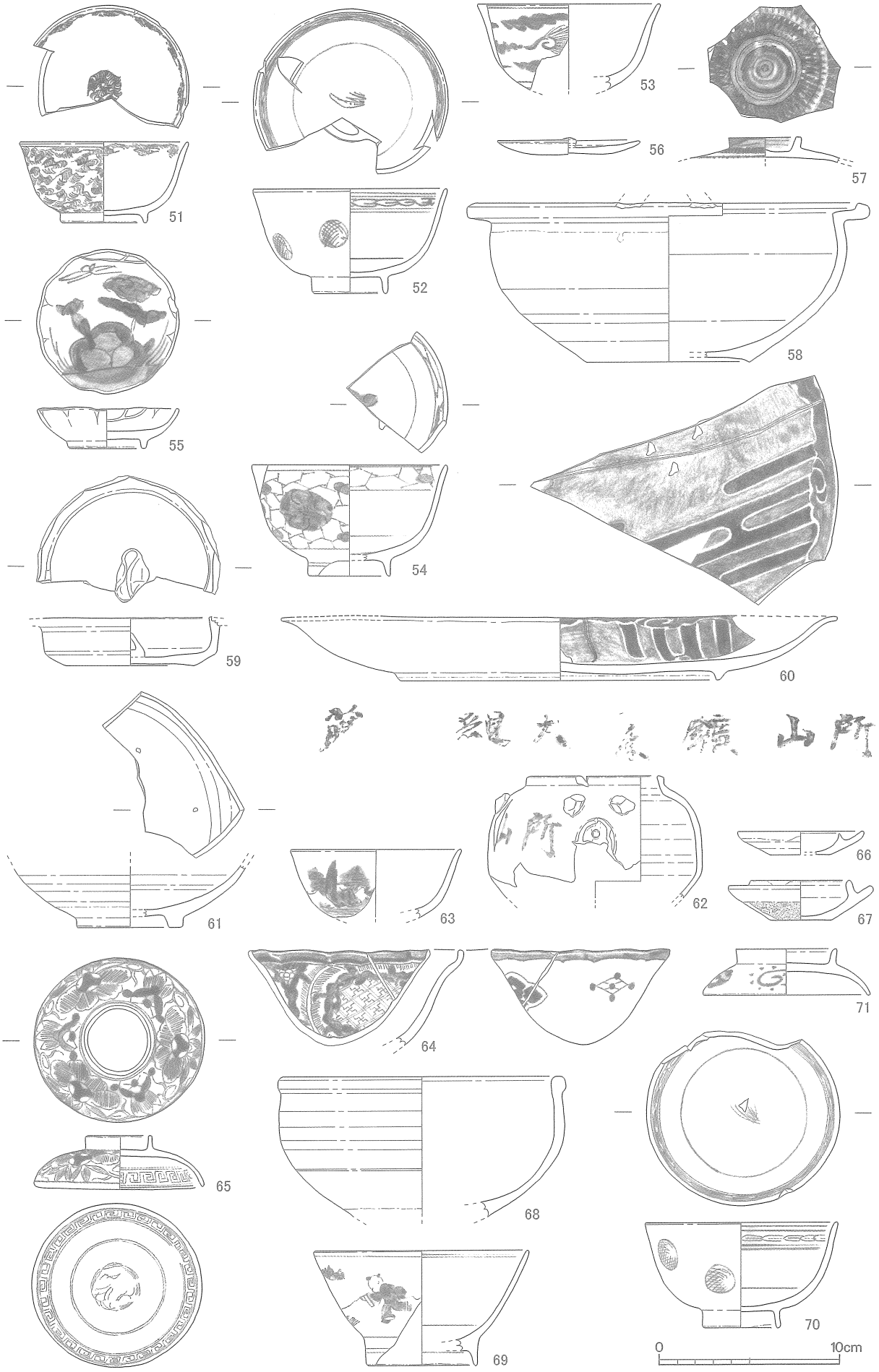


Fig.17　昆布山谷地区第５地点出土遺物実測図Ⅲ（Ｓ＝１／３）

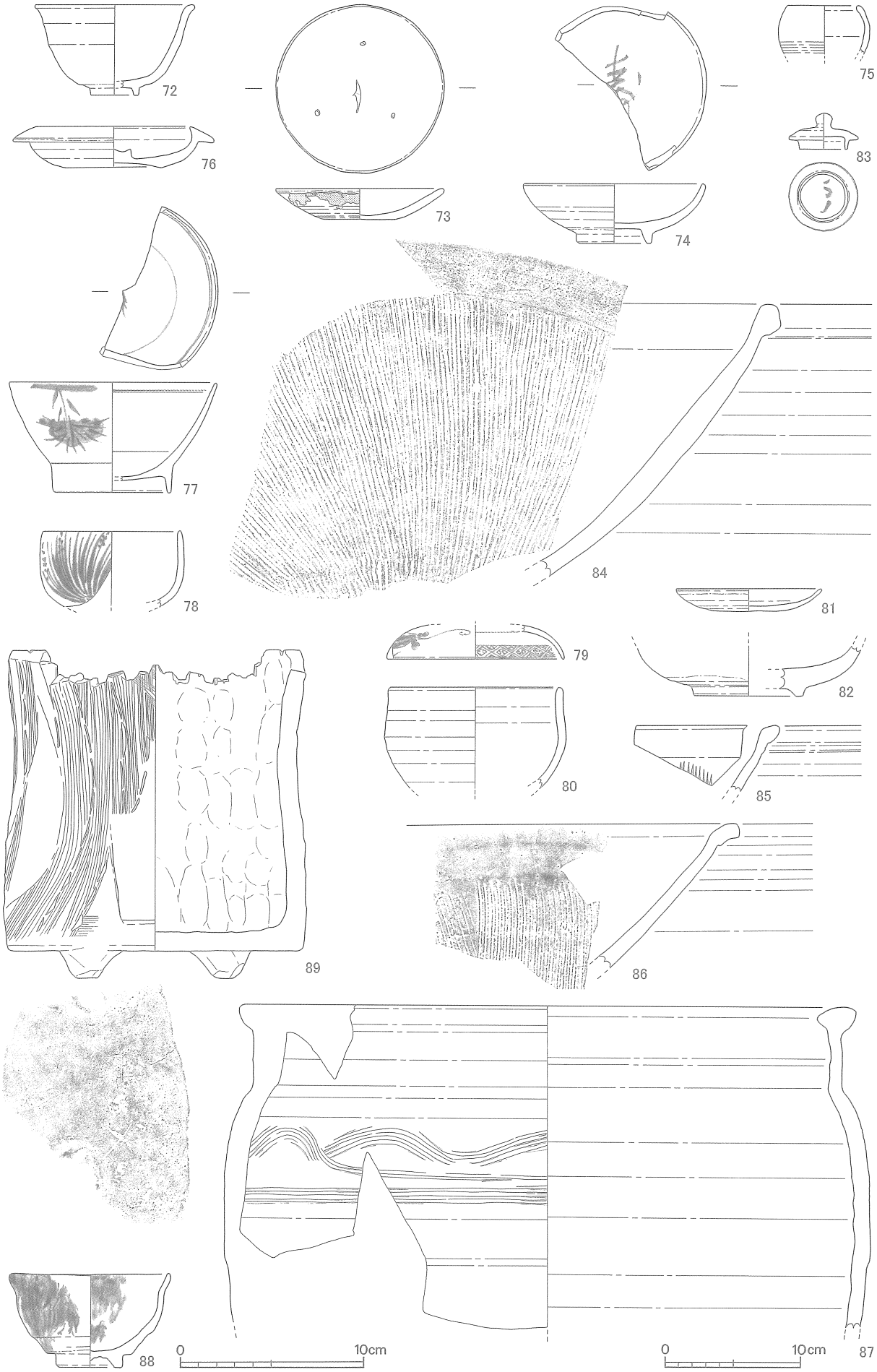


Fig.18　昆布山谷地区第５地点出土遺物実測図Ⅳ（Ｓ＝１／３、１／４）

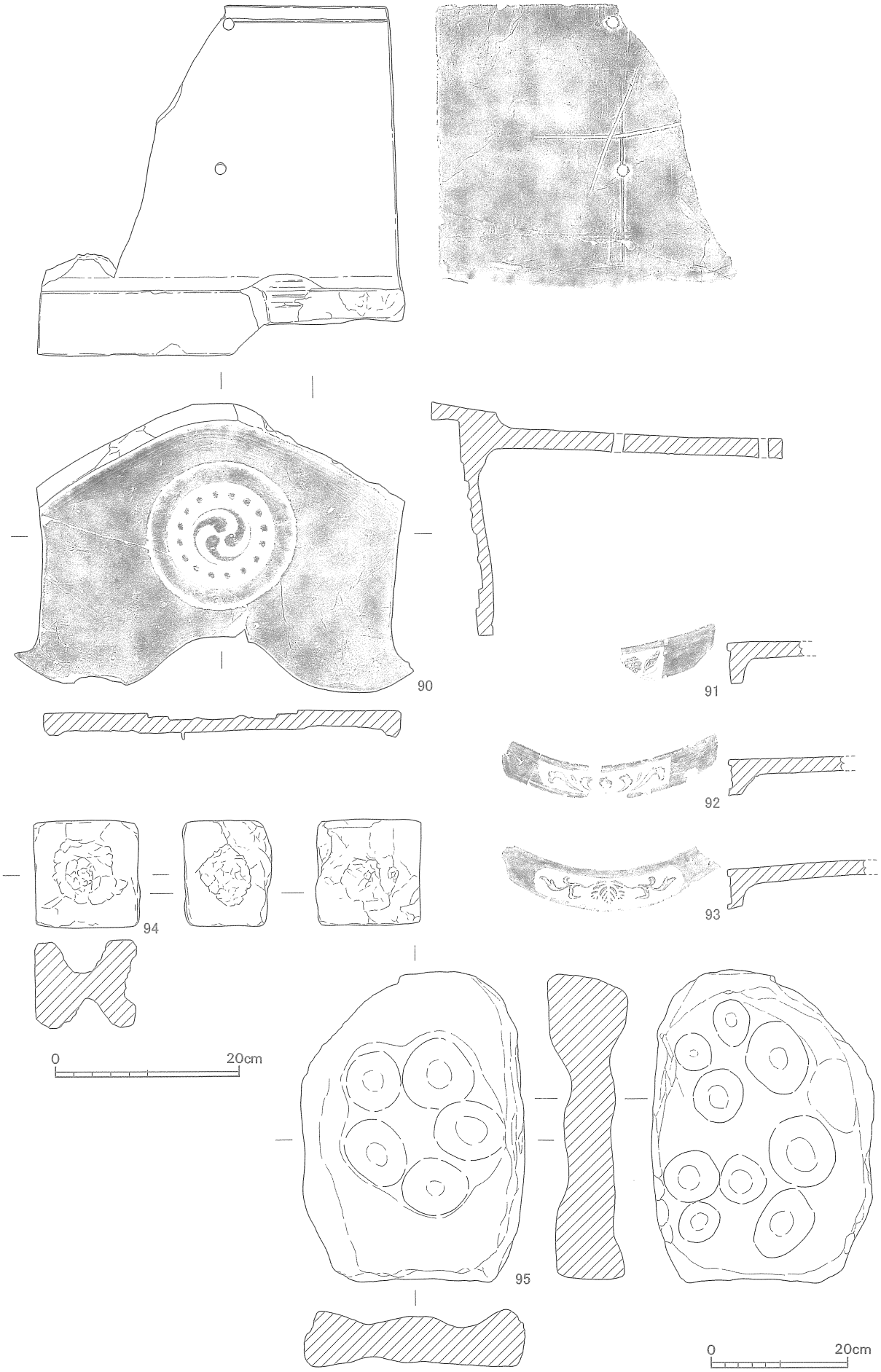


Fig.19　昆布山谷地区第５地点出土遺物実測図Ⅴ（Ｓ＝１／６、１／８）

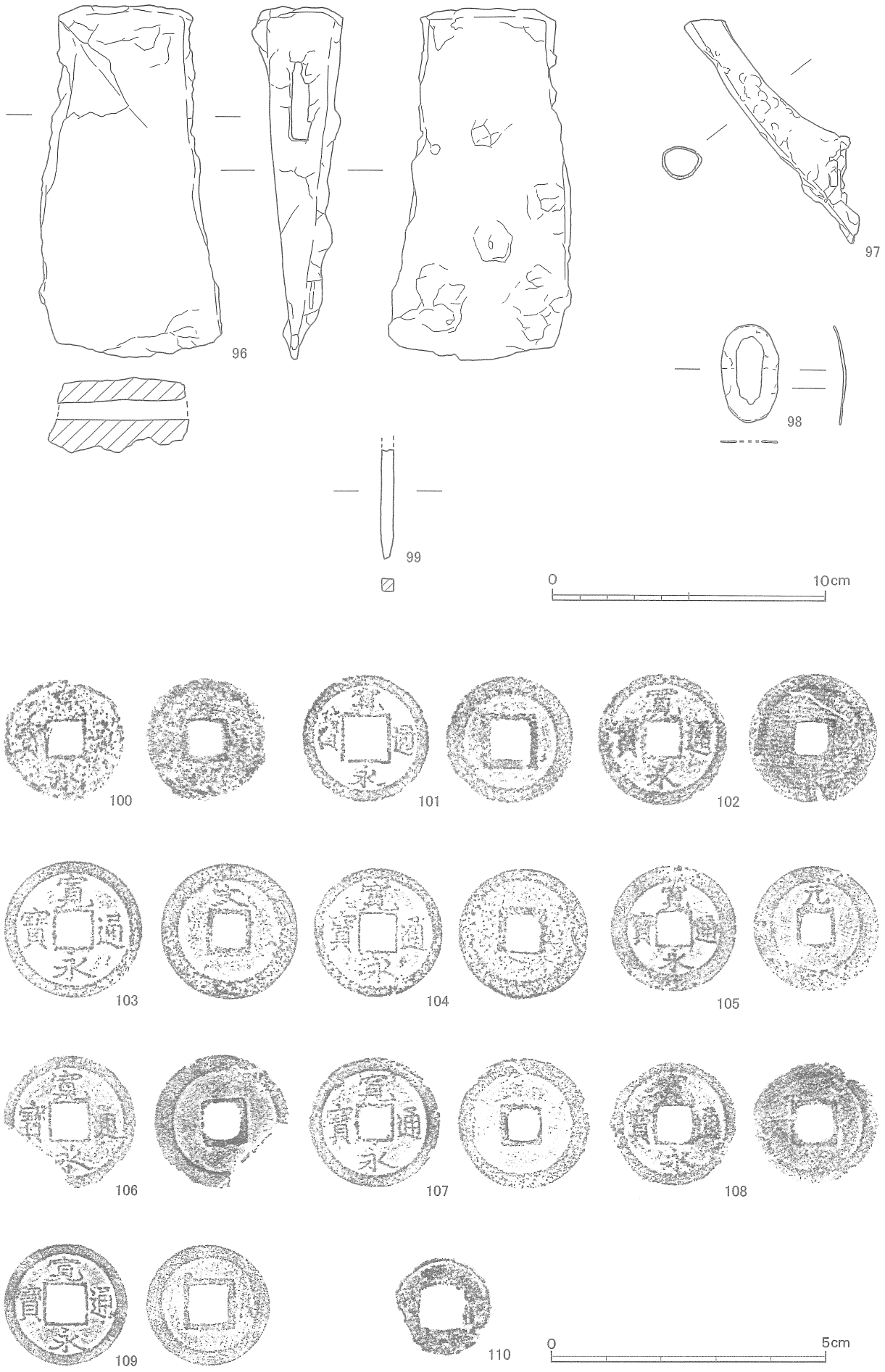


Fig.20　昆布山谷地区第５地点出土遺物実測図Ⅵ（Ｓ＝１／１、１／２）

Tab. 3　昆布山谷地区第５地点出土遺物観察表Ⅰ

挿図番号	出土地点	種　別	器　種	大きさ(㎝)			色　調	成形・調整・文様	備考
				口径	器高	底径			
1	Ⅰａ区　表土	土師質土器	皿		(1.1)	(5.6)	浅黄橙色		
2	Ⅱａ区　表土	瀬戸？	小坏	(6.2)	2.9	2.7	透明釉	上絵付	
3	Ⅰａ区　表採	肥前磁器	碗	(7.2)	(4.5)		透明釉		
4	Ⅰａ区　表土	肥前磁器	鉢	(11.8)	(5.8)		透明釉		
5	Ⅱａ区　表土	肥前磁器	蓋		(1.5)	つまみ径(5.0)	透明釉		
6	Ⅰｂ区　表土	瀬戸？	蓋	(9.5)	2.4	つまみ径(4.0)	透明釉		
7	Ⅰｃ区　ＳＢ０１	瀬戸・美濃	皿	(10.8)	2.1	(6.0)	灰釉	トチン	
8	Ⅰａ区　表採	肥前陶器	皿		(1.8)	3.7	長石釉	胎土目	
9	Ⅰａ区　表土	肥前陶器	碗	(13.0)	4.9	(4.3)	長石釉		
10	Ⅰｃ区　表土	肥前陶器	蓋		(6.0)		灰釉		
11	Ⅰｃ区　表土	肥前陶器	鉢		(6.2)		灰釉		
12	Ⅰｃ区　表土	信楽？	甕か壺		(10.3)		灰釉		
13	Ⅱａ区　３層	不明陶器	すり鉢		(10.0)		褐釉		
14	Ⅰｂ区　４層	肥前陶器	灯明皿	(9.2)	2.0	(5.0)	長石釉		
15	Ⅰｃ区　４層上面	在地系陶器	蓋	(14.8)	(2.3)		褐釉 サビ釉	飛鉋	
16	Ⅱａ区　７層	肥前磁器	碗	(10.2)	(5.7)		透明釉		
17	Ⅱａ区　７層	肥前磁器	碗	(9.2)	6.0	(4.2)	透明釉		
18	Ⅱａ区　７層	肥前磁器	紅皿	(4.8)	1.4	1.2	透明釉		
19	Ⅰｃ区　７層	青花	皿		(1.2)	(6.8)	透明釉		
20	Ⅱａ区　７層	不明陶器	皿	(9.0)	2.0	(4.3)	褐釉		
21	Ⅰｄ区　５層～８層	肥前磁器	碗	(11.5)	(3.9)		透明釉		
22	Ⅰｄ区　５層～８層	青花	皿		3.0		透明釉		
23	Ⅰｄ区　８層	肥前磁器	碗		(2.1)	(4.6)	透明釉		
24	Ⅰｃ区　９層	肥前磁器	碗	10.4	6.4	4.6	透明釉		
25	Ⅰｃ区　石垣内	土師質土器	焙烙		(4.5)		にぶい橙色		
26	Ⅰｃ区　５層～８層	肥前磁器	碗	(10.6)	6.3	4.3	(外)青磁釉 (内)透明釉	四方襷文	
27	Ⅰｃ区　30層・31層	肥前磁器	皿		(1.5)	(4.4)	透明釉		
28	Ⅱｃ区　ＳＢ０２上層	肥前磁器	皿	(6.7)	2.7	2.1	透明釉		
29	Ⅱｃ区　ＳＢ０２上層	瀬戸	碗	(10.8)	6.4	(4.1)	透明釉		
30	Ⅱｃ区　ＳＢ０２上層	肥前磁器	碗		(5.4)		透明釉		
31	Ⅱｃ区　ＳＢ０２上層	肥前磁器	鉢		(3.7)	(8.6)	透明釉	蛇の目凹形高台	
32	Ⅱｃ区　ＳＢ０２上層	瀬戸	蓋	(8.7)	2.9	つまみ径(3.3)	透明釉		
33	Ⅱｂ区　ＳＢ０２上層	石見系	鍋	(17.8)	8.0	7.0	来待釉		
34	Ⅱｃ区　ＳＢ０２上層	不明陶器	すり鉢	(33.4)	(9.1)		褐釉		
35	Ⅱｂ区　ＳＢ０２下層	肥前磁器	碗	(11.5)	(4.1)		(外)青磁釉 (内)透明釉	四方襷文	
36	Ⅱｂ区　ＳＢ０２下層	肥前磁器	碗	(11.0)	(3.9)		透明釉		
37	Ⅱｃ区　ＳＤ０３	肥前磁器	碗	(8.3)	5.1	3.4	透明釉		

Tab. 4　昆布山谷地区第５地点出土遺物観察表Ⅱ

38	Ⅱｂ区　ＳＤ０３	肥前磁器	碗		(4.7)		透明釉		
39	Ⅱｂ区　ＳＤ０３	石見系	灯明皿	(6.4)	1.3	(2.6)	長石釉		
40	Ⅱｂ区　ＳＤ０３	石見系	皿	(10.6)	2.3	(4.0)	長石釉		墨書
41	Ⅱｂ区　ＳＤ０３	石見系	鉢	(9.7)	(4.5)		長石釉		
42	Ⅱｂ区　第３層	布志名	湯呑？		(3.4)		銅緑釉		
43	Ⅱａ区　ＳＤ０３	不明陶器	蓋	(15.5)	(1.2)		サビ釉		
44	Ⅱｂ区　ＳＤ０３	石見系？	水注	(3.4)	4.0	4.2	白濁釉 透明釉	絵付	
45	Ⅱｂ区　ＳＤ０３	石見系	甕		(13.4)	(11.2)	来待釉		
46	Ⅱｂ区　ＳＤ０３	土製品	サナ	現存長 7.5	現存幅 5.0	現存厚 1.5	にぶい橙色		43.2 ｇ
47	Ⅱａ区　ＳＤ０４	肥前磁器	碗	(7.7)	(4.0)		透明釉		
48	Ⅱｃ区　ＳＸ０９	肥前陶器	皿		(1.9)	4.7	灰釉	胎土目	
49	Ⅱｂ区　第３層	肥前磁器	蓋	(10.0)	(1.9)		透明釉		
50	Ⅱｂ区　ＳＸ１０	肥前磁器	蓋	(8.2)	2.3		透明釉		
51	Ⅱａ区　第１面	肥前磁器	碗	(9.2)	4.5	(4.6)	透明釉		
52	Ⅱｃ区　第１面	肥前磁器	碗	10.5	5.8	3.9	透明釉		
53	Ⅱａ区　第１面	肥前磁器	碗	(9.9)	(4.7)		透明釉		
54	Ⅱｃ区　第１面	肥前磁器	碗	(10.6)	6.1	(4.3)	透明釉		
55	Ⅱａ区　第１面	肥前磁器	皿	7.6	2.3	4.0	透明釉		
56	Ⅱｃ区　第１面	不明陶器	蓋	7.8	1.0		サビ釉		
57	Ⅱｃ区　第１面	不明陶器	蓋		(1.4)	つまみ径 4.0	サビ釉	飛び鉋	
58	Ⅱｃ区　第１面	石見系	土鍋	(22.2)	8.8	9.0	来待釉		
59	Ⅲ区　表採	石見系	蓋		2.7	7.0	長石釉		
60	Ⅱｃ区　１層	肥前磁器	大皿	(30.1)	3.6	(17.4)	透明釉		
61	Ⅱｃ区　１層	石見系	鉢		(3.4)	(5.8)	長石釉		
62	Ⅱｃ区　１層	石見系	土瓶	7.0	(6.7)		長石釉		
63	Ⅱｂ区　３層	肥前磁器	碗	(9.2)	(3.7)		透明釉		
64	Ⅱｂ区　３層	肥前磁器	鉢		5.3		透明釉		
65	Ⅱｂ区　３層	肥前磁器	蓋	9.1	3.0	3.5	透明釉		
66	Ⅱｄ区　３層	在地系陶器	灯明皿	(7.0)	1.3	(3.2)	長石釉		
67	Ⅱｂ区　３層	石見系	灯明皿	8.0	2.2	3.3	長石釉	ﾏﾏ付着	
68	Ⅱｂ区　３層	石見系	鉢	(15.4)	(7.7)		長石釉		
69	Ⅱｃ区　７層	肥前磁器	碗	(11.8)	6.4	(5.9)	透明釉		広東碗
70	Ⅱｃ区　７層	肥前磁器	碗	10.5	5.9	4.1	透明釉		
71	Ⅱａ区　７層	肥前磁器	蓋	(9.1)	2.6	つまみ径 (5.5)	透明釉		
72	Ⅱｃ区　７層	萩	碗	(8.8)	5.0	(2.6)	長石釉		
73	Ⅱｃ区　７層	在地系陶器	皿	9.2	1.7	4.0	長石釉	胎土目 ﾏﾏ付着	
74	Ⅱｃ区　７層	石見系	皿	(9.8)	3.3.	4.0	長石釉	ﾏﾏ付着	
75	Ⅱｃ区　７層	石見系	小壺	(3.9)	(2.7)		長石釉		

Tab. 5　昆布山谷地区第５地点出土遺物観察表Ⅲ

76	Ⅱｃ区　７層	石見系	蓋	(11.0)	2.3		銅緑釉		
77	Ⅱｄ区　８層	肥前磁器	碗	(11.3)	6.1	(6.3)	透明釉		広東碗
78	Ⅱｄ区　８層	肥前磁器	碗	(7.4)	(4.2)		透明釉		
79	Ⅱｂ区　８層	肥前磁器	蓋	(9.6)	(1.9)		透明釉	四方襷文	
80	Ⅱｂ区　８層	布志名	碗	(9.2)	(5.6)		銅緑釉		
81	Ⅱａ区　８層	不明陶器	皿	(8.0)	1.3	3.0	サビ釉		
82	Ⅱａ区　８層	肥前陶器	鉢		(2.8)	(6.0)	長石釉		
83	Ⅱｂ区　８層	不明陶器	蓋	2.6	2.0		長石釉		墨書
84	Ⅱａ区　８層	不明陶器	すり鉢		(15.0)		鉄釉		
85	Ⅰ・Ⅱ区　ＳＷ０２	須佐	すり鉢		(3.6)		サビ釉		
86	Ⅰｄ区　17層	肥前磁器	すり鉢		(7.9)		鉄釉		
87	Ⅲｄ区　ＳＢ０４	石見系	甕	(44.0)	(23.4)		来待釉		
88	Ⅲ区　北拡張区 14 層	萩	碗	8.7	5.2	3.4	藁灰釉		
89	Ⅲ区　北拡張区 14 層	土師質土器	焜炉	(15.9)	18.0	16.0	褐灰色		
挿図番号	出土地点	種　別	器　種	大きさ (cm)			重量 (g)	色　調	備　考
				現存長	現存幅	現存厚			
90	Ⅲ区　北拡張区内	瓦	隅瓦	高さ 31.6	幅 43.4	奥行 38.1	6860	暗灰色	
91	Ⅰ区　表土	瓦	軒平瓦	10.5	13.5	4.4	360	暗灰色	
92	Ⅰ区　表土	瓦	軒桟瓦	13.5	24.2	3.9	760	暗灰色	
93	Ⅰ区　表土	瓦	軒桟瓦	18.0	24.0	4.4	990	来待釉	
94	Ⅰａ区　表土	石製品	石造物	11.6	11.5	9.7	2040		
95	Ⅰａ区　表土	石製品	かなめ石	45.3	32.9	11.7	25.6kg	灰色	
96	Ⅰｃ区　表土	鉄製品	鉄斧	12.8	6.2	3.3	560		
97	Ⅰｃ区　４層上面	銅製品	注口	10.0	2.6	0.1	22.2		
98	Ⅰｃ区　４層上面	銅製品	セッパ	3.6	2.1	0.1	1.8		
99	Ⅱｃ区　ＳＸ09	ｶﾞﾗｽ製品	簪？	4.0	0.5	0.5		青色	
100	Ⅰｃ区　表土	銭貨	寛永通寶	2.2	2.2		1.7		
101	Ⅱｃ区　ＳＤ０３	銭貨	寛永通寶	2.3	2.3		2.3		
102	Ⅱａ区　表土	銭貨	寛永通寶	2.4	2.4		2.8		
103	Ⅱｂ区　３層	銭貨	寛永通寶	2.5	2.5		2.8		
104	Ⅱｂ区　３層	銭貨	寛永通寶	2.3	2.3		2.3		
105	Ⅱｄ区　３層	銭貨	寛永通寶	2.3	2.3		2.2		
106	Ⅱｄ区　３層	銭貨	寛永通寶	2.4	2.4		1.5		
107	Ⅰｄ区　４層	銭貨	寛永通寶	2.4	2.4		2.3		
108	Ⅱｃ区　７層	銭貨	寛永通寶	2.3	2.3		1.6		
109	Ⅱａ区　８層	銭貨	寛永通寶	2.2	2.2		1.8		
110	Ⅱｃ区　７層	銭貨	無文銭	1.8	1.8		0.6		

第３章　宗岡家住宅の調査

第１節　調査の概要

第１項　調査地の周辺環境

宗岡家は大森の町並みでも南方に当たる駒の足地区にあって、大森市街線の東側に位置する。宗岡家は江戸初期の銀山役人を代表する一人である宗岡弥右衛門を初代として、代々組頭を務めた家系であるが、６代目の宗岡喜三兵衛が寛政２(1790) 年に銀山附役人を罷免されて大森を離れている。現在の宗岡家住宅は、宗岡家の８代目宗岡長蔵が文政６(1823) 年に同心として再雇用されて川本村 (現在の邑智郡川本町) から大森に戻ってきた際に求めた住居である。宗岡長蔵が屋敷地とする以前は福本家の屋敷地として使用されており、文政４(1821) 年に作成された屋敷図が残っている。宗岡家住宅には近年まで子孫の方が居住していたが、現在は大田市に寄贈されている。主屋が道路より控えた位置に建てられ、道路に面して庭があるという、大森の武家屋敷の典型的な構造をしており、建物自体も古相をよく残していることから、市の指定文化財に指定されている。平成 18(2006) 年に道路に面した庭の発掘調査を実施し、庭の施設とみられる遺構が検出されたほか、下層で 17 世紀初頭の遺物包含層及び遺構が確認された。

本年度の発掘調査は宗岡家住宅の活用を目的とした保存整備事業に先立ち、建物の修理や復原に必要な情報を得ることを目的として実施した。宗岡家住宅については幕末頃に作成された家相図が残っている。家相図には主屋と離れ、蔵のほかに現存していない建物や渡り廊下などが記載されており、それらの正確な位置と規模が問題となっていた。それらの課題を解決するために発掘調査を実施した。

第２項　平成 26(2014) 年度の発掘調査の概要 (Fig.22)

本年度は敷地の東半部分の約 195㎡を対象として発掘調査を実施した。発掘調査期間は平成 26(2014) 年５月７日から６月 30 日までである。

発掘調査に当たっては調査対象地を第Ⅰ～Ⅳ区の４区画に分けて出土遺物を取り上げた。発掘調査によって建物や渡り廊下跡などの宗岡家に関連する遺構の他、宗岡家が建つ以前の遺構も一部検出された。特に、第Ⅳ区では家相図に記載されていない施設の遺構が検出され、建築当初の姿を復元する上で重要な資料が得られた。

第２節　調査の成果

第１項　検出遺構 (Fig.23 ～ 27)

【ＳＢ 01】(Fig.23・24)

ＳＢ 01 は調査区北部で検出された建物跡である。家相図に記載のある部屋・湯殿・塩物部屋・薪納屋とみられる。規模は桁行約９ｍ×梁行約３ｍである。基礎は東西で構造が異なっており、建物部分は延石にほぞ穴を彫り込んで直接柱を立てる構造で、湯殿から東は割石を並べている。

建物の南側には犬走りと溝がある。犬走りは幅約 60㎝で、幅 20㎝程度の長方形の延石によって区画されているが、薪納屋の前から東側は割石を並べて区画している。犬走りを区画する延石には、ほぞ穴が開いており、柱が立っていた可能性もある。昭和 30 年頃に撮影された写真には、棟が東西方向で南北に平部を持つ切妻屋根の建物が写っており、発掘調査成果と矛盾しない。犬走りの南側には幅約 40㎝の溝がある。この溝は大きさ 30㎝程度の川原石で構築されており、屋敷東側の銀山川に降りる階段までつながっている。溝の機能としては生活排水のほか、建物の雨落ち溝が考えられる。溝は主屋から 4.5 ｍ程度東に離れたところから始まっており、始点からは南方向にもＳＢ 02 と接するまで石が延びている。これは、井戸から出した水が蔵の方へ流れないための措置などの可能性が考えられる。

昭和 30 年頃の写真が残っており、そのころまで建物自体は残っていたようである。しかし、建物の用途は使用人部屋や借家などにしていた時期もあり、建物内の設備も改装されていた可能性が高い。また、延石基礎部分と割石基礎部分では建物の軸が異なっており、東西で建てられた時期が異なる可能性がある。

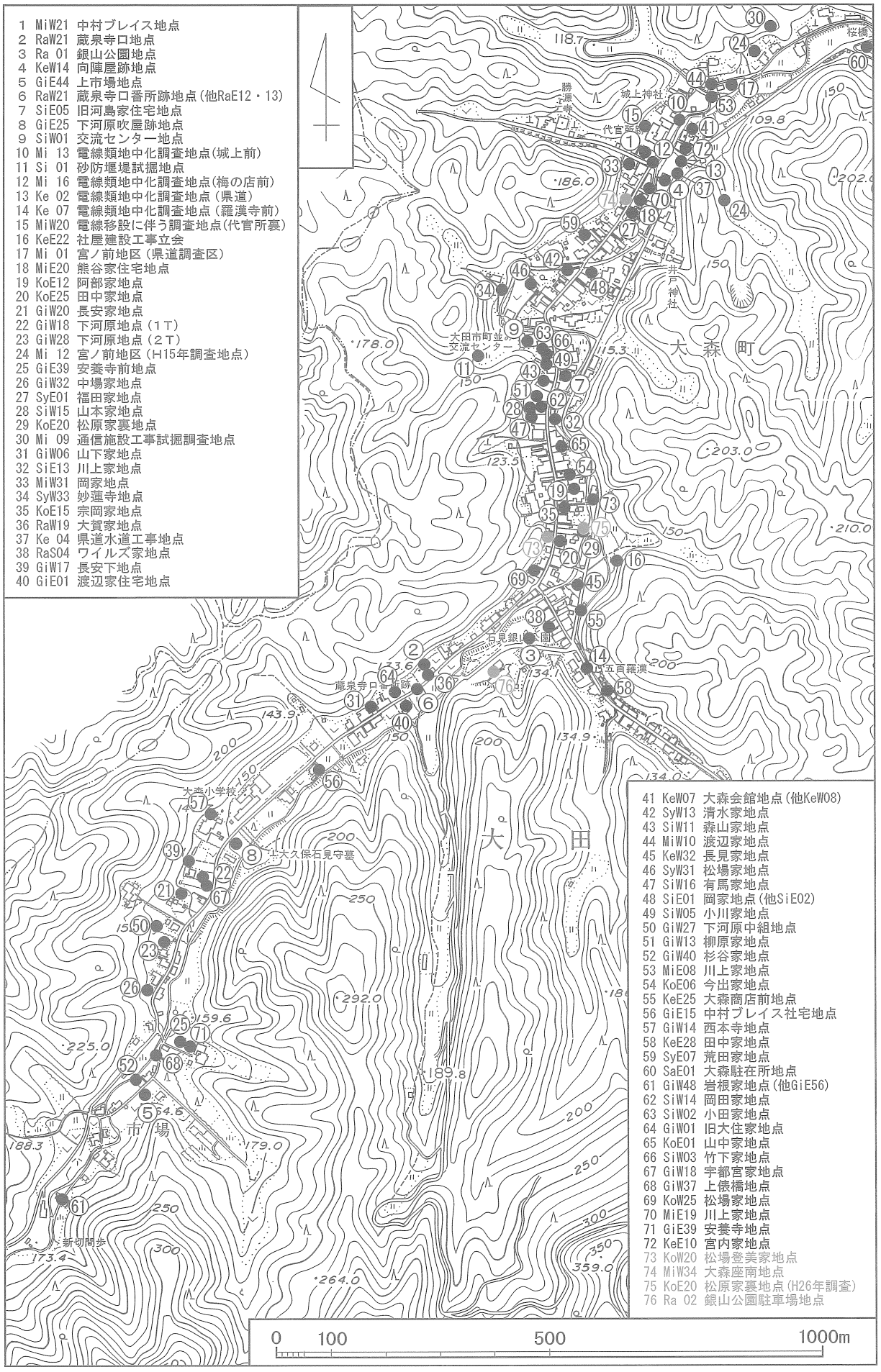


Fig.21　大森銀山伝建地区内調査・試掘・立会地点（S＝1／10,000）

Fig.22　宗岡家住宅調査区配置図（S＝1／1,000）

①ＳＢ01部屋跡

部屋跡はＳＢ01の西端に当たる。規模は桁行約４ｍ×梁行３ｍである。東西の基礎には10㎝×４㎝のほぞ穴が８カ所に開いており、そこに柱が立っていたものと想定される。ただし、南東部のみ基礎が２段になっており、ほぞ穴のある上段の南半部は壊されて主屋の沓脱ぎ石に転用されていたため、南東隅のほぞ穴は検出時には確認できなかった。柱間は約1.5ｍだが、南東部はやや狭くなっており、約１ｍである。南壁東端部のほぞ穴は他のものに比べて一つ分南へずれている。これは引き戸を設けるための措置とみられ、部屋の東側を入り口としていたことを示すと考えられる。

Fig.23　宗岡家住宅検出遺構配置図（Ｓ＝１／120）

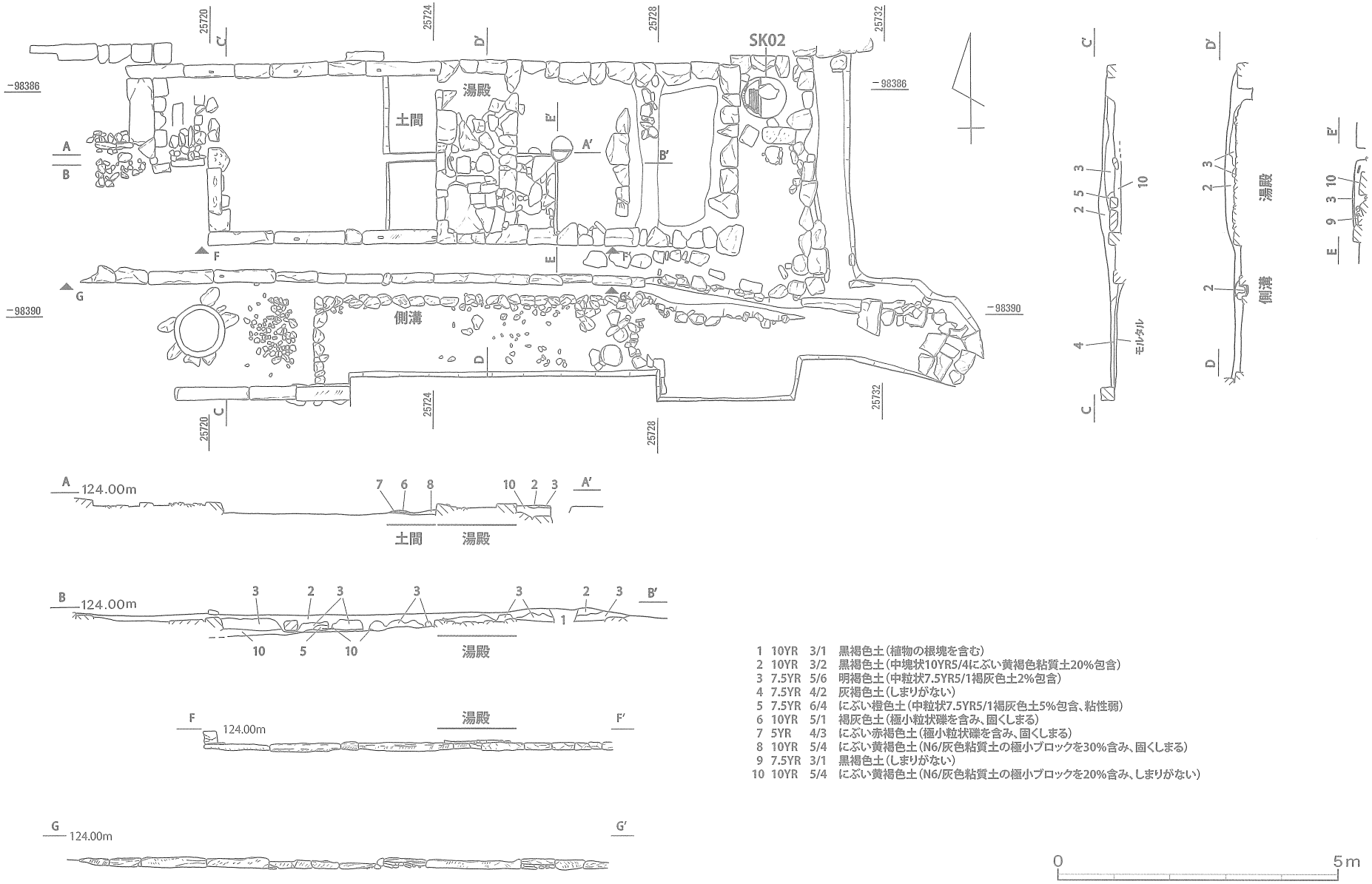


Fig.24　宗岡家住宅ＳＢ 01 平面図・断面図・立面図（Ｓ＝１／100）

構築面は褐色で固くしまった面だが、西側に向けてやや下がっているため、部屋の西部では一部に黒褐色の土を入れて床面としている。西側の基礎はこの黒色土の上に据えられており、建築前に造成が行われたことを示している。部屋では、東壁沿いの幅約 90㎝で土間面が検出された。土間は厚さ５～７㎝で、上面には炭が含まれており、灰褐色を呈している。土間は概ね三段階で作られており、黄褐色土、赤褐色土、褐灰色土の順番に重ねられ、叩き締められている。

部屋の西側には東西約１m、南北約 1.7 mの施設が付設してある。範囲内は被熱しているが、後世の利用によるものであり、元々は部屋の押入として利用されていたとみられる。

②ＳＢ 01 湯殿跡

ＳＢ 01 のほぼ中央部、建物の西側に位置し、家相図の「湯殿」に該当する部分である。コンクリート壁を建築する際に北側の一部が壊されている。規模は桁行約 1.2 m×梁行約３mである。基礎は割石を並べて構築している。床面には石敷きをしており、南半の敷石が密な部分が洗い場で、北半のやや疎な部分に湯船をおいていたとみられる。湯船部分には排水設備や被熱痕がないことから、桶を置いてお湯を別の場所から持ってきて溜めるタイプの風呂であったとみられる。石敷きの間には漆喰で目詰めしており、水が漏れないための措置とみられる。

③ＳＢ 01 塩物部屋跡

湯殿跡の東側に位置し、家相図の「塩物部屋」に該当する部分である。規模は桁行約 2.3 m×梁行約３m である。西側に被熱痕（ＳＬ 01）があるが、後世のものとみられる。南西の一部を掘り下げたところ、角礫の上に床面を貼っている構造が明らかとなった。東側の犬走り部分には塩物部屋の前から薪納屋の前まで割石を据えている。

④ＳＢ 01 薪納屋跡

塩物部屋跡の東側に位置し、家相図の「薪納屋」に該当する部分である。規模は桁行約 1.9 m×梁行約３mである。基礎の部分はよく残っていたが、戦後にブロック塀が建築された際に大きく破壊されており、床面はほとんどが掘り返されていたほか、ブロック塀設置部分には基礎を入れるための溝が掘られていた。

⑤便所跡

ＳＢ 01 の東側に位置する。検出された位置より、家相図に記載された「便所」に該当する遺構とみられる。規模は東西約 1.2 m×南北約 1.3 mで、中央部に

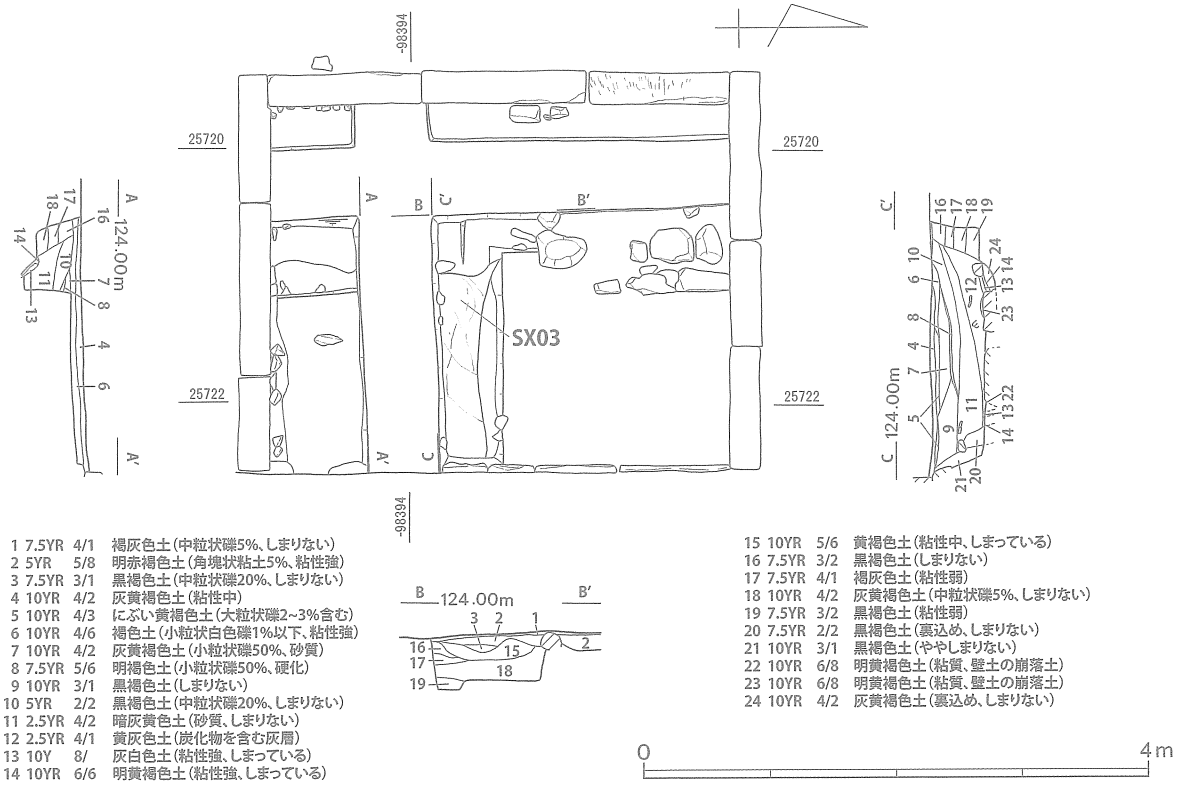


Fig.25　宗岡家住宅ＳＢ 02・ＳＸ 03 平面図・断面図（Ｓ＝１／60）

便槽と見られる直径約 80㎝の土坑（ＳＫ 02）がある。土坑の深さは約 60㎝で、中からは木製の桶が出土した。桶の中には糞便が堆積していなかったため、廃棄する際に汲み取られたものとみられる。家相図には大便器と小便器が記載されているが、発掘調査で検出された土坑はこの１つのみである。

【ＳＢ 02】(Fig.23・25)

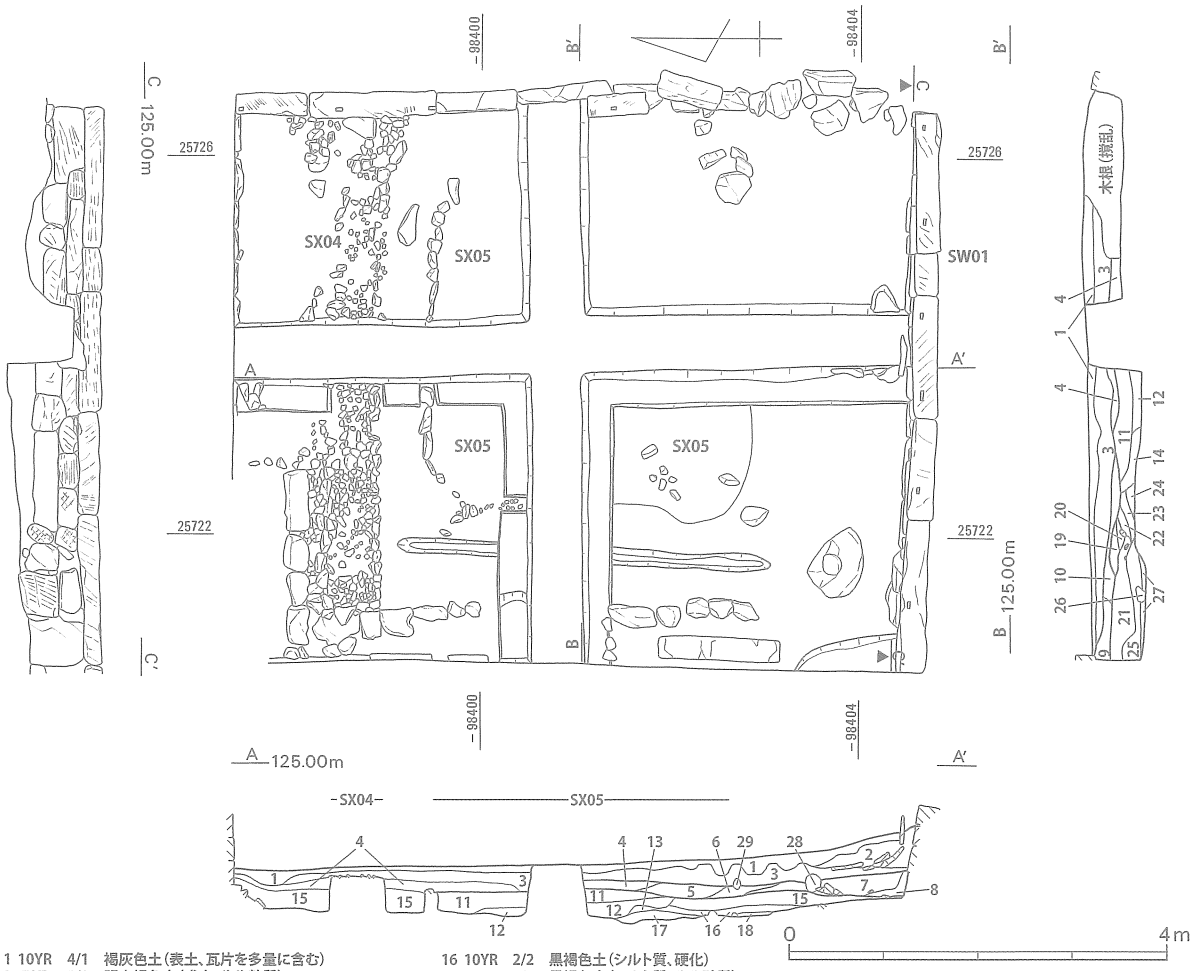
ＳＢ 02 は敷地内東部にある蔵の西側に建っていた蔵前建物の基礎部分である。平成 10 年までは建物が残っていた。規模は桁行約３ｍ×梁行約４ｍで、四角く切った延石を土台としている。ＳＢ 01 とは違ってほぞ穴がないため、ほぞ穴から柱の位置を復元することはできない。ＳＢ 02 の南側には礎石が蔵に沿って南北に二個あり、北側の礎石は家相図に記載された蔵前建物の「コミ」に相当する部分で、南側の礎石は蔵前の南側に設けられた「待合」に関連するものとみられる。

【ＳＫ 01】(Fig.23)

第Ⅲ区の東壁沿いで検出された。平面形は直径 50㎝～ 60㎝の楕円形で、断面形は碗型である。埋土内に出土遺物はなく、遺構の性格も不明である。

【ＳＬ 01】(Fig.23・24)

ＳＢ 01 の塩物部屋内東部の床面で検出された被熱痕である。直径 24㎝の円形で、被熱深度は約２㎝である。中央部がやや黒くなってはいるが、周囲に炭や煤の散布はないため、移動式のかまどを使用した跡の



1 10YR 4/1 褐灰色土（表土、瓦片を多量に含む）
2 5YR 5/8 明赤褐色土（盛土、やや粘質）
3 10YR 4/2 灰黄褐色土（2ミリ大の白色砂粒、粘質土含む）
4 2.5Y 4/3 オリーブ褐色土（2ミリ大の白色砂粒、粘質土含む）
5 10YR 3/2 黒褐色土（やや砂質、SX05埋土）
6 10YR 5/3 にぶい黄褐色土（やや砂質）
7 10YR 5/4 にぶい黄褐色土（3ミリ大の白色砂粒含む）
8 2.5Y 3/2 黒褐色土（砂質、緻密）
9 2.5YR 4/2 オリーブ褐色土（固くしまる）
10 2.5Y 4/1 黄灰色土（やや砂質）
11 10YR 3/2 黒褐色土（2ミリ大の白色砂粒、やや砂質、SX05埋土）
12 10YR 4/2 灰黄褐色土（シルト質、しまりない、SX05埋土）
13 10YR 2/3 黒褐色土（シルト質、砂質土と互層状に堆積）
14 10YR 2/3 黒褐色土（シルト質、砂質土と互層状に堆積）
15 10YR 3/2 黒褐色土（シルト質、砂質土と互層状に堆積）
16 10YR 2/2 黒褐色土（シルト質、硬化）
17 10YR 3/2 黒褐色土（シルト質、やや砂質）
18 10YR 5/1 褐灰色土（砂質、しまりない）
19 2.5Y 6/3 にぶい黄色土（砂質、上面は硬化）
20 10YR 3/1 黒褐色土（砂質、1センチ大の礫含む）
21 10YR 3/3 暗褐色土（やや砂質、1~2センチの礫含む）
22 10YR 4/1 褐灰色土（砂質、緻密）
23 10YR 4/2 灰黄褐色土（シルト質、砂質土と互層状に堆積）
24 10YR 4/1 褐灰色土（砂質、緻密）
25 10YR 3/1 黒褐色土（シルト質、灰黄褐色砂質土が50%含む）
26 10YR 3/2 黒褐色土（シルト質、ブロック状に混じる）
27 10YR 6/2 灰黄褐色土（砂質）
28 10YR 6/3 にぶい黄橙色土（ブロック状に入る）
29 10YR 6/4 にぶい黄橙色土（ブロック状に入る）

Fig.26　宗岡家住宅ＳＷ 01・ＳＸ 04・05 平面図・断面図（Ｓ＝１／80）

可能性が考えられる。塩物部屋が保存用の部屋ならば、部屋の機能にそぐわない遺構であるため、改装されて部屋の利用方法が変わってからできた比較的新しい遺構とみられる。

【ＳＸ01】(Fig.23・25)

Ⅱｃ区のＳＢ02北部で検出された遺構である。長さ約40㎝、幅約20㎝の川原石を南北に並べ、西側に面を持つ。検出範囲が限られており、周辺に関連遺構や遺物を伴っていないため、機能を明らかとすることはできなかった。ＳＢ02の構築面よりも下位で検出されたため、ＳＢ02以前の遺構である。

【ＳＸ02】(Fig.23)

ＳＢ02の西側で検出された遺構で、家相図に記載された渡り廊下の跡とみられる。ＳＢ02の西側で幅30㎝×長さ約160㎝の延石と幅25㎝×長さ115㎝の延石が南北に並んだ状態で検出された。渡り廊下としては大きな延石を使用している。主屋の南東側でも延石がいくつか検出されたが、主屋に彫り込まれた渡り廊下を取り付けるためのほぞ穴と場所が合わない。主屋の南東部分には延石を組み合わせて火処として利用していた形跡が残っており、それを構築する際にＳＸ02は解体されたものとみられる。

【ＳＸ03】(Fig.23・25)

Ⅱｃ区及びⅣａ区で検出された遺構である。構築面が現在の宗岡家の整地面よりも下であるため、宗岡家より古い遺構と判断できる。宗岡家が建つ前は福本家の屋敷として利用されていたため、福本家に関連する遺構と考えられる。一部が蔵またはＳＢ02の下にあるため、全体を検出することはできなかったが、平面形は一辺が約1.8ｍの隅丸方形と考えられる。断面形は深さ約70㎝の深皿状である。床面は石を配した後に隙間を黄褐色の粘土と漆喰混じりの白色の粘土で埋

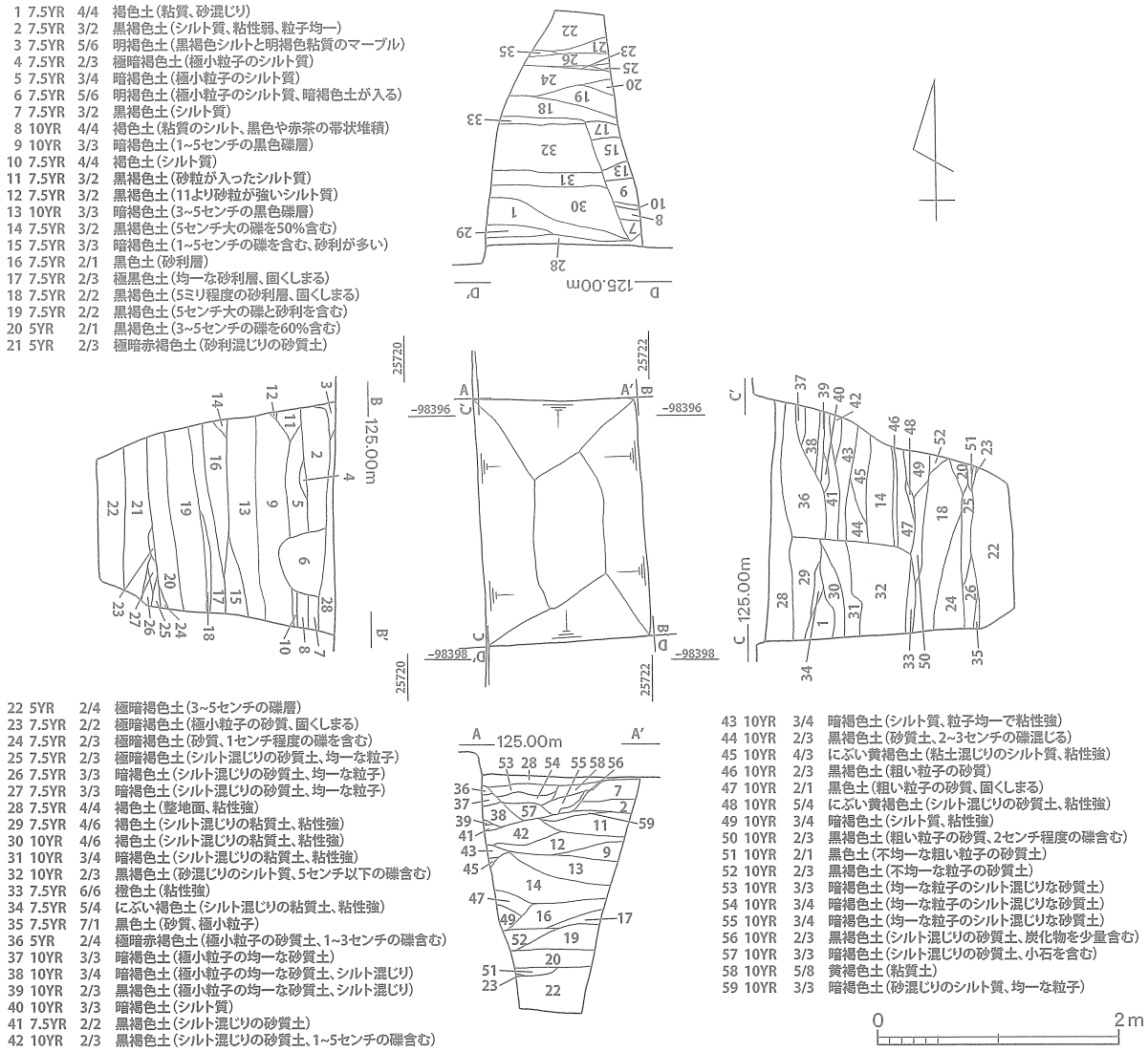


Fig.27　宗岡家住宅下層確認トレンチ平面図・断面図（Ｓ＝１／60）

めている。また、側面も黄褐色と白色の２種の粘土で固めている。水を漏らさないための工夫が看取できるため、水を溜めるための施設と判断し、水溜めか便槽として利用されていた遺構と考えたが、検出状況のみでは用途を判断できなかったため、遺構埋土の一部を科学分析した。その結果、元々便槽として使用していた可能性のある施設に野菜などを捨てた跡であるとの分析結果が提示された。詳細は第５章を参照されたい。

埋土内から出土した遺物には 18 世紀末～ 19 世紀初頭の広東碗 (172・173) が含まれており、遺構の廃棄年代を示すものとみられる。

【ＳＸ 04】(Fig.23・26)

Ⅳａ・ｂ区で検出された遺構で、幅 15 ～ 20㎝の川原石を長さ約 5.5 ｍ、幅 50 ～ 60㎝で二列に並べ、間に 10㎝弱の川原石を敷き詰めた通路状の遺構である。家相図には記載されていない施設であり、裏門から屋敷地内に入るための通路の跡で、内露地の一部と考えられる。東端部には約 35㎝× 20㎝の平らな踏石があり、入口を示すものとみられる。敷き詰められた小礫に交じって燻瓦が出土した。ＳＸ 04 の北側は離れ東側の縁側を区画する石列に接している。ＳＸ 04 の北側には切石と川原石を東西方向に並べて 15㎝程度の隙間に小礫を詰めている。東半が崩れていたことから、修理の跡を示すものとみられる。

【ＳＸ 05】(Fig.23・26)

Ⅳａ～ｃ区で検出された遺構で、大きいもので幅 30㎝× 10㎝程度の川原石を並べた遺構である。大部分が壊れているが、残存部分から復元すると東西約 3.3 ｍ×南北約 3.4 ｍの隅丸方形に並べていたものとみられる。縁石の内側はため池状に 20㎝程度掘りくぼめており、遺構埋土は堆積物・堆積状況共に水成堆積の様相を呈していることから、水に関連する遺構で、離れやＳＢ 02 南側の待合から眺めるための施設の跡とみられる。可能性としてまず池が挙げられるが、ＳＸ 05 の床面は礫や粘土で固めるなどの水が抜けないような措置が講じられていないため、池とは考えにくい。ほかの候補として花壇が挙げられるが、普通の花壇であれば縁石を置くだけでなく、中を掘り凹めている理由が説明しにくい。大森町内では熊谷家の裏庭に、この遺構と同様に縁石で区画した範囲を掘り窪めた庭施設がある。熊谷家ではそれを湿地状にして花壇として利用しているが、ＳＸ 05 もそれに似たような施設の可能性がある。

【ＳＷ 01】(Fig.23・26)

Ⅳｂ～ｄ区で検出された遺構で、家相図に記載された屋敷地を区画するための塀の基礎部分とみられる遺構である。東側は延石のみで区画しているが、南半が後世に生えた樹木の影響で崩れている。南側は石積みの上に延石を乗せている。石垣は布積み風で、四角く切った石を２段積み上げて構築している。１段目の石は幅 40 ～ 100㎝、高さ約 25㎝で、２段目には幅約 40㎝、高さ約 20㎝の石を使用している。延石は幅 25㎝、長さ 80 ～ 130㎝、厚さ約 20㎝程度で、上面には約１ｍ間隔で７㎝× ４㎝のほぞ穴がある。上面と遺構面の比高差は１ｍ程度である。石垣及び延べ石の表面には鑿による加工痕が残っている。構築面が遺構面から 30㎝程度離れており、ＳＷ 01 南側はⅣ区の他の遺構群とは時期が異なる可能性がある。

【Ⅳａ区下層確認トレンチ】(Fig.23・27)

2006 年の調査で屋敷地の西部の下層から江戸初期の遺物包含層が検出されていたことを受け、東部での様相を明らかとすることを目的としてⅣａ区北部の遺構が検出されなかった部分を対象に断ち割りを行なった。トレンチの大きさは東西 1.3 ｍ、南北２ｍとした。

トレンチ内では宗岡家建築時の遺構面 (Fig.27、第 28 層) の下面でＳＫ 02 ～ 04 が検出された。これらはトレンチの断面で検出されたため、それぞれの平面形は不明である。ＳＫ 02 は南壁と西壁で確認した遺構で、直径２ｍ程度と推定され、深さが約１ｍの大きな土坑である。土坑の下半分は黒色土で、上半分は黄色の粘質土で埋められている。底部に橙色の粘土を５㎝程度敷いている。粘土は底部のみで側面に敷いていないため、水漏れ対策としては不十分であり、目的は不明である。ＳＫ 03 は東壁で確認された遺構である。規模は断面では幅 55㎝、深さ 40㎝で、断面形はボウル形である。ＳＫ 05 は北壁で検出された遺構である。断面形は深皿形で、規模は断面で幅 95㎝、深さ 30㎝である。北側の側面の一部にＳＸ 03 と同様の黄褐色と白色の２層の粘土があり、ＳＸ 03 の破片とみられる。検出面より、いずれの遺構も宗岡家が建つ前の遺

構と判断できる。検出面は締まりの弱い砂質～シルト質の土層で遺構構築面としては軟らかい土質だが、ＳＫ02～04やＳＸ03など多くの遺構があることから、人為的に造成された土層である可能性が高い。地表面から40㎝以下は10㎝程度の円礫やシルト質土が互い違いに堆積している。この堆積要因については、三瓶自然館の中村唯史氏から「河川による自然堆積によるもの」と指摘された。遺物としては第21層（Fig.27）から、備前焼の壺(201)が出土したが、当初の目的である江戸時代初期の遺構は検出されなかった。

第２項　出土遺物(Fig.28～32、Tab. 6～8)

発掘調査を実施した宗岡家住宅東半からは陶磁器類や石製品・金属製品など多くの遺物が出土した。出土した陶磁器類の生産地は、肥前及び瀬戸を中心としているが、石見系陶器などの在地のものもみられる。以下、出土遺物について種類別に記載する。

【陶磁器類】

調査地点から出土した陶磁器類には肥前陶磁器と瀬戸、石見系陶器などの在地系陶器に大別できる。出土量では肥前磁器が圧倒的に多く、それ以外は点数としては少ないが、器種はいずれも多くの種類の資料が出土している。肥前陶器は他の出土遺物とは異なり、17世紀代の遺物が含まれているが、出土数が少ないことや特定の地点や遺構からまとまって出土するような状態は確認できなかったことから、宗岡家住宅自体や敷地内で検出された遺構の年代を反映するものではないと判断できる。

① 肥前磁器

121・163・170・171・172・173・174・186・189・190は碗・小碗である。163は見込み部を蛇の目釉剥ぎした資料で、122には体部外面に蕪の絵と見込み部に昆虫の文様が、163には体部外面に折枝梅がある。121は高台の外面に二重の圏線と縦方向に連続する櫛状の文様がある。170は体部外面に菊花散らし文をもつ小碗で、外面に二次被熱の痕跡が認められる。172と173は広東碗の破片で、172には体部外面と見込み部に文様が、173には体部外面に朝顔がある。174は見込み部に崩れた五弁花文のような文様がある。186は体部外面に丸文が、底部に文字がある。189は口縁部外面を若干へこませて横に線を引いているほか、体部外面には七条一組の鎬とその間に「福福」の文字がある。190は外面体部に植物の文様が、内面口縁部に四方襷文がある。

128・129・176・177・195は碗の蓋である。128は表面に太陽のような文様と、口縁部内面に四方襷文、見込み部に源氏香文がある。129は表面に牡丹と動物の絵柄と、口縁内側に雷文、見込み部に草の文様がある。また、つまみ部に文字が記載されている。176は表面に５羽の鶴と、見込み部に亀の文様がある。177には内外に崩れた梵字文と見込み部に「壽」の文字がある。つまみ部にも二重四角の中に文字があるが、字体が崩れている。195は体部外面に植物と六角形の文様が、口縁部内面に渦の文様がある。また、見込み部にも文様がある。129・176・195は端反碗の蓋である。

111・113・114・159・175・185は皿である。111は見込み部に砂目がついており、17世紀前半の資料である。114は蛇の目凹形高台を持つ資料で、内面体部に唐草文様と、見込み部に文様がある。159は外面体部に梵字文と見込み部に文様がある。175は高台が小さく、見込み部に草花の文様がある資料で、器形の特徴から17世紀中頃のものとみられる。

123は蛇の目凹形高台を持つ蕎麦猪口である。体部外面に「壽」の丸文と、見込み部にコンニャク印判の五弁花文があり、底部には２重の方形区画の中に文字がある。

126・198は段重で、126は外面体部に型紙摺りによる鹿子文が施されている。198は体部外面に文様があり、口唇部が釉剥ぎされている。

これら以外に瓶(120・178)、徳利(167・179)、戸車(130)、香炉(192)、灯火具(194)が出土した。

時期は111・175・189など17世紀前半の資料も含まれているが、ほとんどは19世紀前半の資料である。また126など、明治時代の資料も含まれている。

② 肥前陶器

165は藁灰釉のかかった碗で、他の碗に比べて一回り程度大きい。体部が丸くやや膨らんでおり、器形も特徴的である。138は鉢で、見込み部が蛇の目釉剥ぎされている。166は青磁釉のかかった蓋である。199・137は皿である。137には砂目が、199には

胎土目がそれぞれ付着しており、17 世紀前半の遺物である。

③ 瀬戸、不明磁器

器種としては碗 (116・117・157・158・187)、小碗 (119)、蓋 (127・160)、皿 (112・115)、徳利 (179)、灯火具 (124・125)、仏飯器 (197)、坏 (119)、小坏 (188)、人形 (162) が出土した。115・116・117・118・119・124・125・157・158・160・162 が瀬戸で、112・127・187・188 は産地不明の磁器である。

115 は見込み部に松と家・山水があり、「別天地」などの文字が記載されている。127 はうにを入れていた容器の蓋で、上面に「山陽百貨店」などの文字がある。157 は、体部外面に「山所」、底部に「組」、体部内面に「□功」の文字がそれぞれ記載されている。体部外面は「大森鑛山所」、底部は「藤田組」にそれぞれ復元できるものと考えられる。体部内面の文字は、現状での配置から本来は 5 文字であったものとみられる。187 は畳付けが露胎した碗で、見込み部に五方花弁がみられる。

197 は表面に体部外面に文様が、表面には焼継による補修痕がある。器壁が底部に向かって厚くなっていることから仏飯器とみられる。

119 には底部外面に圏線と、外面体部に金で描かれた鼓があり、消えているが紐と房の痕跡も認められる。188 は小杯で、底面に陽刻がある。

④ 在地系陶器

139 は小碗で、底部を露胎としている。150 は甕で、体部外面に黒釉の釉垂れが見られる。148・149 は壺で、口唇部を釉剥ぎしている。144・145 は蓋で、体部外面にコバルトを流しがけした模様がある。161・181 は鉢である。161 は折り返し成形の玉縁口縁を、181 は玉縁口縁をもつ。181 には見込み部に胎土目の痕跡がある。また、体部がやや膨らんでおり、器形の特徴から片口がつく可能性がある。191 は徳利で、底部は外面を露胎しており、縁辺部をへらで面取りしている。

⑤ その他の土器、陶器、土製品

肥前や在地系陶器以外で特徴的なものとしてはすり鉢 (151・200)、壺 (201) がある。151 は堺、200 は須佐である。201 は備前で、小片のため時期等の判断が難しいが、下層確認トレンチから出土した資料であるため、少なくとも宗岡家が建つ以前のものである。これら以外には瓦質・土師質の焜炉 (133・134・135・202)、外面に鉄絵の文様を持つ蓋 (196) などがある。土製品としては窯道具のハセ (183)、焜炉の底に敷くサナ (182) が出土した。

【石製品】

154・208 は硯である。154 は山口県の赤間石とみられる暗赤褐色の赤色頁岩製で、残存部長軸方向に使用痕が確認できる。208 は灰オリーブ色の粘板岩製で、裏面に刻書がある。

153・206・207 は厚さ 1.6 ～ 4 ㎝で、片面に切り込みのある石版状の資料である。色調は 153 と 207 が白色、206 が淡赤橙色である。材質はモルタル質で表面には 1 ㎜程度の砂が含まれている。用途は不明だが、タイルなどの可能性がある。

【金属製品】

鉄釘 (203)、銅錘 (204)、銭貨 (155・156・205) がある。203 は長さ 11.7㎝の角釘で、鍛造による製品である。204 は断面八角形の銅製の錘で、裏面に「川几」の文字が刻まれている。155・156・205 は銅製の寛永通寶で、いずれも新寛永である。

第 3 節　小結

本年度は屋敷地の東半部分の調査を行なった。調査の成果としては、①家相図に記載されているが現状ではなくなっていた建物の基礎部分 (ＳＢ 01、ＳＸ 02) が検出され、正確な位置や規模が明らかとなったこと、②第Ⅳ区において家相図に記載のない庭の施設跡 (ＳＸ 04・05) が検出され、当時の地役人の生活や文化を明らかとする上で重要な資料が得られたこと、③一部ではあるがトレンチ調査によって宗岡家が建つ以前の遺構 (ＳＸ 01・03) が検出されたこと、④下層確認によって土地の成因が明らかとなったことなどが挙げられる。

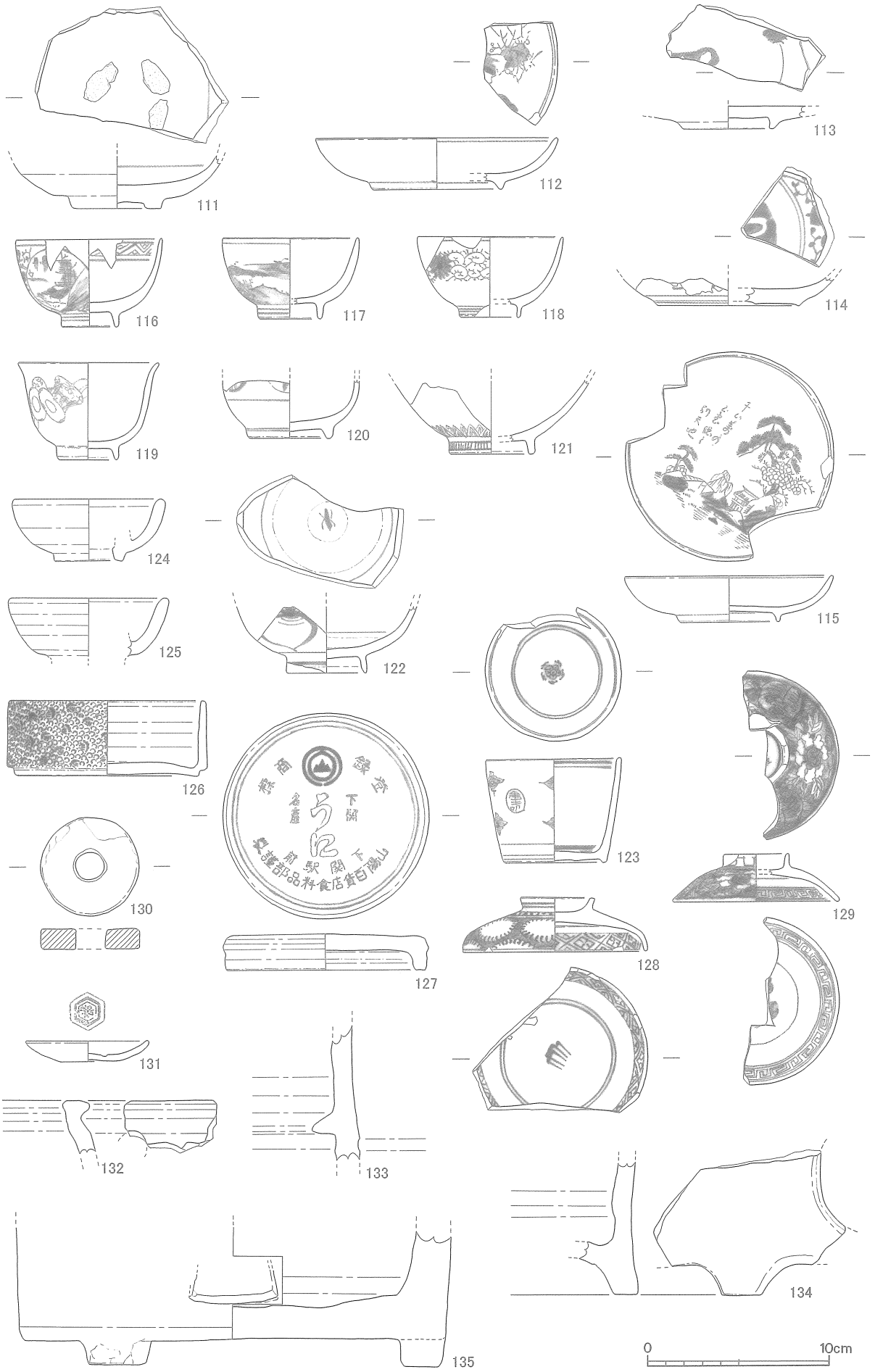


Fig.28　宗岡家住宅出土遺物実測図Ⅰ（S＝1／3）

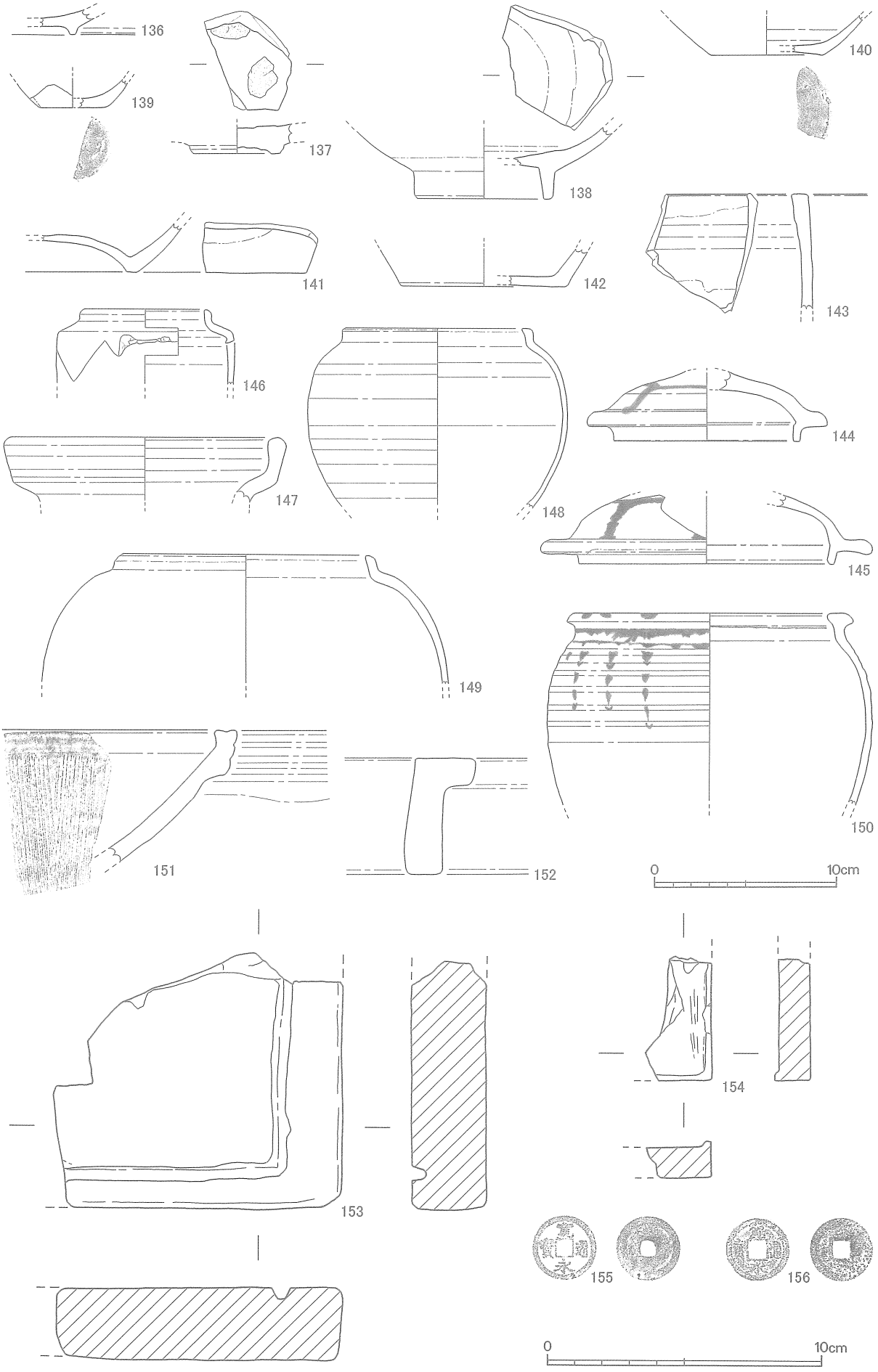


Fig.29　宗岡家住宅出土遺物実測図Ⅱ（S＝1／2、1／3）

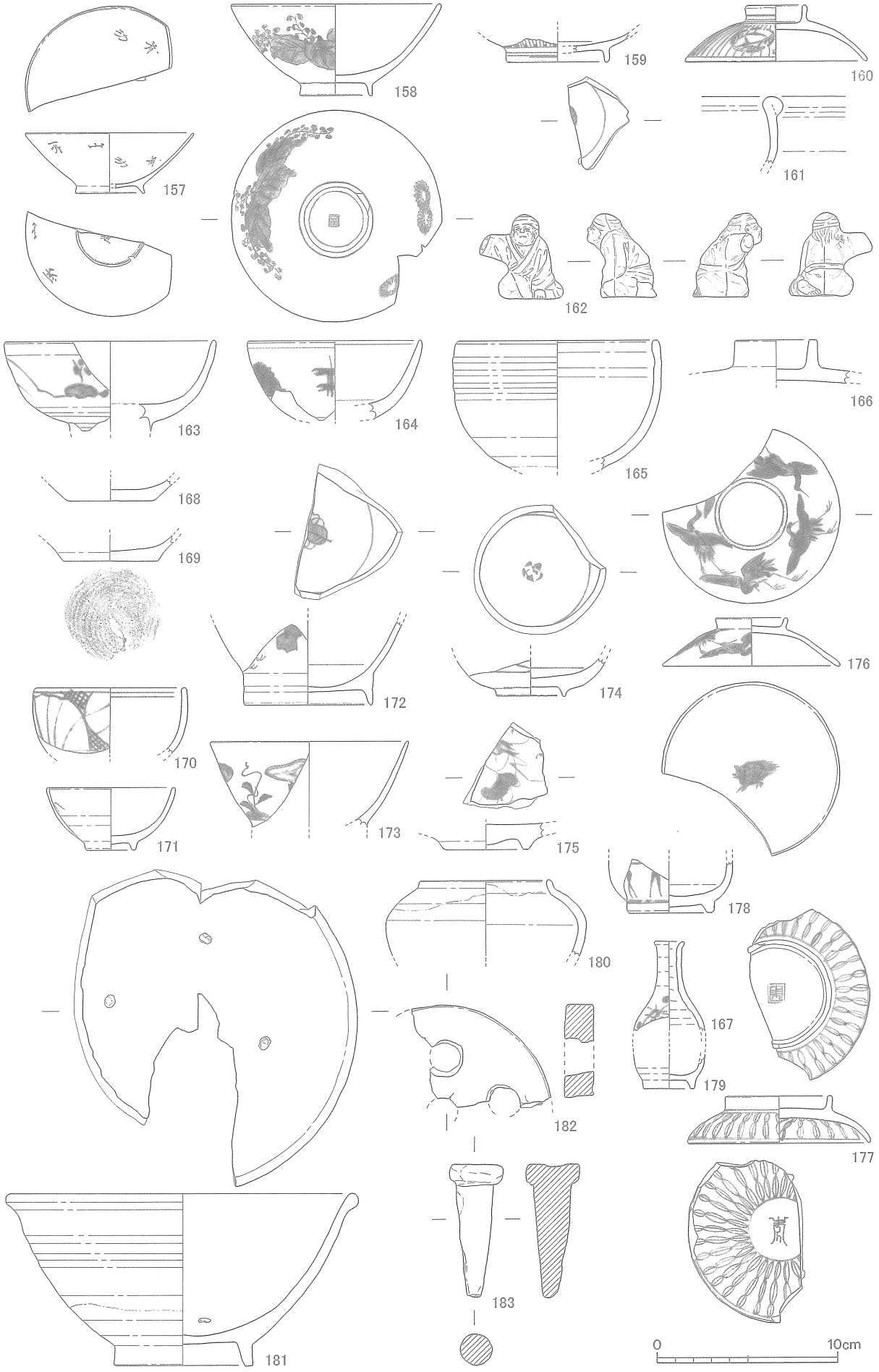


Fig.30　宗岡住宅点出土遺物実測図Ⅲ（S＝1／3）

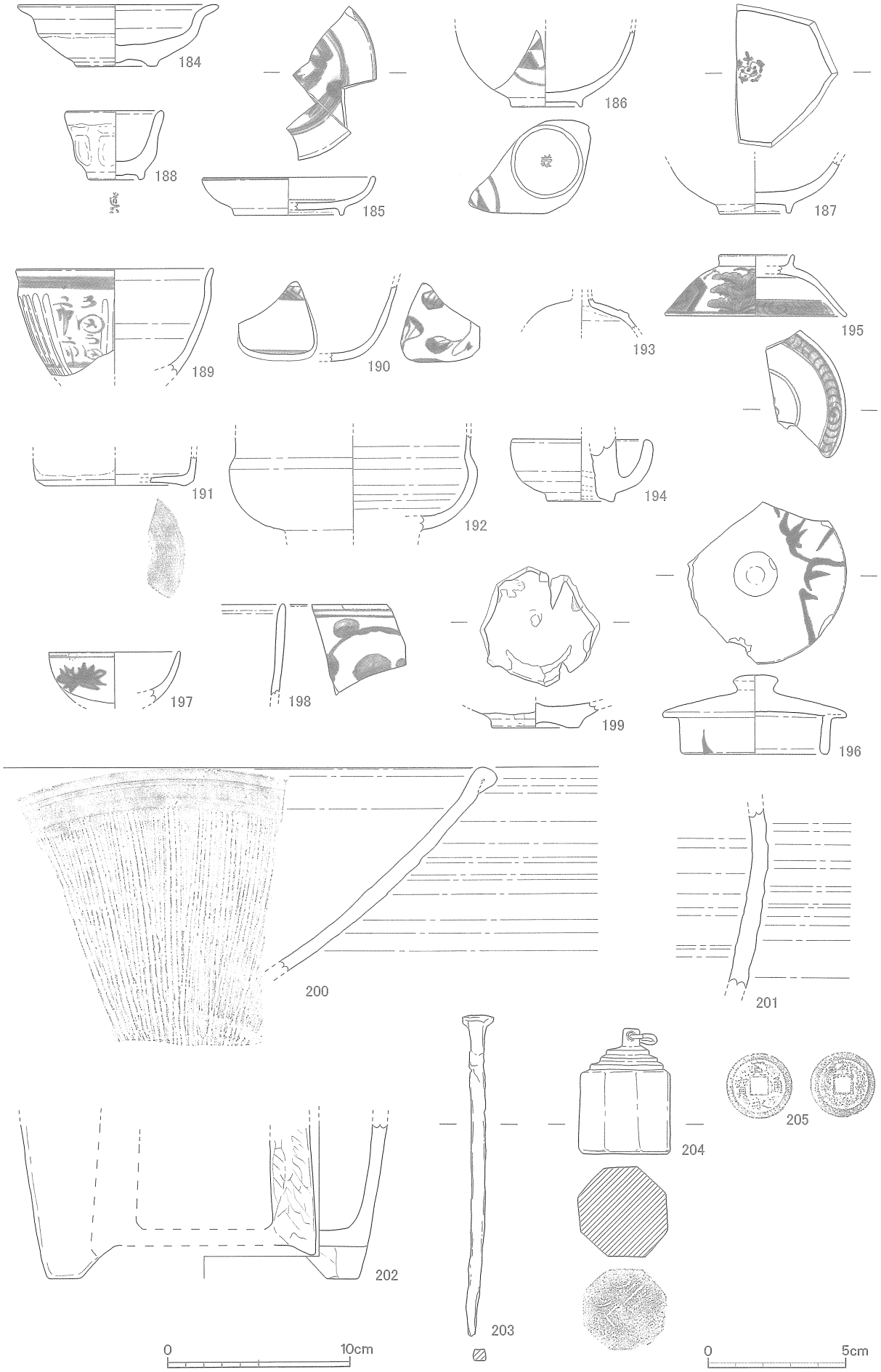


Fig.31　宗岡家住宅出土遺物実測図Ⅳ（S＝1／2、1／3）

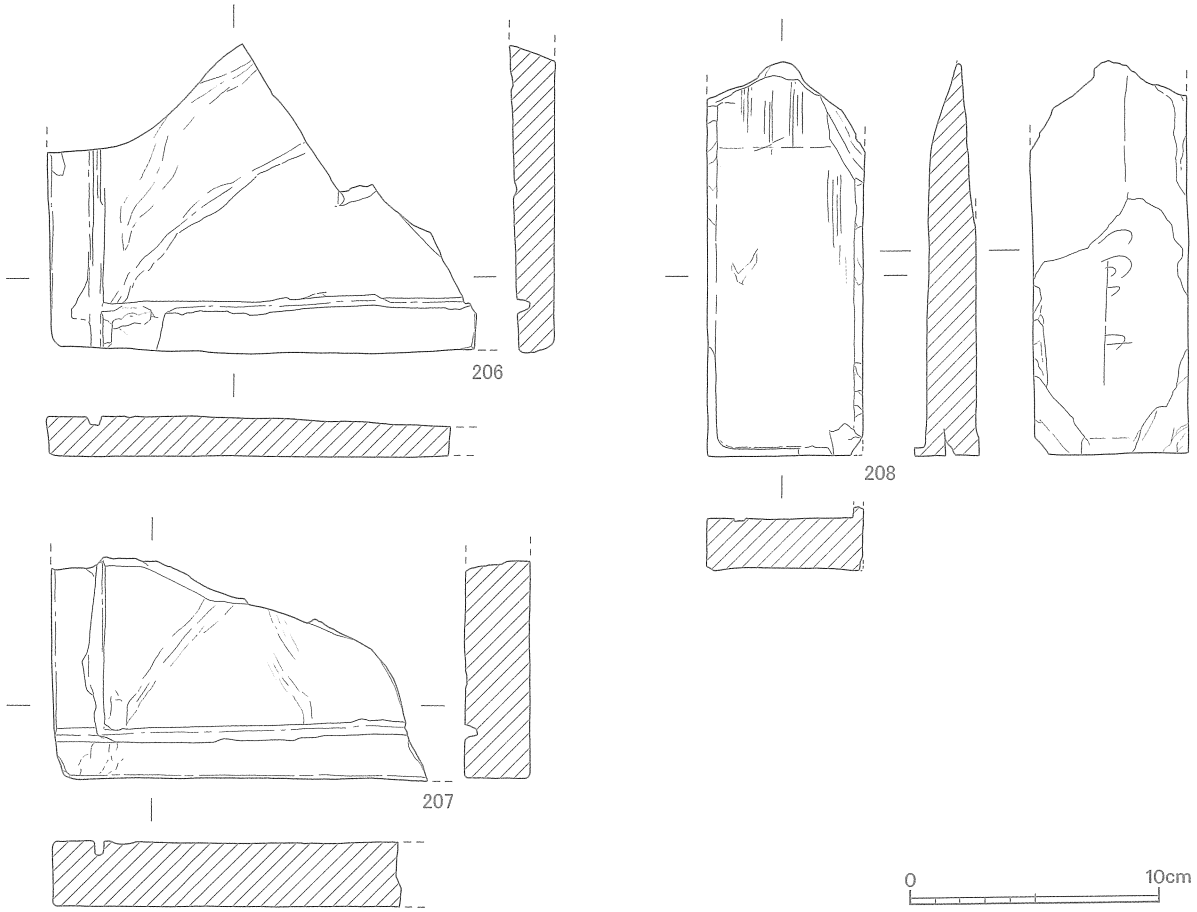


Fig.32　宗岡家地点出土遺物実測図Ⅴ（Ｓ＝１／３）

Tab. 6　宗岡家住宅出土遺物観察表Ⅰ

挿図番号	出土地点	種別	器種	大きさ(cm) 口径	器高	底径	色調	成形・調整・文様	備考
111	Ⅲ区　西部表土	肥前磁器	皿		(2.8)	4.8	透明釉	砂目	
112	Ⅳａ区　南半表土	不明磁器	皿	(13.1)	(2.9)	(7.0)	透明釉		
113	Ⅲ区　西部表土	肥前磁器	皿		(1.3)	(4.8)	透明釉		
114	Ⅲ区　東半表土	肥前磁器	皿		(1.6)	(7.7)	透明釉	蛇の目凹形高台	
115	Ⅲ区　東半表土	瀬戸	皿	11.3	2.6	5.4	透明釉		
116	Ⅳａ区　南西部表土	瀬戸	碗	(7.8)	4.8	3.0	透明釉		
117	Ⅳａ区　南半表土	瀬戸	碗	(7.3)	4.5	(3.2)	透明釉		
118	Ⅱｄ区 Ⅰｂ区　表土	瀬戸	小碗	(7.9)	(4.5)	(3.2)	透明釉		
119	Ⅲ区　東半表土 Ⅳ区	瀬戸	坏	7.6	5.3	3.1	透明釉	色絵	
120	Ⅳａ区　南半表土	肥前磁器	瓶		(3.2)	4.3	透明釉		
121	Ⅲ区　西部表土	肥前磁器	碗		(4.1)	(4.4)	透明釉		
122	Ⅲ区　東半表土	肥前磁器	碗		(3.6)	(4.2)	透明釉	蛇の目釉剥ぎ	
123	Ⅲ区　東半表土 Ⅲ区　東壁	肥前磁器	蕎麦猪口	7.3	5.7	5.4	透明釉	蛇の目凹形高台	
124	Ⅰｂ区　表土	瀬戸？	灯火具	(8.2)	4.5	(3.8)	透明釉		
125	Ⅰｂ区　表土	瀬戸？	灯火具	(8.6)	(3.2)		透明釉		
126	Ⅱｃ区　ＳＢ０２表採	肥前磁器	段重	10.6	4.1	9.7	透明釉		
127	Ⅲ区　東半表土	不明磁器	蓋	10.9	2.0		透明釉		
128	Ⅳａ区　北半表土	肥前磁器	蓋	(9.9)	3.0	つまみ径 3.8	透明釉	四方欅文	

Tab. 7　宗岡家住宅出土遺物観察表Ⅱ

129	Ⅳａ区　ＳＢ０２表土 Ⅳａ区　北部表土	肥前磁器	蓋	(9.1)	2.6	つまみ径 (3.4)	透明釉		
130	Ⅳｃ．ｄ区　表土	肥前磁器	戸車	現存長 5.4	現存幅 5.4	現存厚 1.2	透明釉		
131	Ⅳｃ区　表採	土師質土器	皿	6.7	1.2	3.0	淡黄色	刻印	
132	Ⅳａ区　南西部表土	土師質土器	芋かま？		(2.9)		淡黄色		
133	Ⅲ区　ＳＢ０２．ＳＸ０４周辺表土	瓦質土器	焜炉		(7.4)		暗灰色		
134	Ⅰｂ区　表土	瓦質土器	焜炉		(7.3)		暗灰色		
135	表採	土師質土器	焜炉		(7.4)	23.0	淡黄色		
136	Ⅲ区　東半表土	不明陶器	皿		(1.4)		長石釉		
137	Ⅳｄ区　表土	肥前陶器	皿		(1.6)	(4.8)	灰釉	砂目	
138	Ⅲ区　南半表土	肥前陶器	鉢		(3.9)	(3.7)	灰釉	蛇の目釉剥ぎ	
139	Ⅳａ区　南半表土	石見系陶器	小碗		(1.6)	(3.7)	来待釉		
140	Ⅳａ区　南半表土	不明陶器	土瓶？		(2.2)	(6.2)	不明		
141	Ⅳａ区　ＳＢ０２表土	在地系陶器	土瓶		(2.7)		灰釉		
142	Ⅳｃ区　表採	不明陶器	瓶		(2.1)	(9.0)	長石釉		
143	Ⅳａ区　ＳＢ０２表土	在地系陶器	植木鉢？		(6.5)		青磁釉 透明釉		
144	Ⅳａ区　北半表土	石見系	蓋	(10)	(3.8)		長石釉 ｺﾊﾞﾙﾄ釉		
145	Ⅳａ区　南西部表土	石見系	蓋	(14)	(3.8)		長石釉 ｺﾊﾞﾙﾄ釉		
146	Ⅲ区　西部表土	石見系	急須	(7.0)	(4.1)		長石釉		
147	Ⅳｄ区　表土	不明陶器	壺？	(14.8)	(3.5)		褐釉		
148	Ⅲ区　表採 Ⅲ区　東半表土	石見系	壺	(10.2)	(9.8)		長石釉		
149	Ⅰｂ区　表土 Ⅲ区　東半表土 Ⅳａ区　北部表土	石見系	壺	(13.5)	(7.0)		長石釉		
150	Ⅳａ区　北部表土	石見系	甕	15.0	(10.4)		来待釉		
151	Ⅳａ区　ＳＢ０２表土	堺	すり鉢		(7.2)		赤褐色		
152	Ⅳｄ区　表土	不明陶器	便器		(6.4)		銅緑釉？		
挿図番号	出土地点	種　別	器　種	大きさ (cm)			重量 (g)	色　調	備　考
				現存長	現存幅	現存厚			
153	Ⅳａ区　北半表土	石製品？	不明	9.3	10.5	2.7	370	白色	
154	Ⅳａ区　北半表土	石製品	硯	4.5	2.4	1.3	22.5	暗赤褐色	
155	Ⅱｃ区　表土	銭貨	寛永通寶	2.3	2.3		2.7		
156	Ⅱｄ区　表土	銭貨	寛永通寶	2.4	2.4		2.4		
挿図番号	出土地点	種　別	器　種	大きさ (cm)			色　調	成形・調整・文様	備　考
				口径	器高	底径			
157	Ⅱｃ区　ＳＢ０１表土	瀬戸	碗	(9.2)	3.3	(3.6)	透明釉		
158	Ⅱａ区　２層 Ⅱａ．ｃ区　ＳＢ０１ベルト内	瀬戸	碗	11.4	5.0	3.8	透明釉		
159	Ⅱｄ区　ＳＢ０１　２層	肥前磁器	皿		(1.7)	(5.3)	透明釉		
160	Ⅱｃ区　ＳＢ０１犬走り Ⅱｃ区　土蔵付近表土	瀬戸	蓋	10.0	3.1	3.1	透明釉		
161	Ⅱｃ区　ＳＢ０１犬走り	石見系	鉢		(3.7)		長石釉		
162	Ⅱｄ区　ＳＢ０１　２層	瀬戸	人形	現存長 4.6	現存幅 4.6	現存厚 3.8	白色		素地
163	Ⅱｃ区　ＳＢ０２　２層	肥前磁器	碗	(11.4)	(5.0)		透明釉	蛇の目釉剥ぎ	
164	Ⅱｃ区　ＳＢ０２　２層 Ⅱｃ区　ＳＸ０３　11層	肥前磁器	仏飯器	(9.5)	(4.4)		透明釉		
165	Ⅱｃ区　ＳＸ０３ Ⅱｃ区　ＳＢ０２　２層	肥前陶器	碗	(11.0)	(7.1)		藁灰釉		
166	Ⅱｃ区　ＳＢ０２　２層 Ⅱｃ区　ＳＸ０３	肥前陶器	蓋		(2.4)	つまみ径 4.4	青磁釉		
167	Ⅱｃ区　ＳＢ０２南壁サブトレ	肥前磁器	徳利	1.6	(4.9)		透明釉		

Tab. 8　宗岡家地住宅土遺物観察表Ⅲ

168	Ⅱｃ区　ＳＸ０３	土師質土器	皿		(1.2)	(4.6)	橙色		
169	Ⅱｃ区　ＳＸ０３	土師質土器	皿		(1.4)	5.2	にぶい橙色		
170	Ⅱｃ区　ＳＸ０３	肥前磁器	碗	(8.0)	(3.6)		透明釉		
171	Ⅳａ区　ＳＸ０３　10層 Ⅳａ区　ＳＸ０３	肥前磁器	小碗	7	3.4	2.7	透明釉		
172	Ⅱｃ区　ＳＸ０３　12層	肥前磁器	碗		(4.6)	(7.0)	透明釉		広東碗
173	Ⅱｃ区　ＳＸ０３南壁	肥前磁器	碗	(10.8)	(4.8)		透明釉		広東碗
174	Ⅱｃ区　ＳＸ０３	肥前磁器	碗		(2.1)	3.6	透明釉		
175	Ⅱｃ区　ＳＸ０３	肥前磁器	皿		(1.5)	(4.6)	透明釉		
176	Ⅳａ区　ＳＸ０３　10層	肥前磁器	蓋	9.6	2.7	つまみ径 3.8	透明釉		
177	Ⅱｃ区　ＳＸ０３	肥前磁器	蓋	(10.0)	2.6	つまみ径 (5.8)	透明釉		
178	Ⅳａ区　ＳＸ０３　11層	肥前磁器	瓶		(2.9)		透明釉		
179	Ⅱｃ区　ＳＸ０３	肥前磁器	徳利		(1.9)	2.7	透明釉		
180	Ⅱｃ区　ＳＸ０３	不明陶器	小壺	(7.1)	(4.2)		褐釉　鉄釉		
181	Ⅳａ区　ＳＸ０３　11層	石見系	鉢	(18.8)	(9.5)	7.7	長石釉	胎土目	
挿図番号	出土地点	種　別	器　種	大きさ (cm)			重量 (g)	色　調	備　考
				現存長	現存幅	現存厚			
182	Ⅳａ区　ＳＸ０３　10層	土製品	サナ	5.6	7.6	1.6	64.8	淡黄色	
183	Ⅱｃ区　ＳＸ０３	窯道具	ハセ	7.3	3.0	3.0	30.9	淡黄色	
挿図番号	出土地点	種　別	器　種	大きさ (cm)			色　調	成形・調整・文様	備　考
				口径	器高	底径			
184	Ⅲ区　離れ西側整地土	肥前陶器	皿	(11.0)	3.4	4.4	灰釉		
185	Ⅱｂ拡張区ＳＸ０７上面	肥前磁器	皿	(9.3)	2.1	(5.8)	透明釉		
186	Ⅱｂ拡張区	肥前磁器	碗		(4.2)	3.8	透明釉		
187	Ⅱｂ拡張区	不明磁器	碗		(2.8)	(3.9)	透明釉		
188	Ⅱｂ拡張区	不明磁器	小坏	(5.2)	3.8	3.0	透明釉	陽刻	
189	Ⅲ区　離れ西側整地土	肥前磁器	碗	(10.6)	(5.9)		透明釉		
190	Ⅱｃ区　ＳＸ０３南壁	肥前磁器	碗		(4.3)		透明釉		
191	Ⅱｃ区　モルタル下	石見系	徳利		(1.5)	(7.7)	長石釉		
192	Ⅳｄ区　南半３層	肥前磁器	香炉		(5.3)		青磁釉		
193	Ⅳ区	不明陶器	徳利		(1.6)		褐釉　鉄釉		
194	Ⅱｂ拡張区	肥前磁器	灯火具	7.6	(3.6)	3.6	透明釉		
195	Ⅱｂ拡張区	肥前磁器	蓋	(9.8)	3.4	つまみ径 (4.0)	透明釉		
196	Ⅱｂ拡張区	不明陶器	蓋	(8.1)	4.3	つまみ径 (2.4)	長石釉	鉄絵	
197	Ⅳａ区　深堀トレンチ２層	肥前磁器	仏飯器	(7.2)	(2.8)		透明釉	ｺﾝﾆｬｸ印判	
198	Ⅳａ区　深堀トレンチ13層上面	肥前磁器	段重		(5.0)		透明釉		
199	Ⅳｃ区　東壁サブトレ18層	肥前陶器	皿		(1.4)	(4.8)	長石釉	胎土目	
200	Ⅰａ区　下面	須佐	すり鉢		(11.2)		来待釉		
201	Ⅳａ区　深堀トレンチ21層	備前	壺		(9.8)		にぶい赤褐色		
202	Ⅳａ区　深堀トレンチＳＫ０５	土師質土器	焜炉		(8.5)	(17.0)	橙色		
挿図番号	出土地点	種　別	器　種	大きさ (cm)			重量 (g)	色　調	備　考
				現存長	現存幅	現存厚			
203	Ⅱｃ区　井戸周辺モルタル下位	鉄製品	釘	11.7	0.4	0.4	11.8		
204	Ⅱｄ区　ＳＢ０１　２層下面	銅製品	錘	4.6	3.3	3.3	215		
205	Ⅱａ～ｃ区　ＳＢ０１ベルト内	銭貨	寛永通寶	2.4	2.4		2.9		
206	Ⅳｃ区	石製品？	不明	12.3	17	1.8	395	淡赤橙色	
207	Ⅳ区	石製品？	不明	8.9	14.9	2.6	515	白色	
208	Ⅳａ区　ＳＢ０２表土 Ⅳａ区　ＳＸ０３　11層	石製品	硯	15.7	6.2	2.5	390	灰ｵﾘｰﾌﾞ色	刻書

第４章　本年度の試掘・立会調査

第１節　本年度の試掘・立会調査対象箇所とその対応

第１項　大森銀山伝統的建物群保存地区 (Fig.21)

①松場登美家地点浄化槽埋設に伴う工事立会

対象地は大森区域内でも駒ノ足地区にあたり、地点番号では KoW20 に該当する。

調査は掘削が実施される６月 10 日に行い、内容は浄化槽埋設に伴う工事立会である。掘削の規模は約 1.5 m× 2 mで、深さは 1.9 m程度であった。

掘削を開始すると、山側で現地表下 40 ～ 50㎝程で岩盤となり、東側に傾斜しながら下っていた。

岩盤の上層は厚い盛土で、調査区東端の岩盤まで掘り下げたが、明確な遺構面は検出されなかった。

遺物は、地表直下で近代以降と推定される石見系陶器の甕が出土したのみである。

このため、当該地区には明確な遺構は無いものと判断し、工事を続行、翌日工事完了した。

②大森座南地点浄化槽埋設に伴う試掘調査

対象地は大森区域内でも宮ノ前地区にあたり、地点番号では MiW34 に該当する。

調査の詳細については次節で報告する。

③松原家裏地点浄化槽埋設に伴う工事立会

対象地は大森区域内でも駒ノ足地区にあたり、地点番号では KoE20 に該当する。本年度調査の松場登美家とは通りを隔てた東側となるが、調査地は建物背後の銀山川沿いに立地する。

当該地は平成 17 年度調査地点 (Fig.21) のすぐ北側にあたり、掘削の規模は約 1.5 m× 3 mであった。

調査は掘削を行う 10 月 28 日に実施し、内容は浄化槽埋設に伴う工事立会である。調査地は銀山川護岸石垣のすぐ西側で、掘削前から厚い盛土が予測された。

掘削を行うと厚い盛土が確認されたが、地表下約 1.4 mの高さで、ほぼ水平に整地されたと考えられる黄褐色土層が確認された。この層上では遺構は確認されず、整地土も硬くしまっていないため、一時的な整地と判断し、掘削を続行した。整地土下も厚く盛土で造成されており、表土下約 2.1 m掘り下げた時点で計画深度に達したため掘削を終了した。

出土遺物は、18 世紀から近代までの肥前磁器、少量の瀬戸・美濃、土師質の焙烙・焜炉や、石見系陶器の皿・すり鉢・花瓶などが出土している。表土からの遺物以外、層位による時期差は認められないものの、19 世紀代の遺物が多い傾向にある。また、窯道具も２点確認されている。

④銀山公園駐車場通信施設設置に伴う立会

対象地は、大森区域内でも羅漢町地区にあたるが、基準となる通りに面していないため、地点番号は銀山公園地区 (Ra01) と同様、通りの東西を示す W・E は付さず、Ra02 とした。

調査は、ソフトバンクの通信施設埋設に伴う工事立会で、12 月８日に実施した。掘削の規模は、約 2.5 m× 3.5 mであった。

対象地の現状は平坦に造成され、砕石を敷いて駐車場として利用されている。このことから、調査前から上面は削平或いは造成されているものと推定された。

掘削を行うと、砕石直下から黄褐色土の造成土が検出され、現地表面下約 50㎝で岩盤が検出された。この岩盤はほぼ水平に削平されており、調査区東側の山裾には、岩盤を削ってコンクリート製の排水溝が設置されていることが明らかとなった。

こうしたことから、対象地は銀山公園造成時に、南側の山塊の一部を削平して平坦地を設け、岩盤上に黄褐色土で造成を行ったものと判明した。

工事は岩盤を約 10㎝削平し、表土下 60㎝で計画深度に達したため掘削を終了した。

本調査で遺物は出土していない。

第２項　温泉津伝統的建物群保存地区 (Fig.33 ～ 35)

①下水道工事に伴う地盤調査立会

調査は、温泉津伝統的建造物群保存地区内において計画されている下水道工事に先立ち、地盤の強度を調べる試掘調査について立会したもので、10 月 16 日に実施した。試掘箇所は２ヶ所で、掘削順に西側を１Ｔ、東側を２Ｔとした。

【１Ｔ】(Fig.34)

対象地は、温泉津伝統的建物群保存地区内でも海岸

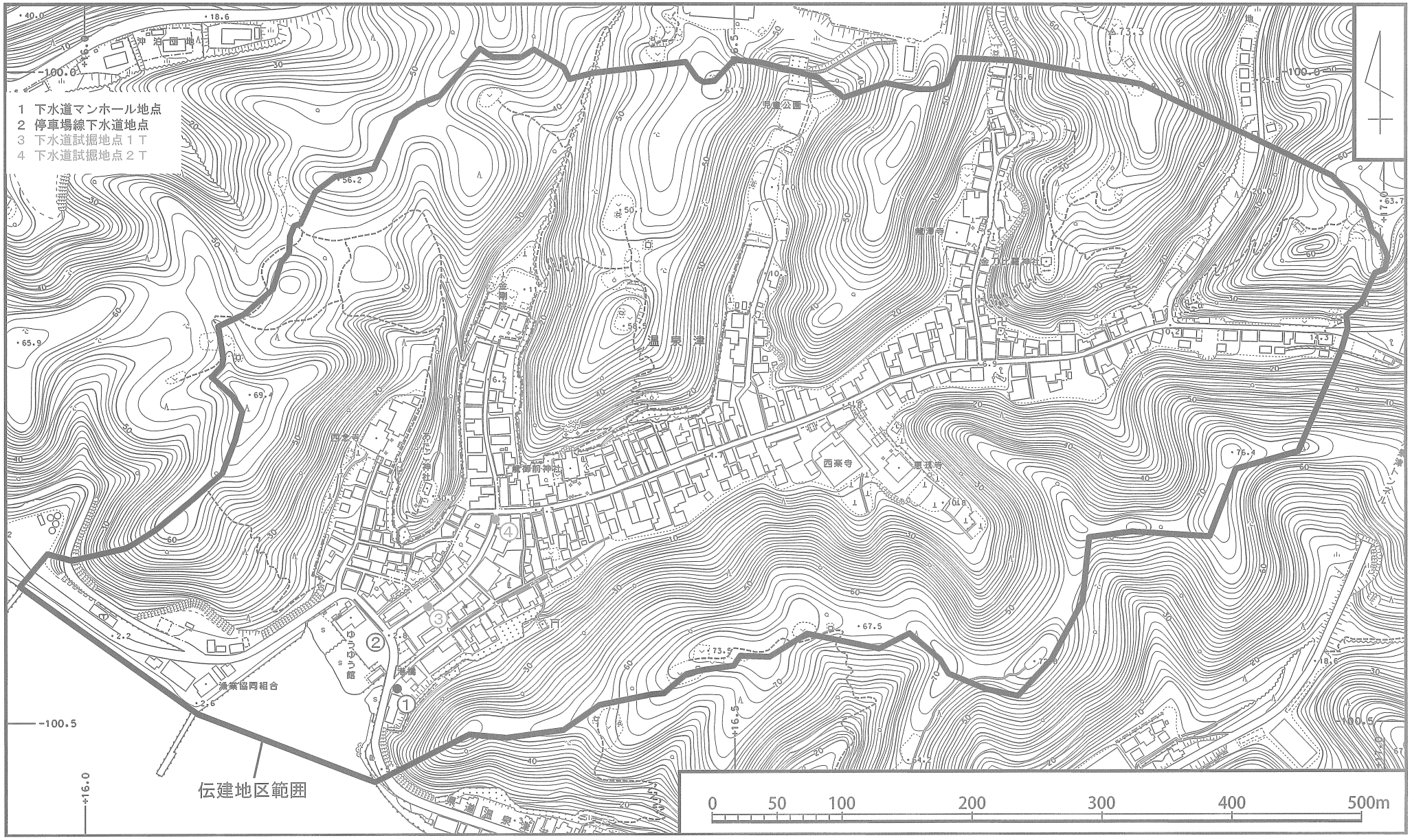


Fig.33　温泉津伝建地区内試掘・立会地点（Ｓ＝１／4,000）

に近い場所で、県道温泉津港線からおよそ35ｍ東の位置である。現状は道路で、元禄５(1692)年に描かれた絵図でも道として記載されている場所である。

調査は、アスファルト舗装面に１ｍ×２ｍの切れ込みを入れ、この範囲で行った。掘削を開始するとアスファルト下の砕石直下で淡灰色の硬化した層が検出され、舗装敷設前の道路面と推定される。その下層では、大型の礫を含む黄褐色土が約60㎝の厚さで堆積しており、道路建設時の造成土と考えられる。この層下は、前段階の道路面とみられる淡赤褐色土の硬化面で、厚さは約10㎝であった。さらに、20～30㎝の暗赤褐色土の造成土をはさんで、茶褐色の硬化面が検出された。この硬化面も道路跡と考えられるが、厚さは２～５㎝と薄かった。この下層は灰褐色の粘質土で、厚さは30㎝程である。この粘質土の下層は暗灰色の有機物層で、16世紀代の遺物が多く出土した。この有機物層は少なくとも40㎝以上堆積しており、土壌化していない木の葉や枝などが多く含まれていた。遺物の中には貝類や人骨・獣骨等も含まれており、こうした堆積状況は、河口付近の淀みなどに自然に堆積した状況を示していると推察される。

ここまで確認した段階で、掘削を終了したためさらに下層の堆積状況については確認できなかった。

出土遺物は、上層では出土せず、検出最下層の暗灰色有機物層で、まとまって出土している。内容は、青花碗６点、青花皿９点、白磁皿５点、瓦質土器火鉢１点で、肥前陶磁器は含まれていない。青花には、漳州窯産と考えられるものが８点含まれている。こうした遺物組成から、16世紀第３四半期から第４四半期前半の限られた時期の遺物群と推定され、石見銀山の時期区分では銀山１期に該当する。

Fig.34　１Ｔ堆積状況（北西から）

これまで、銀山での調査では、ほとんどの遺構面で肥前陶器が含まれており、明確に銀山１期と認められる遺物群は少なく、本遺物群は遺構には伴わないものの貴重な遺物群と言える。

上層で検出した道路遺構については伴う遺物が出土していないため、時期は不明であるが、16世紀後半以降に段階的に造成されたものと推定される。

また、最下層は自然堆積の状況を示していることから、当該期にはまだこの地点まで、市街化が及んでいなかったことが想定できる。元禄５(1692)年の絵図では町屋の一角となっており、この時期までに町屋が拡張されたものと考えられる。したがって、有機物層上の粘質土がこの地点の最初の造成土と考えられ、その上の硬化面が初期の道路遺構と推定される。

【２Ｔ】(Fig.35)

対象地は、１Ｔから約90ｍ東方の道路上にあたる。規模及び掘削方法は１Ｔと同様で、掘削を行うとアスファルト直下で互層状に堆積した非常に硬くしまった層が約15㎝の厚さで確認された。何度も整地が繰り返された状況が窺えるが、遺物が出土しておらず時期は不明である。

この層下では現在の道路と平行に延びる石組の水路遺構を検出した。最上部の石材は地表面より30～40㎝下位となる。石材上部で18世紀後半とみられる肥前磁器碗が出土した。水路遺構は幅約60㎝で、方形に加工された石材をほぼ垂直に積み上げて構築しており、確認した範囲では深さは1.4ｍ以上ある。検出位置、規模、方向などから温泉津伝建地区における主要街路の側溝である可能性が極めて高い。

他の出土遺物は、地表下40㎝の位置で、肥前磁器碗が出土したが細片のため時期は不明である。

Fig.35　２Ｔ水路検出状況（北東から）

第２節　大森座南地点浄化槽埋設に伴う試掘調査

第１項　調査の概要

調査地は大森区域の宮ノ前地区に当たる。代官所から南東に約 100 mの地点に所在する旧大森郵便局舎の南側で、道を挟んで東側には熊谷家住宅がある。試掘調査は旧大森郵便局舎を改修したオペラハウス「大森座」建設における、浄化槽の設置に伴って実施した。掘削の規模は東西約 4.4 m、南北約 2.6 mであった。調査は７月７日～９日に実施した。

第２項　層序 (Fig.36)

ここでは試掘調査で確認できた堆積層の中でも、時期が明らかとなったものと、遺構が確認された堆積層について報告する。遺構と遺物の詳細についてはそれぞれ第３項及び第４項を参照されたい。

第３層は褐色の整地土層で、上面は標高 109.8 m である。堆積層から時期を反映する遺物は出土していないが、上面に寛政 12(1800) 年の大森大火に伴う焼土・炭層の可能性がある第２層が存在することから、江戸時代後半に整地されたものと判断できる。

第５・６・９層は、第５層が黒色砂質土層、第６層が黒色有機物土層、第９層が青灰色粘質土層となっており、それぞれ土質が異なっているが、いずれの堆積層からも江戸時代初期の遺物が出土している。特に、第６層と第９層に間には第７層を挟んでいるが、出土遺物に時期差を認められないため、当該時期に活発な土地の改変、または水害があった可能性が考えられる。第 12 層からは時期が特定できる遺物が出土しなかったが、第９層と同一面上であるため、第９層とほぼ同時期の堆積層と判断できる。

遺構としては、第５層上面から建物の礎石とみられる石が１点と、第９層下面から掘りこまれている溝状遺構が１基検出された。また、第 12 層下面では２個の石を並べた石列が検出されたが、性格は不明である。

第 17・20 層は、第 17 層が暗青色粘質土、第 20 層が灰色粘質土で、堆積層からは 13 世紀代の遺物 (231 ～ 233) が出土した。また、第 18 層上面からは柱穴とみられる遺構 (ＳＰ 01) と木片などの有機物が詰まった土坑 (ＳＫ 01) が検出された。13 世紀代の遺物が出土したことは石見銀山遺跡で初であり、非常に重要な成果である。

第３項　検出遺構 (Fig.36)

【Ｓ 01】

Ｓ 01 は北壁の断面で検出された遺構で、扁平な石を用いた建物の礎石とみられる。検出面は第５層上面で、標高は 108.7 m である。１点のみの検出であるため、建物の規模や方向は不明である。検出層位から江戸時代初期の遺構と判断できる。

【ＳＤ 01】

ＳＤ 01 は調査範囲の西壁で検出された溝の断面である。検出層位は第９層上面で、標高は 108.3 m である。検出範囲での規模は幅 62㎝、深さ 28㎝で、遺構埋土は黒色の有機質土である。東壁断面でも第 13 層下面で落ち込みが確認されていることから、本来は東西に走る溝であったとみられる。遺構埋土から遺物は出土しなかったが、検出面である第９層の出土遺物から、16 世紀末～ 17 世紀初頭までに形成された遺構と判断できる。

【ＳＫ 01】

ＳＫ 01 は第 17 層上面の標高 108.0 m で検出された遺構で、平面形が隅丸台形の土坑である。規模は最大幅が 40㎝、深さ 44㎝である。埋土は木片を多く含む黒色の有機物層で、埋土内から遺物は出土しなかった。遺構の性格は不明である。

【ＳＰ 01】

ＳＰ 01 は第 17 層上面の標高 108.0 m から検出された遺構である。規模は直径 30㎝、深さ 42㎝で、平面形は円形である。埋土には一部に木質を含んだ第２層と、色調は同様であるが、締まりがあり、木質を含まない第３層がある。断面形は２段になっており、途中からやや狭くなる。検出状況から柱穴と判断でき、第３層が柱痕で、第２層が柱穴埋土とみられる。

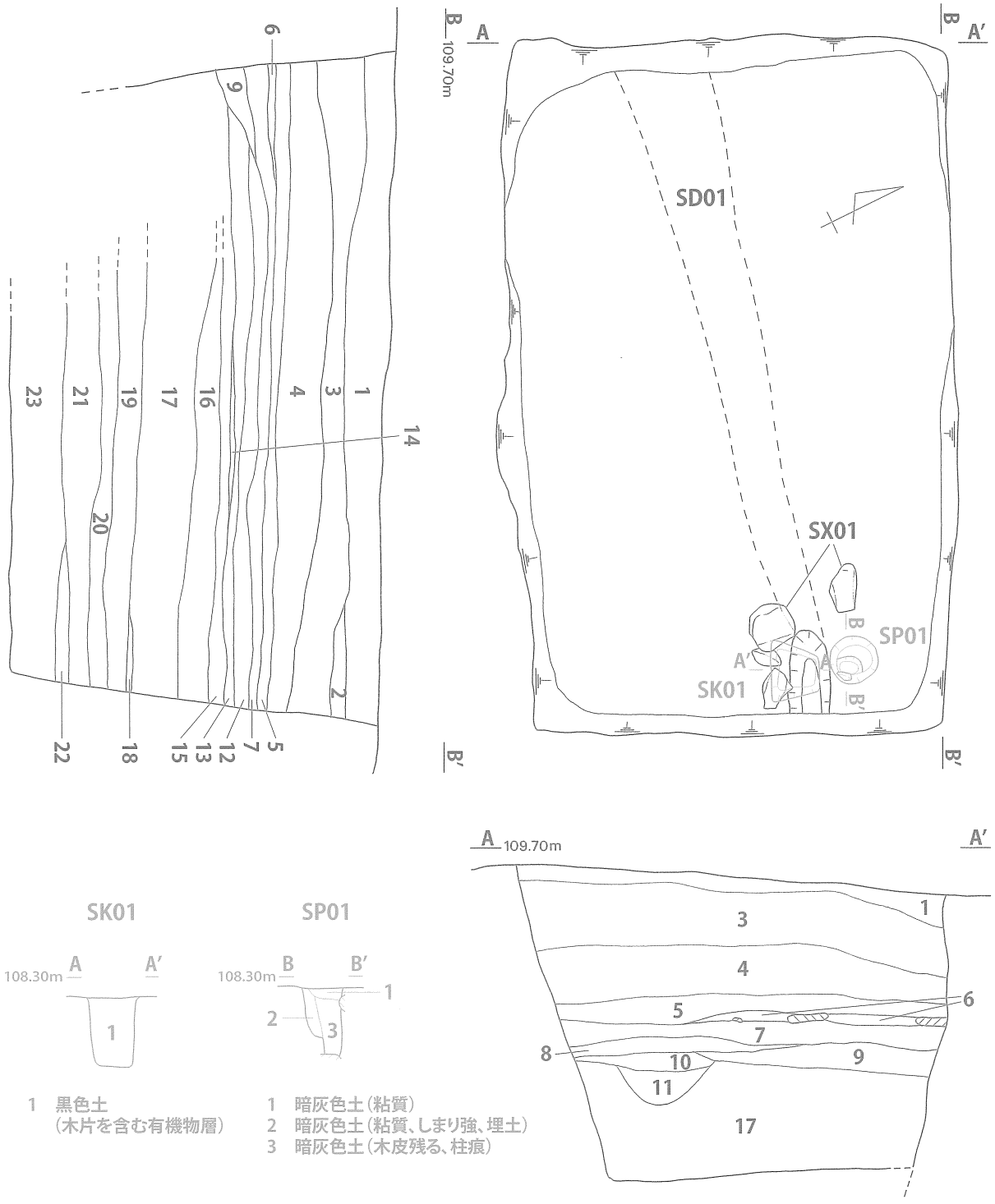
【ＳＸ 01】

ＳＸ 01 は第 12 層下面の標高 108.4 m で検出された遺構である。最大径 30㎝、高さ 30㎝の円形の自然石と、最大幅 32㎝、高さ 20㎝の平面形がやや扁平な石が二つ検出された。用途等は不明であり、転石の可能性もある。

第４項　出土遺物 (Fig.37 ～ 40、Tab. 9・10)

遺物は各層から陶磁器、石製品、金属製品、木製品などが出土している。

Fig.36　大森座南地点調査地位置図（Ｓ＝１／1,000）



1 青灰色土（表土）
2 黒褐色土（炭を多量に含む、整地層、寛政の大火？）
3 褐色土
4 白灰色土（粘質）
5 黒色土（砂質）
6 黒色土（有機物含む）
7 緑灰色土（粘質）
8 黒色土（有機物含む）
9 青灰色土（粘質）
10 青灰色土（粘質）
11 黒色土（有機物含む、SD01埋土）
12 青灰色土（粘質）
13 青灰色土（粘質、整地層）
14 青灰色土（粘質）
15 黒色土（有機物含む）
16 緑灰色土（粘質）
17 暗青灰色土（粘質、整地層）
18 青灰色土（粘質、固くしまる、整地層）
19 暗白灰色土（粘質、整地層）
20 灰色土（粘質）
21 暗青灰色土（粘質）
22 暗褐色土（粘質）
23 暗灰色土（粘質、固くしまる）

0 2m

Fig.37　大森座南地点トレンチ平面図・断面図（S＝1／40）

陶磁器を上層からみると、第３層で 17 世紀初頭と考えられる肥前陶器皿 (209) が出土しているが、１点のみの出土で、攪乱による混入の可能性が高い。

第５層からは、肥前陶器の皿 (210 ～ 212)、鉢 (213)、すり鉢 (214) などが出土しており、いずれも 1590 年から 1610 年頃と考えられるもので、16 世紀末から 17 世紀初頭に位置づけられる。

第６層からは、土師質土器皿 (215 ～ 217)、青花大皿 (218)、肥前陶器皿 (221・222・225)、碗 (227) などの他、白磁の仏像 (229) が出土している。この白磁の仏像は、胎土や釉薬などから中国徳化窯産の可能性が考えられる。また、土師質土器のうち、216 と 217 は京都系土師器である。碗は、所謂沓茶碗と呼ばれるものである。時期については、いずれも 16 世紀末から 17 世紀初頭に位置づけられるもので、第５層の遺物群とはほとんど時期差が認められない。

第９層からは、青花皿 (219)、碗 (220)、肥前陶器大皿 (223・224)、碗 (227)、片口鉢 (228) などが出土している。時期は 16 世紀末から 17 世紀初頭の年代観が与えられ、第７層をはさんで第５・第６層より下層ではあるが、時期差はほとんど見られない。

さらに下層では、第 17 層から中世須恵器甕 (231)、古瀬戸瓶 (232) が、第 20 層からは瓷器系の甕 (233) が出土している。甕は胴部のみで明確ではないものの、越前か常滑と思われる。これらはいずれも 13 世紀後半～ 14 世紀初頭に位置づけられると考えられ、これまでの銀山調査では出土していない時期の遺物で、今後の銀山研究にとって貴重な資料となろう。

この他、第２層からは自然釉のかかった陶器 (230) が出土している。同層は寛政 12(1800) 年の大森大火に伴う焼土、炭層と考えられており、当該期の資料と考えられるが、陶器は中世的な特徴を持つことから、後世の混入も含め、注意深い検証が必要である。

石製品では、第５層から石鉢 (234)、石臼 (236・237) が出土している。石鉢については口縁付近から内面上部が被熱しており、内部で火を扱う用途に使用したものと考えられる。石臼 (236) は茶臼である。また、第６層からは、砥石 (235) の破片が出土している。年代については第５層、第６層から出土した陶磁器から 16 世紀末から 17 世紀初頭と考えられる。

金属器については、第９層からキセルの雁首 (238)、鎌 (240)、火箸 (241)、不明製品 (243) が出土している。第 12 層からは、キセルの吸口 (239) が、第 17 層からはツルハシ (242) が出土している。第 12 層からは図示できる陶磁器は出土していないが、第９層と同一面上に堆積しており、第９層とほぼ同時期の遺物と考えられる。

銭貨は、第９層 (245 ～ 251) と第 12 層 (252 ～ 256) を中心に出土している。第５層からは１点 (244) のみ出土している。いずれも無文銭で、嶋谷分類ではＢ - Ⅱ - ３型、Ｂ - Ⅲ - ２型、Ｃ - Ⅱ - ３型の範疇に収まるものである。時期は、同層から出土した陶磁器から、16 世紀末から 17 世紀初頭頃と考えられる。

木製品は、第９層から鍬の刃床部 (258)、鎌の柄 (260) が出土しており、第 15 層からは連歯下駄 (257)、第 17 層からは板状木製品 (259) が出土している。鎌の柄については同層から出土した鎌の刃部 (240) と同一固体になる可能性が高い。板状木製品については両側面に竹釘の目痕が残っており、数枚を連結して円形の板としていたと考えられる。端部の加工状況から桶蓋であった可能性が高い。

また、出土層位は明確にできないが、第４層～第 14 層の間で柱材が２点 (261・262) 出土した。261 は断面が方形に面取されており、両端部が残存する。このことから、長さは約 42㎝と判明し、床などを支える束柱であったと思われる。いずれも時期は不明であるが、261 の方が上層から出土したと考えられ、第４層に伴うものであれば 18 世紀代まで下る可能性がある。

第３節　小結

大森座浄化槽埋設に伴う試掘調査では、江戸時代初期に位置づけられる遺物とともに、遺構面が２面検出されたことと、13 世紀代の遺物と遺構が検出されたことの２点が大きな成果として挙げられる。また、江戸時代初期の遺構面である第５層上面では、礎石建物が利用されていた可能性があるが、江戸時代以前の堆積層である第 18 層上面では柱穴が検出されたことから、中世の段階では掘立柱建物を建てていた可能性もある。

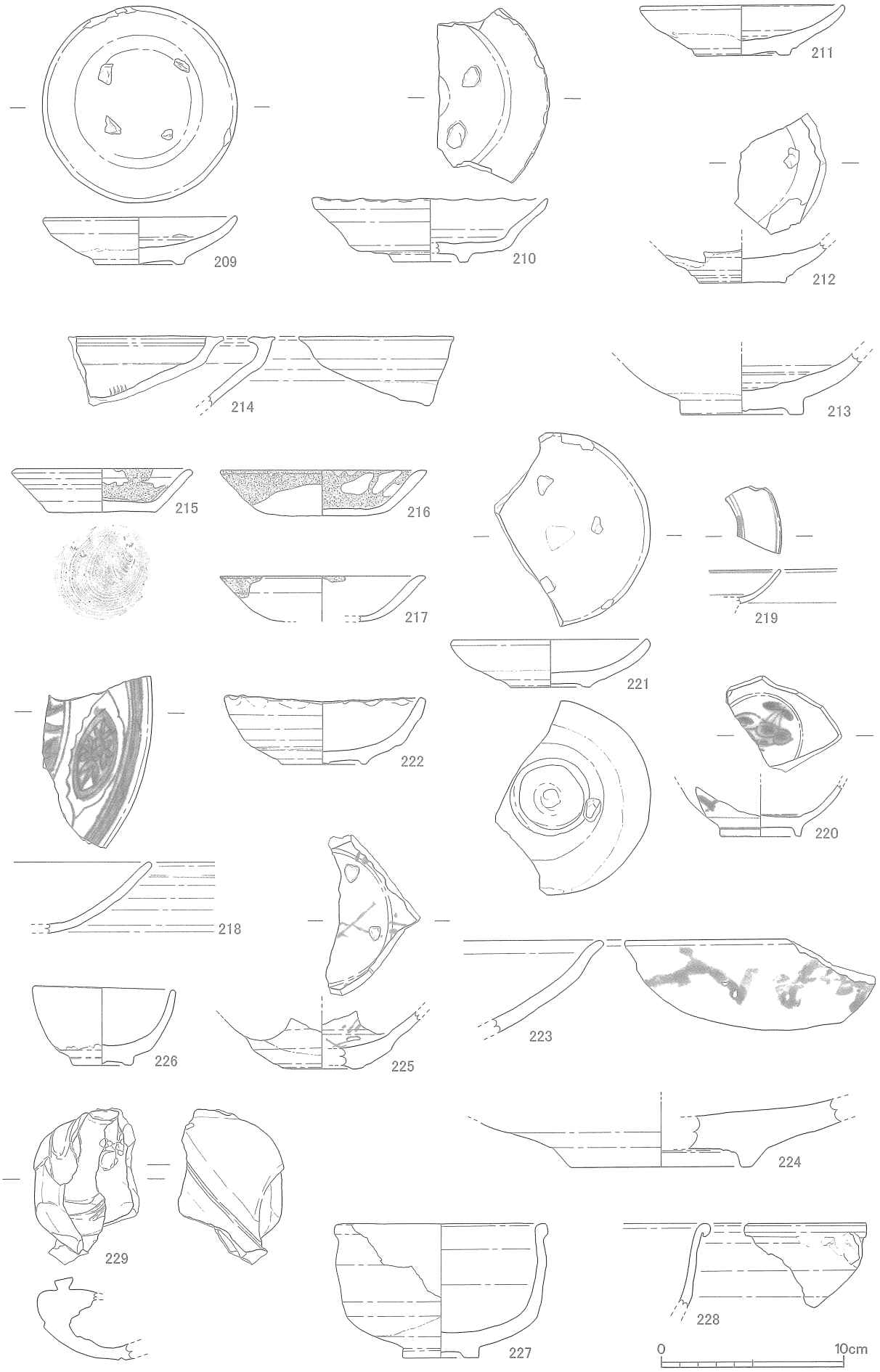


Fig.38　大森座南地点出土遺物実測図Ⅰ（S＝1／3）

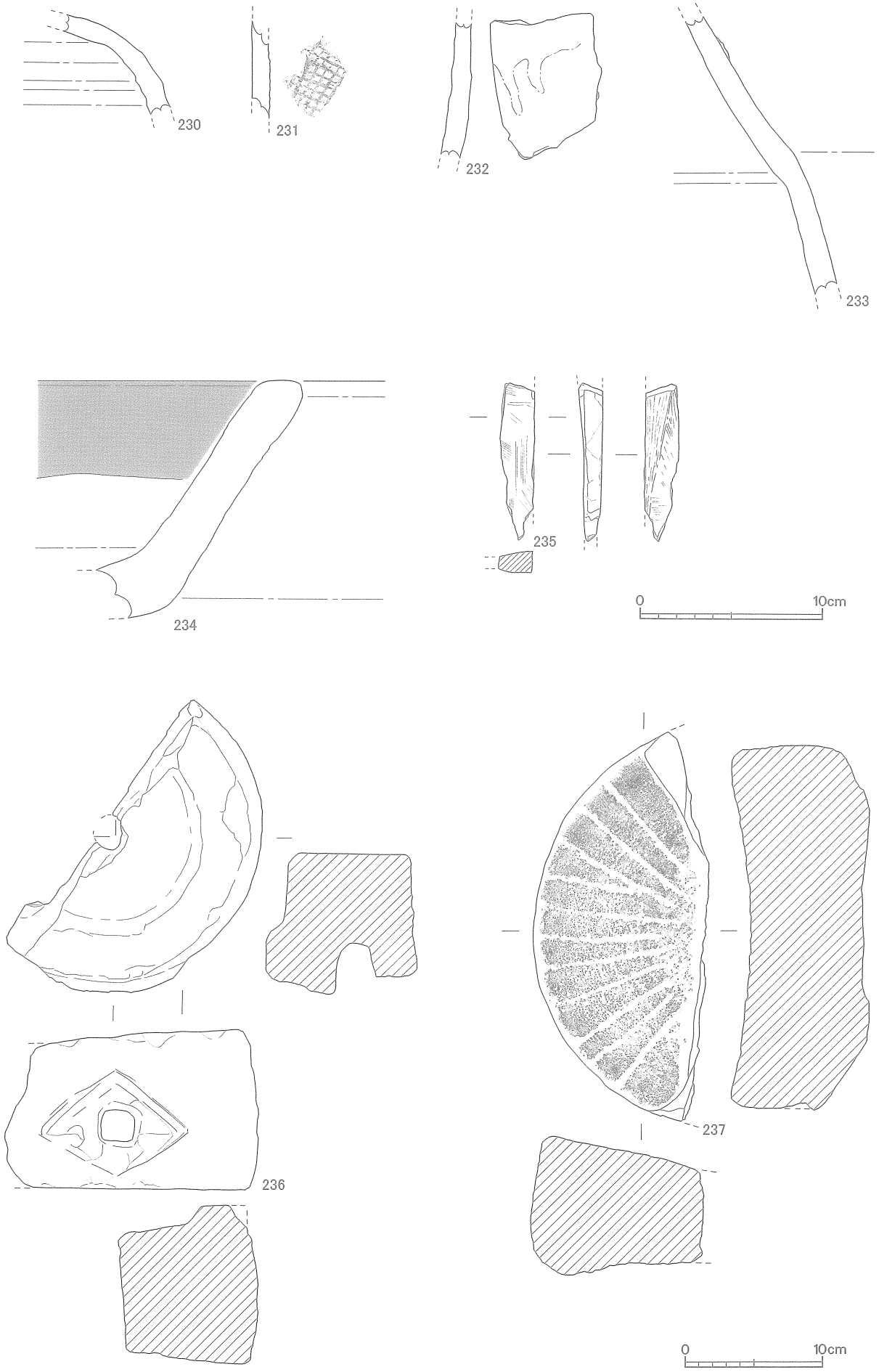


Fig.39　大森座南地点出土遺物実測図Ⅱ（S＝1／3、1／4）

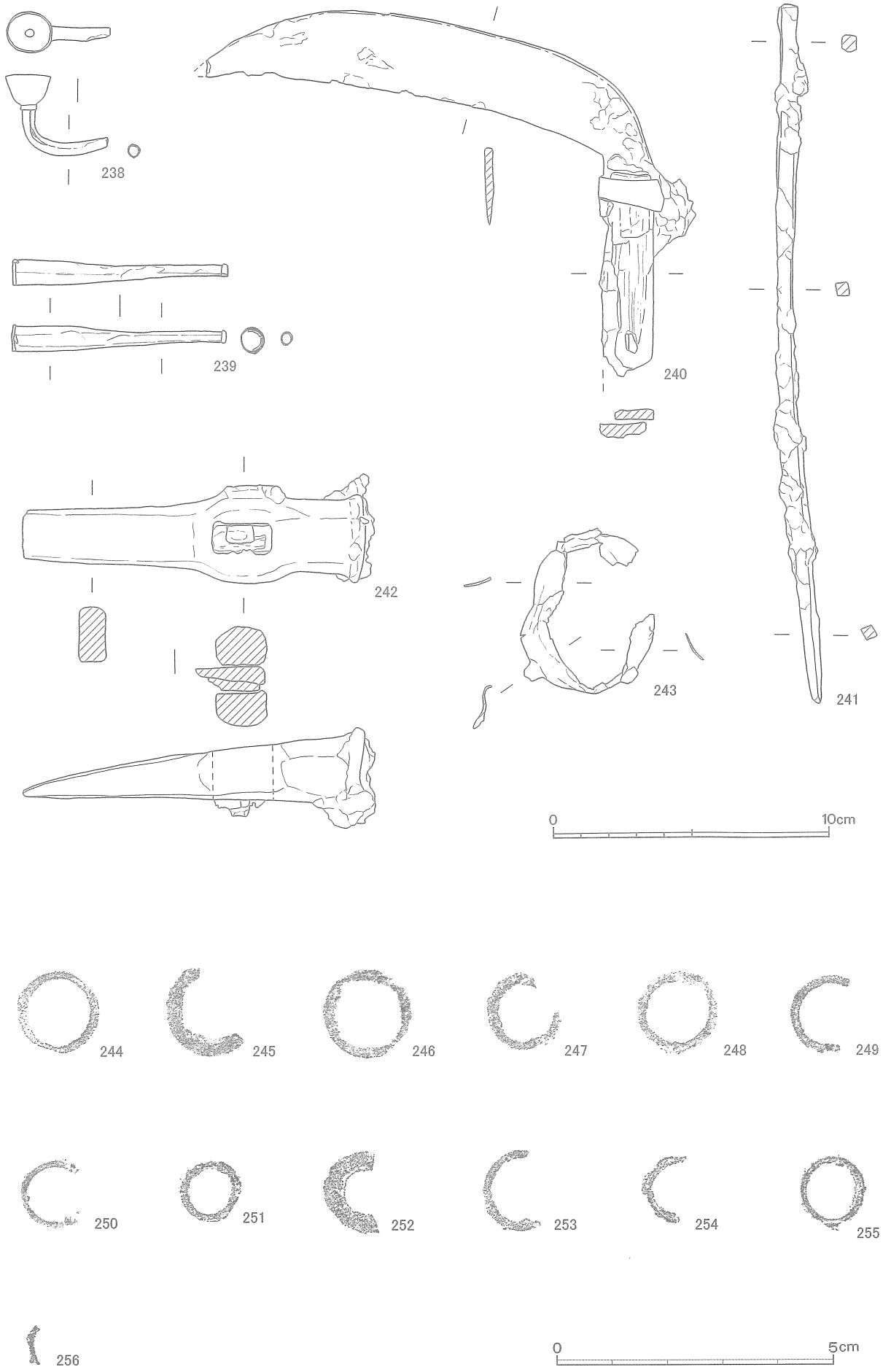


Fig.40　大森座南地点出土遺物実測図Ⅲ（S＝1／1、1／2）

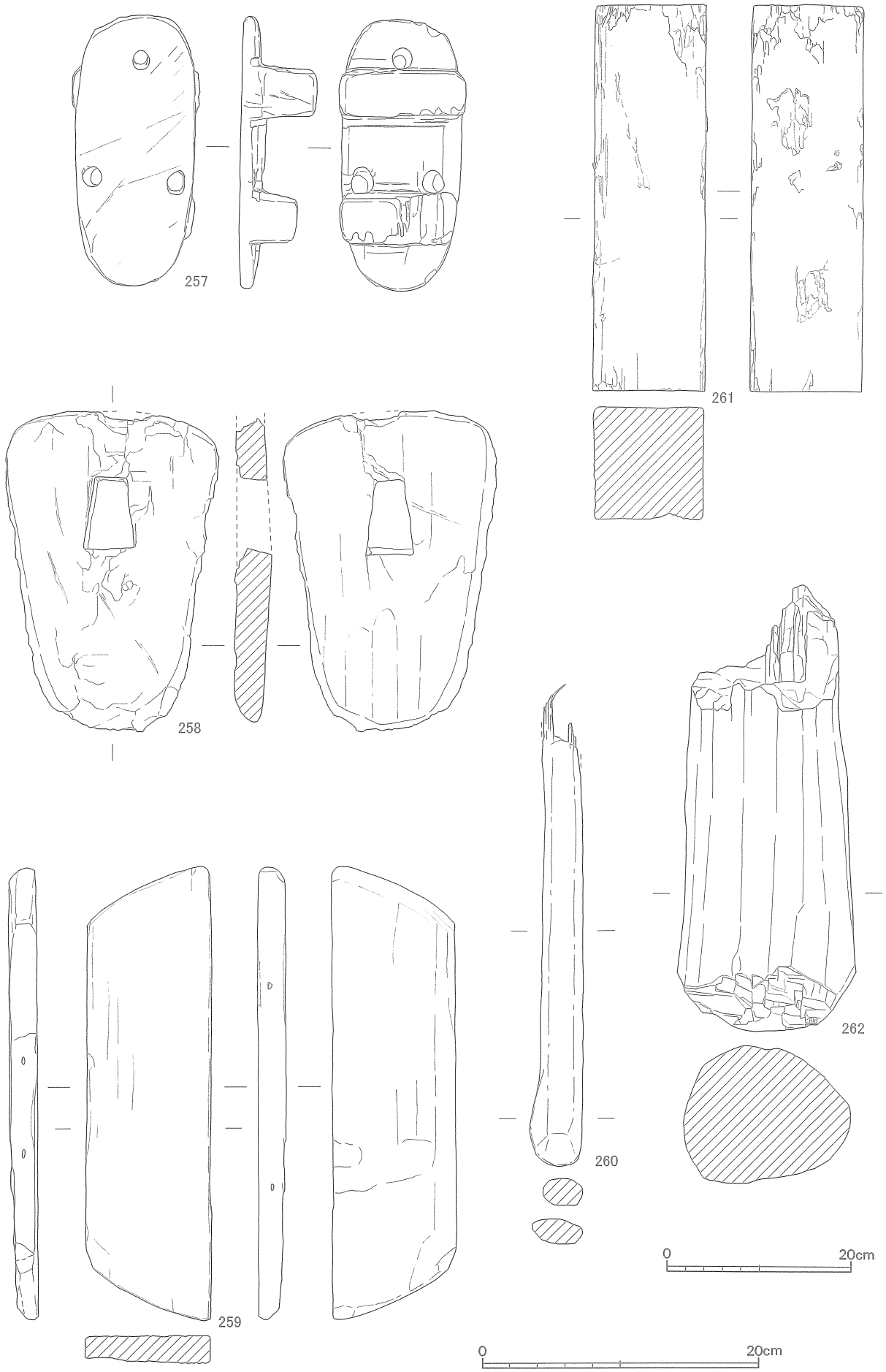


Fig.41　大森座南地点出土遺物実測図Ⅳ（S＝1／4、1／6）

Tab. 9　大森座南地点出土遺物観察表Ⅰ

挿図番号	出土地点	種　別	器　種	大きさ (cm)			色　調	成形・調整・文様	備　考
				口径	器高	底径			
209	3層	肥前陶器	皿	10.6	2.6	4.8	灰釉	胎土目	
210	5層	肥前陶器	皿	(12.8)	3.5	(4.0)	灰釉	胎土目	
211	5層	肥前陶器	皿	(10.9)	2.8	(5.0)	灰釉		
212	5層	肥前陶器	皿		(2.2)	(4.8)	透明釉	胎土目	
213	5層	肥前陶器	鉢		(3.4)	(6.6)	灰釉		
214	5層	肥前陶器	すり鉢		(3.8)		鉄釉		
215	6層　黒色土	土師質土器	皿	(9.8)	2.4	(5.7)	浅黄色	ススト付着	
216	6層　黒色土	土師質土器	皿	(11.2)	2.5	(6.0)	にぶい黄橙色	ススト付着	京都系
217	6層　黒色土	土師質土器	皿	(11.2)	2.5	(5.5)	にぶい黄橙色	ススト付着	京都系
218	6層　黒色土	青花	大皿		(3.9)		透明釉		
219	9層	青花	皿		(1.8)		透明釉		
220	9層	青花	碗		(2.9)	(3.4)	透明釉		
221	6層　黒色土	肥前陶器	皿	(10.6)	2.6	4.3	薄い長石釉	胎土目	
222	6層　黒色土	肥前陶器	皿	10.7	3.7	4.3	長石釉	輪花	
223	9層	肥前陶器	皿		(5.0)		灰釉		
224	9層	肥前陶器	大皿		(3.7)	(10.0)	灰釉		
225	6層　黒色土	肥前陶器	皿		(2.7)	(3.4)	灰釉	胎土目 鉄絵	
226	6層　黒色土	肥前陶器	坏	(7.5)	4.4	3.1			
227	9層	肥前陶器	碗	(11.2)	7.4	4.2	長石釉	沓碗	
228	9層	肥前陶器	片口鉢		(4.6)		灰釉？		
229	6層　黒色土	白磁	仏像	現存長 8.5	現存幅 5.8	現存厚 4.6	白磁釉		中国 徳化窯？
230	2層	不明陶器	瓶か壺		(5.4)		灰釉		
231	17層　灰色粘質土	中世須恵器	甕		(5.3)		灰釉		
232	18層	瀬戸	瓶		(7.4)		灰釉		
233	20層	瓷器系	甕		(15.2)		褐色		越前？
234	5層	石製品	石鉢		(13.0)		灰色		

Tab.10　大森座南地点出土遺物観察表 II

挿図番号	出土地点	種　別	器　種	大きさ (cm)			重量 (g)	色　調	備　考
				現存長	現存幅	現存厚			
235	6 層　黒色土	石製品	砥石	8.6	1.9	1.3	26.0	浅黄色	
236	5 層	石製品	石臼	21.3	18.4	11.5	3980		
237	5 層	石製品	石臼	28.3	12.6	10.0	4420		
238	9 層	銅製品	キセル (雁首)	3.7	1.5	0.1	4.5		
239	12 層	銅製品	キセル (吸口)	7.8	1.0	0.1	3.9		
240	9 層	鉄製品	鎌	13.2	17.7	2.0	80.7		
241	9 層	鉄製品	火箸	25.3	1.2	1.1	36.4		
242	17 層	鉄製品	ツルハシ	12.7	3.6	3.8	305		
243	9 層	金属製品	不明	6.0	4.4	0.2	10.6		
244	5 層　黒色土	銭貨	無文銭	1.5	1.5		0.1		
245	9 層	銭貨	無文銭	1.4	1.2		0.1		
246	9 層	銭貨	無文銭	1.6	1.6		0.1		
247	9 層	銭貨	無文銭	1.4	1.4		0.1		
248	9 層	銭貨	無文銭	1.4	1.4		0.1		
249	9 層	銭貨	無文銭	1.4	1.0		0.1		
250	9 層	銭貨	無文銭	1.2	1.2		0.1		
251	9 層	銭貨	無文銭	1.1	1.1		0.1		
252	12 層	銭貨	無文銭	1.5	1.0		0.1		
253	12 層	銭貨	無文銭	1.2	0.7		0.1		
254	12 層	銭貨	無文銭	1.5	0.9		0.1		
255	12 層	銭貨	無文銭	1.2	1.2		0.1		
256	12 層	銭貨	無文銭	0.8	0.2				
257	15 層　黒色土	木製品	下駄	19.6	9.2	5.5			
258	9 層	木製品	鍬刃床部	23.1	15.4	2.6			
259	9 層	木製品	桶の底板	42.8	9.0	2.0			
260	9 層	木製品	鎌の柄	34.9	3.8	2.2			
261	不明	木製品	柱材	42.0	12.2	12.2			
262	不明	木製品	柱材	48.3	19.3	15.3			

第５章　石見銀山遺跡宗岡家住宅発掘調査検出便槽状遺構の自然科学分析

第１節　はじめに

石見銀山遺跡は島根県大田市大森町地内に立地する遺跡である。本報は、同遺跡内、宗岡家住宅で検出された「便槽状遺構 (SX03)」が「便槽」であったことを確かめるために、大田市教育委員会が文化財調査コンサルタント株式会社に委託・実施した、寄生虫卵分析及び全リン分析、CN 分析の概報である。

第２節　採取試料について

Fig.41 に示す位置に置いて、分析試料を採取した。Fig.42 の断面図中に採取試料の詳細な位置を示す。中央地点試料№ 1(中央 1) で寄生虫卵分析を、同地点試料№ 1、2(中央 1、中央 2) で全リン分析を実施した。また CN 分析は、全 4 試料を対象に実施した。

Fig.42　調査区配置及び試料採取地点

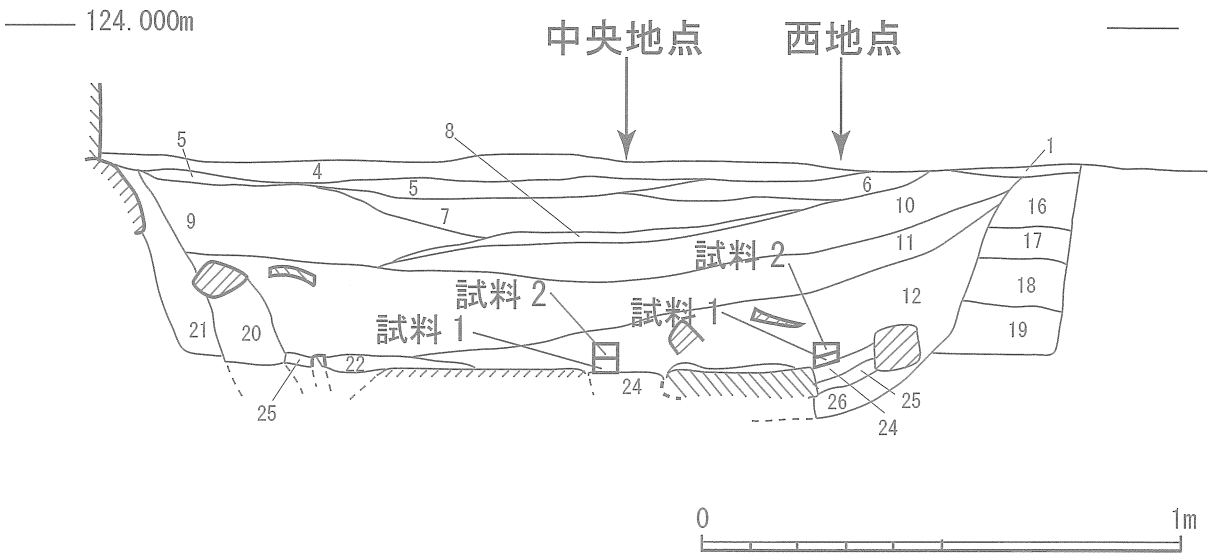


Fig.43　ＳＸ 03 断面図及び試料採取位置

第３節　分析方法及び分析結果

第１項　寄生虫卵分析

① 分析方法

金原 (2003) に従い分析処理を行い、プレパラートを作成した。作成したプレパラートを光学顕微鏡下 400 ～ 1000 倍で観察し、検出される寄生虫卵の同定・計数を行った。

② 分析結果

Tab.11 に分析結果を示した。中央 1 から、回虫卵が 1 個体検出された (Fig.43)。また、回虫の生態を Tab.12 にまとめた。

第２項　CN 分析及び全リン分析

① 分析方法

渡辺 (2014) に従って、測定を行った。

Tab.11　検出寄生虫卵化石組成表

試料名	中央 1(12 層最下部)
1　回虫卵　*Ascaris*(*lumbricoides*)　検出個体数	1
検出密度（個体 /cm３）	2
総数	1
寄生虫卵密度（個体 /cm３）	2
稀釈率（1/x）	2

Tab.12　寄生虫の種類と生態的な特徴

種類	固有宿主	寄生器官	感染方法
回虫	ヒト・ブタ	小腸	幼虫包蔵卵の経口摂取（堆肥の施肥により、野菜などの生食）

Tab.13　ＰＣＮ測定結果一覧

試料No.	Nitrogen (%)	Carbon (%)	Sulphur (%)	C/N	P/C	リン含有量 (g/kg)
中央 1	0.074	0.838	0.021	11.35	0.166	1.39
中央 2	0.189	3.013	0.026	15.96	0.09	2.84
西 1	0.163	1.514	0.062	9.28	-	-
西 2	0.175	2.349	0.034	13.45	-	-

② 分析結果

ＣＮ濃度測定結果及び全リン分析結果を Tab.13 に示す (Tab.13 には、C/N、P/C も示した)。

第４節　遺構が「便槽」であったことの可能性

昭和前半以前は、「し尿」は貴重な資源であったこと、更に臭気や衛生面から、便槽を廃棄する際には「し尿」をくみ取ることが多い。今回の「遺構」でも、「便槽」であったことを意識し、「し尿」のくみ取り残を求めて「12 層」最下部を分析試料とした。

第１項　寄生虫卵分析結果から

中央１で寄生虫卵が検出された。しかし、その密度は２粒 /㎠と少なく、この遺構を「便槽」とするには低い値であった。

第２項　リン分析、CN 分析から

し尿そのもののリン、窒素、炭素を測定した資料はないが、し尿を活用した「ＡＺ有機」という肥料では、リン酸が 6.93％、窒素が 5.47％、炭素が 37.2％を示すことが報告されている (清和肥料工業株式会社，HP)。この値から求める P/C は 0.081、C/N は 6.8 となる。「ＡＺ有機」ではし尿を「微生物」によって分解しており、「ＡＺ有機」には微生物の遺骸も大量に含まれている。「バクテリア」の P/C(0.056) や C/N(5.6％) に近いことから、実際には「し尿」の P/C、C/N は、この値より高い可能性がある。

今回の測定で、中央１のＰ (リン) の濃度は 1.39g/kg(0.139％)、P/C は 0.166、C/N は 11.35 を示した。P/C、C/N ともに、先に示した「ＡＺ有機」に比べ高い値であり、し尿を示すとは考えられない値であった。一方、中央地点では P/C が上位で低く、C/N は上位で高い。更に西地点でも C/N は上位で高い。植物の P/C は低く、C/N は高いことから、今回のように上位ほど P/C が低く、C/N が高いことは、植物が混入しており、上位ほど混入量が多かったことを示唆する。

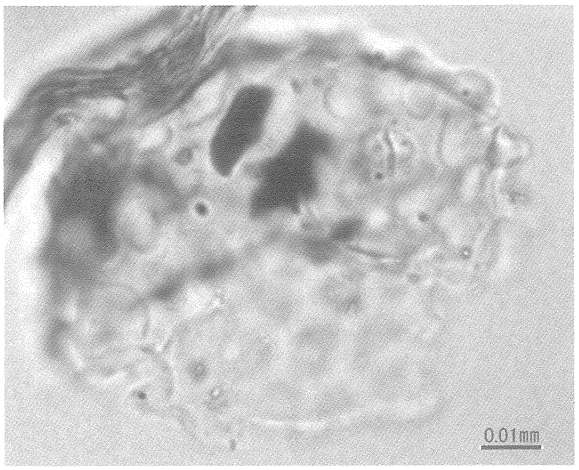


Fig.44　検出された回虫卵化石

第５節　小結

寄生虫卵分析結果、化学分析 (リン分析、CN 分析) 結果ともに、この遺構を「便槽」とするには不十分なものであった。P/C が高く、寄生虫卵が検出されることから、骨や野菜屑などを埋めたゴミ穴であった可能性も指摘できる。ただし、少量でも寄生虫卵が検出され、上位ほど植物の混入量が多かったことから、底部に「し尿」が残った「便槽」を、植物片を多く含む土壌で埋めた可能性も否定できない。

引用文献

植村　清・井関基弘・平井和光・木村英作 (2002) 寄生虫学テキスト [第２版]．263p，文光道，東京.

金原正明 (2003)，遺跡の土壌分析．環境考古学マニュアル，77-84，同成社，東京.

清和肥料工業株式会社 (HP),http://www.shk-net.co.jp/seminar/page/AZ301.pdf

渡辺正巳 (2014) 荒槇遺跡で検出された木枠遺構の PCN 分析．市井深田遺跡　荒槇遺跡　鈴見Ｂ遺跡１区 一般国道９号 (朝山大田道路) 改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書，2，103-107

第６章　総括

第１節　昆布山谷地区

第１項　Ⅰ区

Ⅰ区では、調査区西側の岩盤上に階段状遺構や溝状遺構（ＳＤ01・02)、水溜め状遺構（ＳＸ03)、柱穴（ＳＰ01～07)、用途不明遺構（ＳＸ04）などの遺構が彫り込まれた岩盤加工遺構（ＳＸ02）が検出された。ＳＸ02には柱穴や窪みが多く加工されていることから、岩盤に沿って建物があった可能性が想定される。

Ⅰ区の平坦面の一部にトレンチを設定して下層の確認を行なった結果、現地表面より下でも岩盤の加工をしていることが判明した。ＳＸ02の最下面で検出されたＳＤ02の埋土から17世紀前半頃の遺物が出土したことから、ＳＸ02は少なくとも江戸時代初期から利用が始まったことが明らかとなった。下層確認トレンチの断面では硬化面が７面確認され、江戸時代をとおして何度かの造成がなされていたようである。また、石垣が造られ、現在の地形が形成されたのは出土遺物から18世紀代とみられる。

石垣（ＳＷ02）によって構築された平坦面上からは建物遺構（ＳＢ01）が検出された。第２章でも報告したが、ＳＢ01は東西4.8ｍ（約16尺)、南北3.2ｍ以上の礎石建物跡である。柱間は東西が三間、南北が二間以上で、一間の長さは約２ｍである。ただし、東西の柱間の内で中央部のみは約110㎝で、東西の柱間の約半分になっている。これまでの発掘調査で検出されている建物遺構の多くは一間が197㎝（六尺五寸）を基準として建てられていることが多いが、ＳＢ01はその基準では建てられていない。Ⅰ区が石垣で造られた平坦面のため、広さが限定されていたなどの理由が考えられる。

Ⅰｄ区北壁に沿って東西にトレンチを設定し、下層の確認を行なった。その結果、最下部で岩盤加工遺構（ＳＸ05）などの遺構が検出された。ＳＸ05は西端部に段が加工され、その縁が被熱した遺構である。製錬に関連する遺構の可能性も考えられるが、現段階では一部が検出されたのみであるため言及を控え、今後の調査の課題としたい。

第２項　Ⅱ区

Ⅱ区では、調査区の中央部で検出された建物遺構（ＳＢ02）を中心として、それに関連する遺構が検出された。ＳＢ02は長辺約10.5ｍ、短辺４ｍ以上の礎石建物跡である。柱間は長辺が八間、短辺が四間以上で、柱間の長さが約80㎝と非常に短い。ＳＢ02は半間ごとに柱を置く構造であったとしても、一間が160㎝程度であり、ＳＢ02もこれまでの調査で検出されてきた197㎝（六尺五寸）の基準では建てられていない。ＳＢ02は軸が西側の石垣（ＳＷ02）とは平行になっておらず、東側の石垣（ＳＷ05）と平行になっている。ＳＷ05は昆布山谷の道と敷地を区画するための石垣と考えられ、谷筋を通る道と平行していたものと想定されることから、ＳＢ02は道と平行になるように建てられていたと考えられる。ＳＢ02の南側と西側には溝状遺構（ＳＤ03）があり、雨水等が建物内に入らないための工夫とみられる。

個別の遺構としてはＳＢ02内からは溝状遺構（ＳＤ04)、土坑（ＳＫ01)、ＳＢ02に関連する遺構（ＳＸ07～11）が検出された。ＳＸ07は検出状況から製錬炉とみられる遺構で、ＳＢ02が製錬にも関連する建物であったことを示すものである。ＳＸ08はＳＸ07に近接して検出されたことから、ＳＸ07と関連する施設であった可能性も考えられる。ＳＤ04はＳＢ02内部を通る溝で、南端部がＳＸ10につながっていることから、ＳＸ10に溜ったものをＳＢ02の外に出すための溝の可能性がある。ＳＸ10は方形の遺構で、床面が硬化していることから水溜めとして利用されていた可能性はある。しかし、深さは約10㎝と浅く、水溜めとしての機能を十分に果たせるかどうかは疑問であり、遺構の機能を想定することが難しい。ＳＸ09は赤褐色土を層状に叩き締めてつくられた遺構で、遺構面より10㎝程度高くなっている。調査時には鞴台としての機能も考慮していたが、周辺から炉跡が検出されなかったため、断定はできなかった。ＳＸ09～11はこれまで検出例のない遺構であるため、現時点では言及を避け、類例の検出を待ちたい。

第３項　Ⅲ区

建物遺構（ＳＢ04）が検出された。ＳＢ04は東西約5.7ｍ、南北約5.0ｍの割石を並べた基礎も持つ土台建物跡で、造成土から石見系陶器の大甕が出土したことから明治時代以降の建物と考えられる。ＳＢ04内部には炉跡とみられる遺構（ＳＸ15・16）や、金床石を固定していた跡の可能性がある遺構（ＳＫ02）、鞴台の可能性のある遺構（ＳＸ14）などがあり、鍛冶場の可能性が高い。ＳＫ02とＳＸ14・15は近接しており、それらが検出された南東隅を鍛冶場としていたものとみられる。

ＳＢ04の建築年代について、調査成果から考察する。第２章で報告したように、Ⅱ区の南東部で体部に鉄釉で文字が書かれた土瓶(62)が表採された。藤田組が銀山地内に構えた事務所は何度か名称を変えており、明治20(1887)年までが「大森鑛山所」で、明治21年に「大森鑛山出張所」に変わり、明治25年には「大森銀山出張所」となっている。本年度の発掘調査で出土した土瓶には「藤□(破損)組大森鑛山所」と書かれており、この遺物がＳＢ04に伴うならば、ＳＢ04は明治20年以降に建てられたものといえる。

一方、藤田組が鉱山経営に関連する書類の控えや記録を綴った『要書録』には、明治21年10月に「迩摩郡佐摩村（現在の大森町）二百七拾壱番地」に桁行三間、梁行弐間半で雑木葺の屋根を持つ鍛冶場を建てたことが記録されている。本年度の調査地点は大田市大森町ニ270－１番地で、要書録に記載された番地とは一つ北にずれている。しかし、要書録に記録されている建物の大きさ及び機能はＳＢ04と共通しており、ＳＢ04はこの鍛冶場であった可能性は高いと考えられる。なお、要書録の記録によると、この建物は明治23年９月には解体届が出されており、２年程度しか利用されなかったようである。

第２節　宗岡家住宅

宗岡家住宅の発掘調査は保存整備事業に先立ち、建物の修理や復原に必要な情報を得ることを目的として実施した。調査の結果、建物遺構（ＳＢ01）や裏庭施設関連遺構（ＳＸ04・05）、宗岡家より古い建物に関連する遺構（ＳＸ03）などが検出され、施設の様相や正確な位置・規模、土地利用の変遷履歴に関する成果が得られた。

ＳＢ01は屋敷地の北東部で検出された桁行約９ｍ、梁行約３ｍの建物遺構である。東半と西半で基礎の構造が異なっており、東半が割石基礎、西半が延べ石基礎である。西半の切石基礎にはほぞ穴が開いているが、このほぞ穴が柱を立てるためのものであれば、ＳＢ01西半部は一間を150㎝（五尺）とする建物であったといえる。

宗岡家の主屋は柱間を197㎝（六尺五寸）としていることから、主屋と納屋では建てる際の基準が異なっていたようである。

また、ＳＢ01の東半の割石基礎部分と西半の延べ石基礎部分は軸が若干ずれており、それぞれの建てられた時期が異なる可能性がある。検出状況から、東半は単独で建物が建つようになっているが、西半は東側に基礎がなく、東半の割石基礎につながる構造になっている。そのため、東半の割石基礎部分が先に建てられ、西半の延べ石基礎部分が後から建てられたと考えられる。

離れ東側の裏庭では通路跡（ＳＸ04）や石列（ＳＸ05）などの庭の施設に関連する遺構が検出された。同じく離れ東側で検出された遺構に南隣との境になっている石垣（ＳＷ02）があるが、ＳＷ02の構築面はＳＸ04・05よりも上であることから、庭施設を埋めたのちに構築した遺構と考えられる。離れはこのＳＷ02の上に南側の柱を載せていることから、現在の建物は石垣と同時か後から建てられたと考えられる。

下層確認トレンチでは、地表面から約40㎝よりも下位は河川による自然堆積層であることが明らかとなった。宗岡家屋敷地の東側はＳＸ03などが構築された段階から利用が開始されたものと考えられる。

ＳＸ03は宗岡家が建つ前にこの屋敷地を所有していた福本家に関連する遺構とみられ、福本家が居住していた頃に屋敷地東側の開発が行われたものと考えられる。平成18(2006)年度に屋敷地西部の発掘調査を実施した際には16世紀末～17世紀初頭の遺構が検出されており、早くから利用されていたことが明らかとなっているが、屋敷地東側の利用は西側に比べてかなり遅れるようである。

第３節　試掘・立会調査

平成 26(2014) 年度は立会調査を４か所で、試掘調査を１か所で実施した。

特に、顕著な成果が得られたのは大森座浄化槽設置に伴う試掘調査である。ここで検出された堆積層の内で第２層は寛政の大火による炭と焼土とみられるが、この第２層は調査区内で道に面した西側でのみ確認され、東側には広がっていなかった。これは火が及んだ範囲を示すものと考えられ、寛政の大火の被害範囲を推定する上で重要な資料である。

また、江戸時代初期における活発な土地利用の様相が明らかとなったほか、銀山では初となる 13 世紀代の遺物が出土した。この遺物は石見銀山の研究において非常に重要な資料であるが、出土数が非常に限られているため、今後の資料の増加に期待したい。

引用・参考文献

島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会 1999『石見銀山遺跡総合調査報告書』第１冊【遺跡の概要】

島根県教育委員会・大田市教育委員会・温泉津町教育委員会・仁摩町教育委員会 1999『石見銀山遺跡総合調査報告書』第２冊【発掘調査・科学調査編】

島根県大田市 2006『史跡石見銀山遺跡保存管理計画書』

島根県教育委員会・大田市教育委員会 1999『石見銀山遺跡発掘調査報告』Ⅰ

中田健一他 2005『石見銀山遺跡発掘調査報告書』Ⅱ　島根県教育委員会・大田市教育委員会

中田健一・新川　隆 2013『石見銀山遺跡発掘調査報告書』Ⅲ 島根県教育委員会・大田市教育委員会

島根県教育委員会・大田市教育委員会 2000 ～ 2004『石見銀山遺跡発掘調査概要』10 ～ 14

大田市教育委員会 2006 ～ 2014『石見銀山遺跡発掘調査概要』15 ～ 22

新川　隆 2013『史跡石見銀山遺跡総合整備事業に伴う発掘調査報告書』大田市教育委員会

愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史　別編　窯業２　中世・近世　瀬戸系』

江戸遺跡研究会 2001『図説江戸考古学研究事典』

九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』

大橋康二 1984「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館

大橋康二 1994『古伊万里の文様　初期肥前磁器を中心に』理工学社

小野正敏「15 ～ 16 世紀の染付碗・皿の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2　1982

尾村　勝 2014「石見銀山遺跡昆布山谷地区の土地利用の変遷―文献史料と分布調査成果からみる―」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』４　島根県教育委員会・大田市教育委員会

嶋谷和彦 1994「堺出土の銭鋳型と中世後期の模鋳銭生産」『中世の出土銭－出土銭の調査と分類』 兵庫県埋蔵銭調査会

西尾克己 2013「石見銀山遺跡出土の在地系陶器・石見焼について（１)」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』３　島根県教育委員会・大田市教育委員会

西尾克己 2014「石見銀山遺跡出土の在地系陶器・石見焼について（２)」『世界遺産石見銀山遺跡の調査研究』４　島根県教育委員会・大田市教育委員会

西田宏子・大橋康二監修 1988『古伊万里』別冊太陽　日本のこころ 63　平凡社

藤澤良祐 1993「瀬戸美濃大窯の編年」『瀬戸市史　陶磁史編　四』

守岡正司・新川　隆 2011「陶磁器から見た石見銀山遺跡」『石見銀山遺跡テーマ別調査研究報告書』Ⅰ　島根県教育委員会・大田市教育委員会

目次謙一 2002「石見銀山遺跡の出土無文銭について」『石見銀山－石見銀山関係論集』島根県教育委員会